日田市埋蔵文化財調査報告書　第34集

日田条里上手地区Ⅲ
高瀬条里永平寺地区
尾　部　田　遺　跡

2001年
日田市教育委員会

序　　文

日田市は、古えの時代から今日まで、数多くの先人が暮らし、そして大切な文化財を数多く残し、守ってきた誇りある町です。

今回報告いたします本書は、現在の経済不況の中にありながらも、貴重な文化財を記録・保存するために、快く発掘調査にご理解をいただいた事業者の方々のご協力により発行することができました。

そのお気持ちに、深甚の謝意を表し、心より御礼申し上げます。

平成13年12月28日

日田市教育委員会
教育長　後　藤　元　晴

例　　言

1．本書は、有限会社双美工務店の委託により『日田条里上手地区Ⅲ』を、有限会社明代不動産の委託により『高瀬条里永平寺地区』を、貞清製材株式会社の委託により『尾部田遺跡』を日田市教育委員会が受託し行った埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．日田条里上手地区２次の調査にあたっては、事業主である有限会社双美工務店 代表取締役(故)高倉双美氏、高倉英治氏に、高瀬条里永平寺地区の調査にあたっては、有限会社明代不動産中川好明氏に、尾部田遺跡の調査にあたっては貞清製材株式会社　取締役社長貞清正信氏に全面的なご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

3．日田条里上手地区２次は、日田条里上手地区では１次、５次に続く３冊目の報告書であり、『日田条里上手地区Ⅲ』とする。

4．本書に掲載した写真のうち、空中写真撮影については㈲スカイサーベイ九州の委託により、個別の遺物写真撮影については㈲雅企画　長谷川正美氏の委託によるものを使用した。

5．本書に掲載した遺物のトレースについては㈲雅企画　財津香奈子氏の委託によるものを使用した。

6．現場での遺構実測及び個別の遺物実測については、一部を㈲雅企画に委託し、その他は各担当者が行った。

7．遺跡からの出土遺物、及び実測図・写真についてはすべて日田市埋蔵文化財センターに保管している。

8．本書の執筆は渡邊が尾部田遺跡11号住居跡出土遺物及び調査のまとめ１を、その他は行時が行った。

9．本書の編集は行時・渡邊と協議し、行時が行った。

本　文　目　次

序　文
例　言
目　次
日田条里上手地区Ⅲ
Ⅰ　はじめに …… 3
1．調査に至る経過 …… 3
2．調査の経過 …… 3
3．調査組織の構成 …… 3
4．遺跡の立地と環境 …… 4
Ⅱ　調査の内容 …… 7
1．調査の概要 …… 7
2．遺構と遺物 …… 7
1）掘立柱建物跡 …… 7
2）土　坑 …… 13
3）その他の遺構と遺物 …… 17
Ⅲ　調査のまとめ …… 18
高瀬条里永平寺地区
Ⅰ　はじめに …… 31
1．調査に至る経過 …… 31
2．調査の経過 …… 31
3．調査組織の構成 …… 31
4．遺跡の立地と環境 …… 32
Ⅱ　調査の内容 …… 35
1．調査の概要 …… 35
2．遺構と遺物 …… 35
1）掘立柱建物跡 …… 35
2）土　坑 …… 41
3）溝 …… 44
4）その他の遺構と遺物 …… 45
Ⅲ　調査のまとめ …… 46
尾 部 田 遺 跡
Ⅰ　はじめに …… 59
1．調査に至る経過 …… 59
2．調査の経過 …… 59
3．調査組織の構成 …… 59
4．遺跡の立地と環境 …… 60
Ⅱ　調査の内容 …… 63
1．調査の概要 …… 63
2．遺構と遺物 …… 63
1）竪穴住居跡 …… 63
2）掘立柱建物・溝・土坑 …… 77
Ⅲ　調査のまとめ …… 80

挿　図　目　次

日田条里上手地区Ⅲ
第１図　遺跡周辺の主要遺跡位置図(1/20,000)
第２図　調査区位置図(1/5,000)
第３図　調査区遺構配置図(1/250)
第４図　１号建物跡実測図(1/80)
第５図　２号建物跡実測図(1/80)
第６図　３号建物跡実測図(1/80)
第７図　４号建物跡実測図(1/80)
第８図　５号建物跡実測図(1/80)
第９図　６号建物跡実測図(1/80)
第10図　７号建物跡実測図(1/80)
第11図　建物柱穴出土遺物実測図(1/2・1/3・1/4)
第12図　１号土坑実測図(1/20)
第13図　２号土坑実測図(1/20)
第14図　３号土坑実測図(1/20)
第15図　４号土坑実測図(1/20)
第16図　土坑出土遺物実測図(1/2・1/3・1/4)
第17図　柱穴包含層出土遺物実測図(1/3・1/4)
第18図　調査区内出土遺物実測図(1/2・1/3)
高瀬条里永平寺地区
第19図　遺跡周辺の主要遺跡位置図(1/20,000)
第20図　調査区位置図(1/5,000)
第21図　調査区遺構配置図(1/200)
第22図　１号建物跡実測図(1/80)
第23図　２号建物跡実測図(1/80)
第24図　３号建物跡実測図(1/80)
第25図　４・５号建物跡実測図(1/80)
第26図　６号建物跡実測図(1/80)
第27図　７号建物跡実測図(1/80)
第28図　８号建物跡実測図(1/80)
第29図　９号建物跡実測図(1/80)
第30図　建物柱穴出土遺物実測図(1/3・1/4)
第31図　１号土坑実測図(1/30)
第32図　２号土坑実測図(1/30)
第33図　３号土坑実測図(1/30)
第34図　４号土坑実測図(1/30)
第35図　５号土坑実測図(1/60)
第36図　６号土坑実測図(1/30)
第37図　７号土坑実測図(1/30)
第38図　８号土坑実測図(1/30)
第39図　土坑出土遺物実測図(1/2・1/3・1/4)
第40図　柱穴出土遺物実測図(1/3・1/4)
第41図　調査区内出土遺物実測図(1/2・1/3・1/4)
第42図　日田市内中世遺構出土遺物(1/8)
尾部田遺跡
第43図　遺跡周辺の主要遺跡位置図(1/20,000)
第44図　調査区位置図(1/5,000)
第45図　調査区遺構配置図(1/200)
第46図　１号竪穴住居跡実測図(1/60)
第47図　１号竪穴住居跡付設土坑実測図(1/20)
第48図　１号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/3・1/4)
第49図　２号竪穴住居跡実測図(1/60)
第50図　３号竪穴住居跡実測図(1/60)
第51図　２・３号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/3・1/4)
第52図　４号竪穴住居跡実測図(1/60)
第53図　４号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/2・1/3・1/4)
第54図　５号竪穴住居跡実測図(1/60)
第55図　５号竪穴住居出土遺物跡実測図(1/2・1/3・1/4)
第56図　６号竪穴住居跡実測図(1/60)
第57図　６号竪穴住居出土遺物跡実測図(1/3・1/4)
第58図　７号竪穴住居跡実測図(1/60)
第59図　８号竪穴住居跡実測図(1/60)
第60図　８号竪穴住居出土遺物跡実測図(1/2・1/3・1/4)
第61図　９・10号竪穴住居跡実測図(1/60)
第62図　９号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/3・1/4)
第63図　９・10号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/2・1/3)
第64図　11号竪穴住居跡実測図(1/60)
第65図　11号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/3・1/4)
第66図　12号竪穴住居跡実測図(1/60)
第67図　13号竪穴住居跡実測図(1/60)
第68図　12・13号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/3・1/4)
第69図　１号建物跡実測図(1/80)
第70図　２号建物跡・１号溝実測図(1/80)
第71図　１号土坑実測図(1/20)
第72図　２号溝実測図(1/60)
第73図　建物跡柱穴・溝・土坑出土遺物実測図(1/3・1/4)

表　目　次

第１表　日田条里上手地区出土土器観察表１
第２表　日田条里上手地区出土土器観察表２
第３表　高瀬条里永平寺地区出土器観察表
第４表　尾部田遺跡出土土器観察表１
第５表　尾部田遺跡出土土器観察表２

図　版　目　次

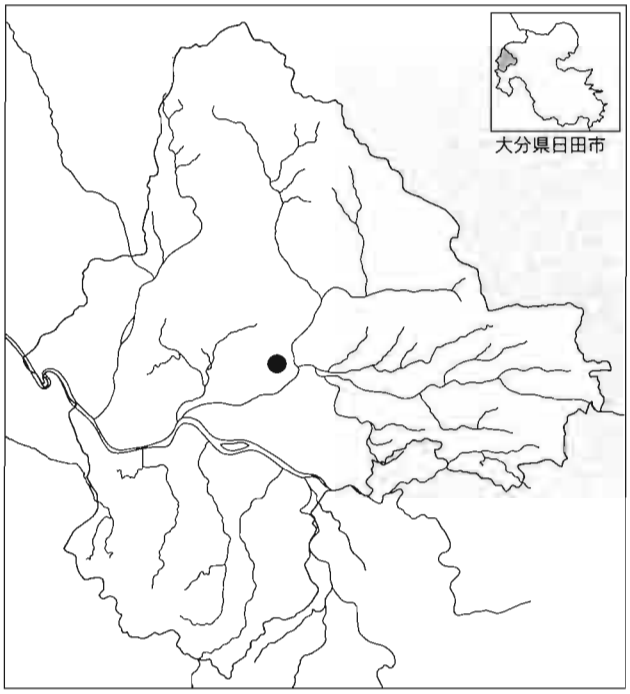
日田条里上手地区Ⅲ
巻頭カラー遺跡全景
図版１
（上　　段）遺跡全景（真上より）
（左２段目）１号建物跡　　（右２段目）３号建物跡
図版２
（左　　上）１号土坑完堀状況　　（右　　上）２号土坑半裁状況
（左２段目）２号土坑土層堆積状況　　（右２段目）３号土坑土層堆積状況
（左３段目）３号土坑遺物出土状況　　（右３段目）４号土坑土層堆積状況
（左　　下）４号土坑遺物出土状況　　（右　　下）４号土坑土層堆積状況
図版３　遺跡出土遺物１
図版４　遺跡出土遺物２
図版５　遺跡出土遺物３

高瀬条里永平寺地区
巻頭カラー遺跡全景
図版６
（上　　段）遺跡全景（真上より）　　（下　　段）遺跡全景（真上より）
図版７
（左　　上）１～７号建物跡　　（右　　上）８・９号建物
（左２段目）１～７号建物跡　　（右２段目）柱穴内土器出土状況
（左３段目）柱穴内土器出土状況　　（右３段目）１号土坑遺物出土状況
（左　　下）１号土坑土層堆積状況　　（右　　下）２号土坑半裁状況
図版８
（左　　上）３号土坑集石検出状況　　（右　　上）３号土坑半裁状況
（左２段目）６号土坑集石検出状況　　（右２段目）６号土坑完堀状況
（左３段目）８号土坑集石検出状況　　（右３段目）８号土坑完堀状況
（左　　下）２号溝状遺構検出状況　　（右　　下）３号溝状遺構トレンチ完堀状況
図版９　遺跡出土遺物１
図版10　遺跡出土遺物２

尾 部 田 遺 跡
巻頭カラー遺跡全景
図版11
（上　　段）遺跡全景（真上より）　　（下　　段）遺跡全景（東方向より）
図版12
（左　　上）調査区西側住居跡群（真上より）　　（右　　上）調査区中央住居跡群（真上より）
（左２段目）１号竪穴住居跡　　（右２段目）１号住居跡内付設土坑遺物出土状況
（左３段目）２・３竪穴住居　　（右３段目）２号竪穴住居跡カマド
（左　　下）２号竪穴住居跡カマド内土層堆積状況　　（右　　下）４号竪穴住居跡
図版13
（左　　上）４号竪穴住居跡　　（右　　上）５・６号竪穴住居跡遺物出土状況
（左２段目）６号竪穴住居跡　　（右２段目）５・６五竪穴住居跡遺物出土状況
（左３段目）８号竪穴住居跡　　（右３段目）９号竪穴住居跡

日田条里上手地区Ⅲ

遺　跡　全　景



遺 跡 位 置 図

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経過

平成11年３月２日、有限会社双美工務店より日田市大字西有田字上手48-2.48-3.52番地に宅地分譲地を建設する計画があることから、市教育委員会に事前の照会文書が提出された。この事業予定地は日田条里跡として、古代に施工された条里制遺構が広く存在する範囲として知られている区域である。その中でもこの一帯は、日田条里上手地区として、平成９年度に発掘調査が実施され、古代から中世期にかけての建物跡などが発見されるなど、当該時期の集落の存在が明らかになっている。今回の事業予定地は、その隣接地にあたり、遺構の存在する可能性は高いと判断されることから、平成11年４月20日に立会調査を実施した。その結果、１次調査区とほぼ同時期の遺構や遺物が確認されたことから、この調査結果をふまえ、事業者である有限会社双美工務店代表取締役(故)高倉双美氏と協議を行った。協議では、遺構の確認された道路部分から、北半分の範囲を対象として、発掘調査を実施することで合意に達した。

その後スケジュール調整を行い、平成11年６月29日に委託契約書を締結し、平成11年７月28日から８月11日までの期間、発掘調査を実施することとなった。

２．調査の経過

発掘調査では、事業者の意向として、旧表土は搬出を行い、地盤から下は工事で使用する方針であったことから、機械によりまず一端表土除去を行い、次に地山面まで盤土下を除去しながら遺構検出作業を進めることとなった。８月３日にはその作業を終え、その間作業員により遺構の精査を順次行っていった。８月４日には、有限会社ランドマップに基準点の設置作業をしていただき、以後遺構の掘り下げを行った。

調査中、道路にかかる遺構については完掘し、道路より北側に関しての遺構については、工事により遺構を損なわないようにするとの事業者のご理解とご協力を頂き、遺構の時期や内容がわかる程度の調査を実施するにとどめた。その後、８月９日には掘下作業を終了し、10日に空中写真撮影及び実測作業を完了し、11日には主要遺構については真砂土による保存措置を行うとともに器材を撤収し、発掘調査業務を完了した。

３．調査組織の構成

調 査 主 体　日田市教育委員会
調査責任者　日田市教育長　加藤正俊（～平成12年11月）後藤元晴（平成12年11月～）
調 査 事 務　文化課課長原田俊隆　同課長補佐石井英信　同主査佐々木豊文
調　査　員　文化課主任土居和幸（～平成12年３月）同主任行時志郎（調査担当）
　　同主任吉田博嗣（調査担当）同主事若杉竜太（試掘担当）
　　同主事渡邉隆行（平成12年4月～）
調査作業員　中島カズ子、森山カメノ、伊藤キヨ子、武内アイ子、佐藤トシ子、小下　一、
　　後藤フクエ、吉長利夫、吉長ハルエ、園田光子、園田尚代、五島勇美子
整理作業員　小野香苗

４．遺跡の立地と環境

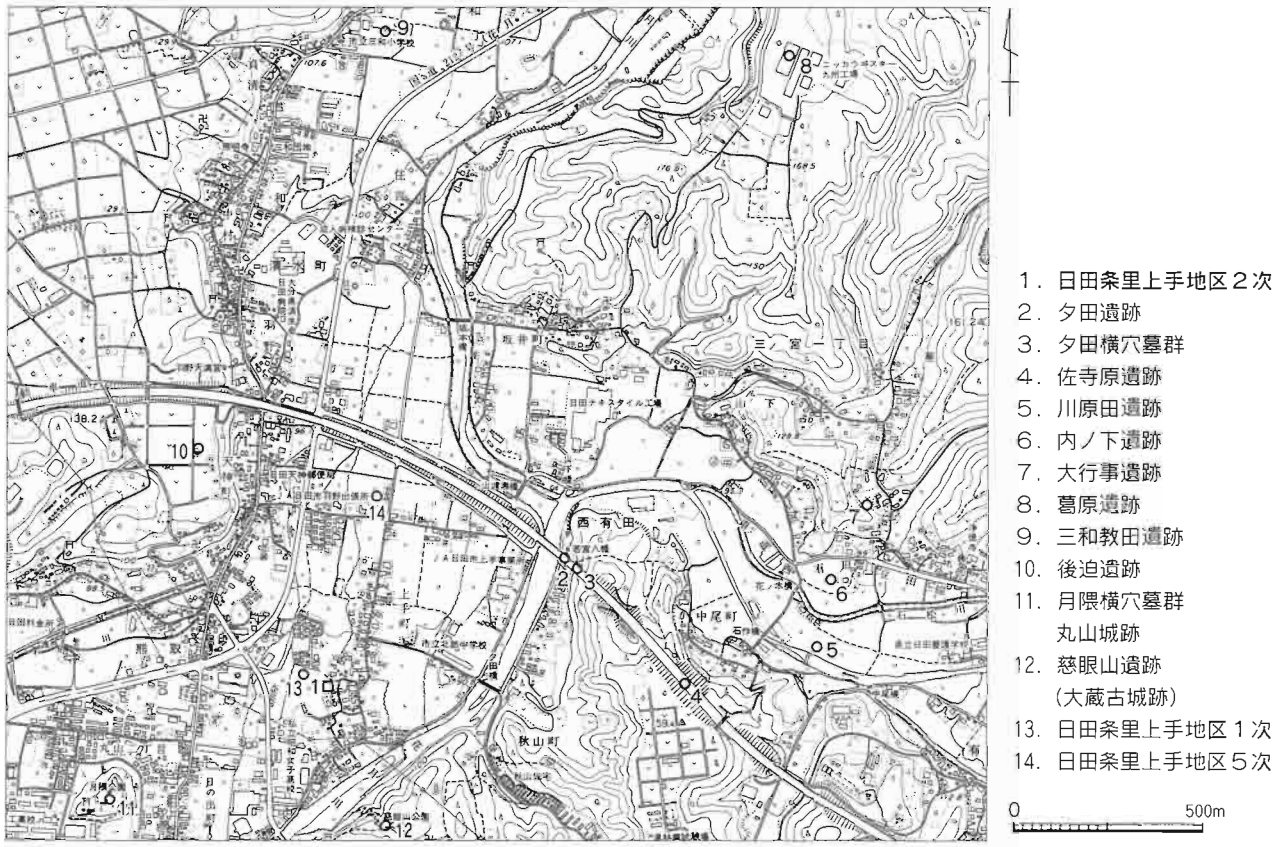
日田条里上手地区は、日田盆地北部の沖積微高地上に存在する。遺跡の東西には、比高差30メートルを測る通称佐寺原台地や山田原台地が沖積地の両側を囲むように広がっている。沖積地の東端には、三隈川の支流のひとつである花月川が、盆地中心部のある南方向に向かって流れている。花月川周辺部におけるこれまでの調査の結果、沖積地の多くは、現在の水田基盤下から砂レキ層が検出されており、水田開発が行われる前段階では、花月川一帯が広い氾濫原となっていたことをうかがわせる。今回の調査区の東側には上手地区の集落があるが、この場所は地図上では沖積地のほぼ中央の位置にあたる。地形を見る限りにおいて、集落のある一帯は、東西の台地裾部分が花月川や渡里川の旧河道として侵食され低くなっている状況がうかがえることから、これらの河川の氾濫により形成され中州のようになった微高地上にいつしか集落を構えたことが想像できる。現在この集落の一帯に残された地名をみると、中世に遡ると考えられるような「小入道」「内堀」などの字名が数多く残されており、古くに集落が形成されたことをおもわせる。

次に、これまでの発掘調査の成果をもとに周囲の遺跡の動向を見てみることにする。まず、本遺跡より花月川を上流に遡った河岸段丘上に立地する三和教田遺跡では、延7次の発掘調査によって、旧石器時代の遺物をはじめ、縄文時代の流路や溝、弥生時代の環濠や竪穴住居跡、古墳時代から古代の溝や竪穴住居跡などが発見され、沖積地においては市内でも数少ない、長期間に渡って継続する集落遺跡であることが明らかとなっている。また、沖積地を挟んだ台地上に立地する後迫遺跡や佐寺原遺跡では、いずれも弥生時代の多数の竪穴住居跡や墓が発見され、当該期の大規模な集落の存在が明らかとなっている。さらにその台地の斜面には、古墳時代の集団墓地である夕田横穴墓群や羽野横穴墓群があり、この夕田横穴墓群眼下に立地する夕田遺跡では、古墳時代前期の土坑などが発見され、この時期に集落が沖積地に存在していたことが明らかとなっている。また、佐寺原台地より西側に向かって派生する丘陵上には、古代から中世にかけて日田を支配した大蔵氏の居城跡として知られる慈眼山遺跡が存在し、これまで２度の試掘調査で中世期の土師器や輸入陶磁器が出土し、柱穴なども多数検出されている。

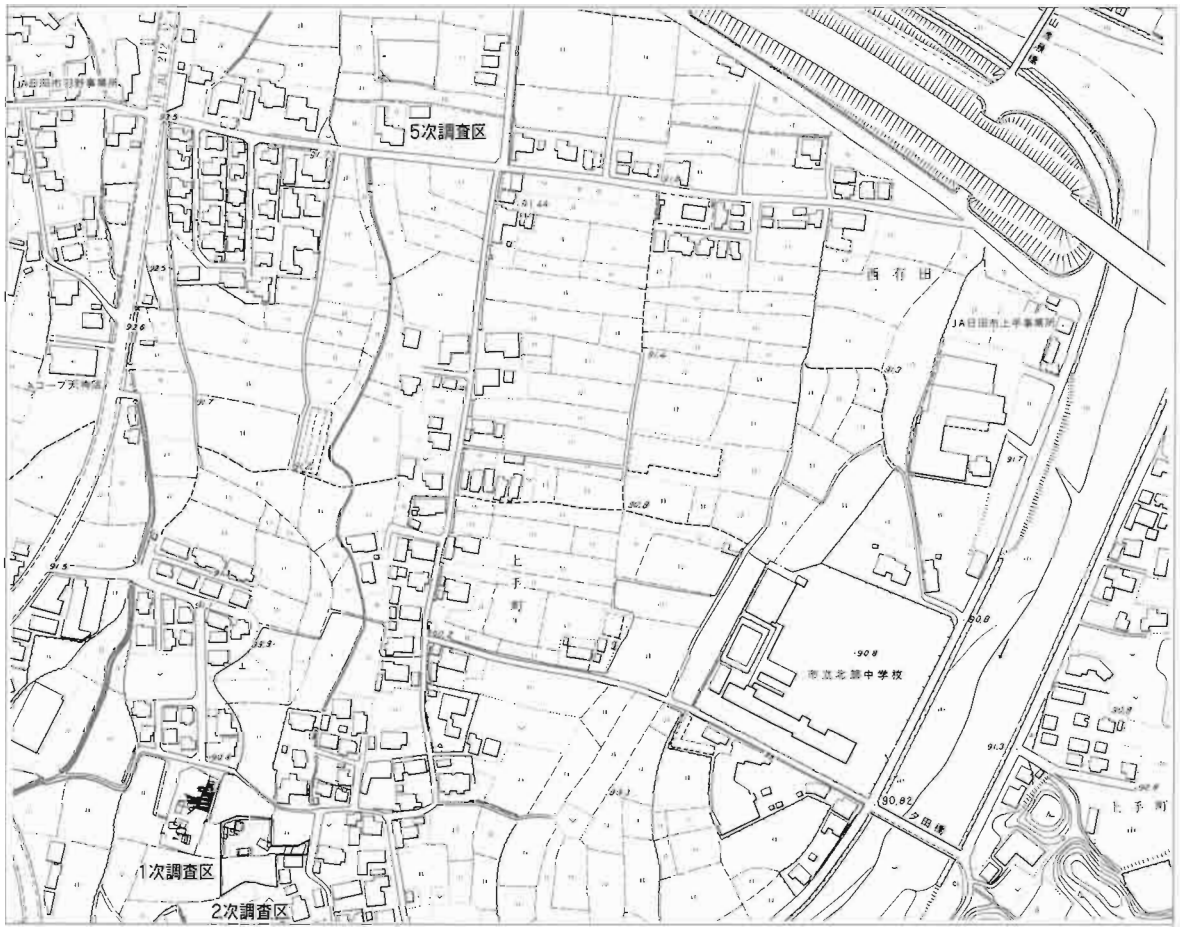
日田条里上手地区の調査は、平成２年度に九州横断自動車道建設に伴って日田条里遺跡群として調査が行われ、古墳時代前期の竪穴住居跡が１軒確認されて以降、平成９年度には本遺跡の隣接地の調査（１次調査）により、古代に属する掘立柱建物跡９棟などが確認され、さらに平成11年度の本調査区（２次調査）では古代から中世の掘立柱建物跡7棟や土坑4基が確認され、その後平成12年度に行われた調査（５次調査）では、古代末期から中世初頭にかけての掘立柱建物跡2棟発見されている。このように、日田条里上手地区では、近年の調査でとくに古代以降の時期にあたる遺構が相次いで発見され、遺跡の全体像が少しずつ明らかになってきている。

参考文献

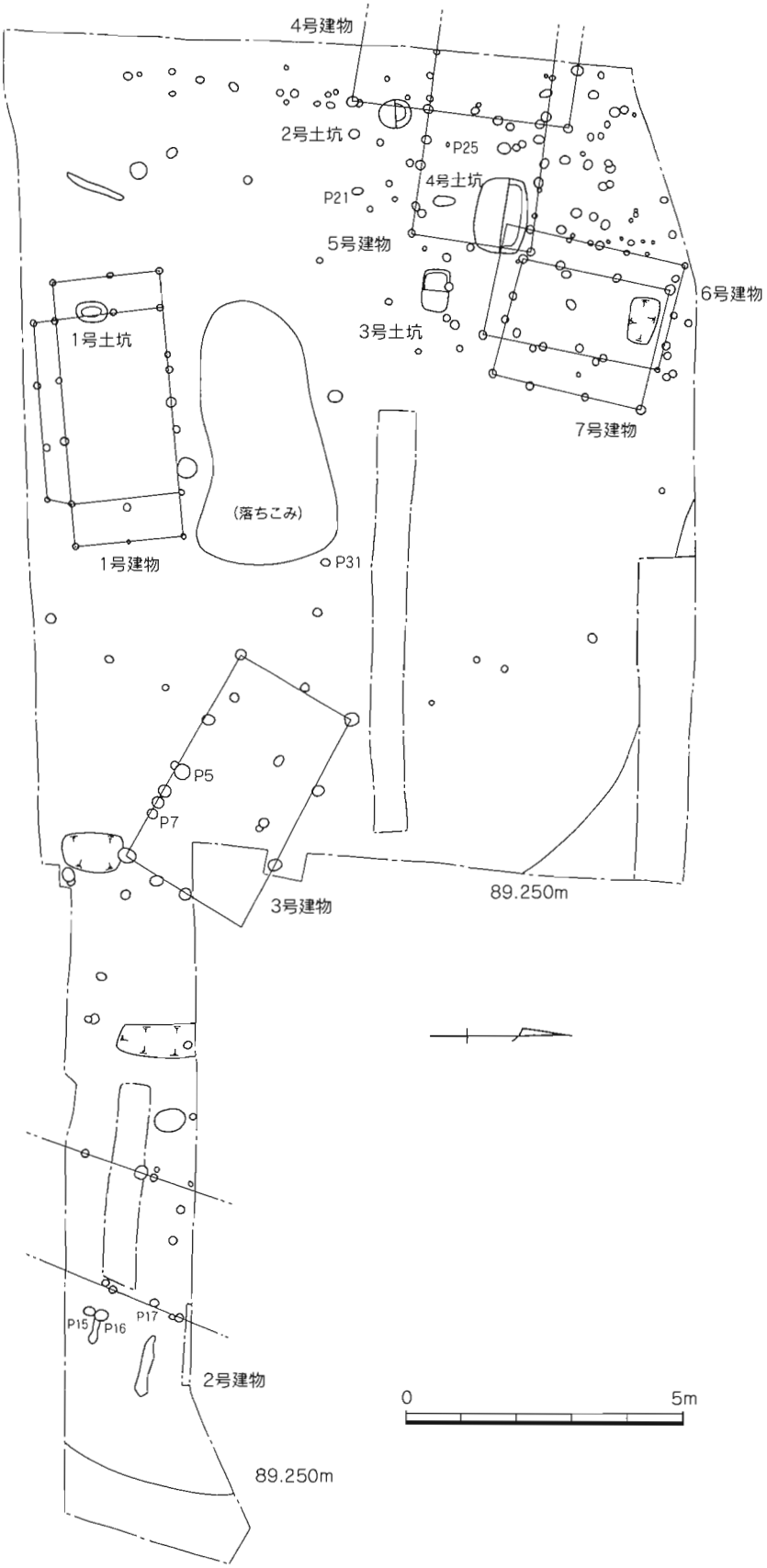
長順一郎「一豊後国日田郡一中世村落と武士団」『日田文化35号』日田市教育委員会1992／土居和幸編『三和教田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第14集　日田市教育委員会1998／吉田博嗣編『三和教田遺跡C地点』大分県文化財調査報告書第98輯　大分県教育委員会1997／土居和幸編『三和教田遺跡D地点』日田市埋蔵文化財調査報告書第24集　日田市教育委員会2000／友岡信彦編『日田条里遺跡群』九州横断自動車道関係発掘調査報告書(6)　大分県教育委員会1997／吉田博嗣編『日田条里上手地区』日田市埋蔵文化財調査報告書第21集　日田市教育委員会2000／若杉竜太編『日田条里上手地区５次』日田市埋蔵文化財調査報告書第31集　日田市教育委員会2001



第１図　調査区周辺の主要遺跡位置図（1/20,000）



第２図　調査区位置図（1/5,000）



第３図　調査区遺構配置図（1/250）

II　調査の内容

１．調査の概要

調査区内での遺構検出面（地山）は、黄灰色の砂質性の強い土で、その面までの深さは、現地表から約30～40㎝を測る。地形は、全体的にほぼ平坦に近く、南西方向に向かって緩やかに傾斜を示す。その傾斜した調査区南西部では、約10㎝程度の浅い落ちこみがみられ、黒褐色の埋土を呈する古代の遺物包含層が認められた。

調査区内では、最終的に掘立柱建物跡７棟、土坑４基の存在が認められたが、それ以外に建物として扱うことができなかった多数の柱穴が検出された。これらの遺構は、調査の経過でふれたように、道路部分にかかるものについては完掘し、それ以外については、遺構の時期や内容が把握できる範囲内での確認調査にとどめている。

２．遺構と遺物

１）掘立柱建物跡

１号建物跡（第3・4図）

調査区南側で確認された東西棟の建物で、北面を除くすべての面に庇が付設されている。身舎の規模は、梁間２間（約4.0m）、桁行３間（約6.7m）を測り、梁間方向の柱間平均は約2.0m、桁行方向の柱間平均は約2.2mを測る。身舎の延床面積は約26.8㎡で、庇を含めた延床面積は約43.5㎡を測る。建物の軸方位はN-７°-Wである。柱穴の検出面での掘り方の大きさは15㎝～25㎝と小さく、深さは15㎝～50㎝とばらつきがある。柱穴の中からは、土師器などの小破片が出土した。

１号建物跡出土遺物（第11図）

１はP４、２はP１、３はP７、４はP５より出土。いずれも土師器坏である。１の口縁部は斜め方向に立ち上がり、口唇部はわずかに肥厚する。外面には轆轤整形時の凹凸が残る。２の底部はややレンズ状となり、底面はヘラ切り。３は底面糸切り。４は高台付埦である。

２号掘立柱建物跡（第３・５図）

調査区東端で確認された南北棟の建物で、調査区外に展開する。桁行２間以上で、梁間方向の長さ約4.3m、桁行方向の柱間は約2.6mを測る。建物の軸方位はN-23°-Eである。柱穴の検出面での掘り方の大きさは約30㎝平均で、深さは25㎝～35㎝を測る。柱穴の中からは、土師器などの小破片が出土した。

２号建物跡出土遺物（第11図）

５はP２より出土の土師器坏底部である。底面はヘラ切りで、底端部から斜め方向に内湾気味に立ち上がる。

３号掘立柱建物跡（第3・6図）

調査区東側で確認された東西棟の建物で、梁間２間（約4.8m）、桁行５間（約8.4m）を測り、梁間方向の柱間平均は約2.4m、桁行方向の柱間平均は約2.8mを測る。建物延床面積は約40.3㎡で、建物の軸方位はN-31°-Eである。柱穴の検出面での掘り方の大きさは30cm～50cmを測る。柱穴の深さは15cm～50cmを測る。柱穴の中からは、土師器などの小破片が出土した。

３号建物跡出土遺物（第11図）

６・10はP３より、７～９、11・12はP４より出土。６～12は土師器坏である。６の口縁部は直線的に斜め方向に立ち上がる。外面は轆轤回転横ナデ時の凹凸がみられる。7の口縁部はやや外反気味に立ち上がる。8～11はいずれも底部で、底面はヘラ切り。12は大型の土師器杯底部である。底面は糸切り。

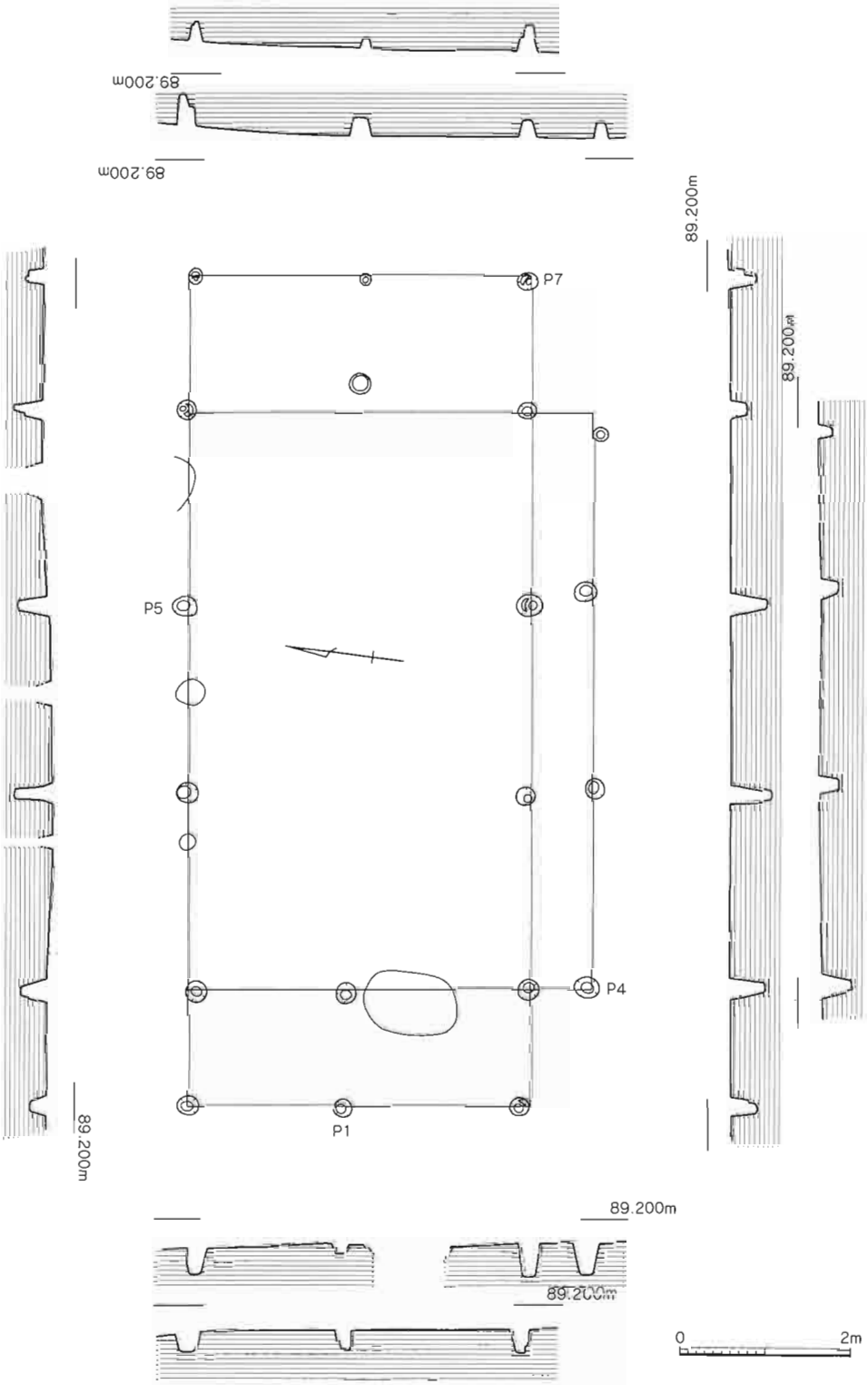
４号掘立柱建物跡（第３・７図）

調査区西端で確認された南北棟の建物で、梁間(２)間、桁行４間（約10.6m）を測り、梁間方向の柱間は約2.2m、桁行方向の柱間平均は約2.65mを測る。建物延床面積は推定で約46.6㎡と大型で、建物の軸方位はN-5°-Eである。柱穴の検出面での掘り方の大きさは平均で約30㎝を測り、深さは25㎝～35㎝を測る。柱穴の中からは、土師器などの小破片が出土した。

４号建物跡

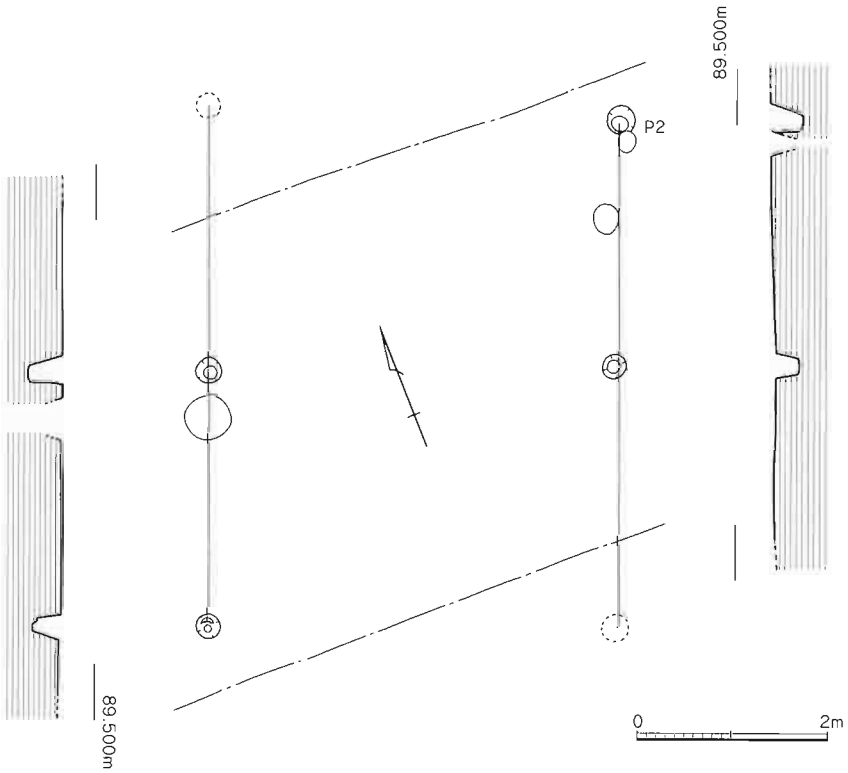
出土遺物（第11図）

13・14はP２より、15・16はP１より出土。13・14は土師器小皿である。13の口縁部はやや斜め方向に内湾気味に立ち上り、端部は丸く収める。14の底面は糸切りで板状圧痕が残る。13と14は同一個体とおもわれる。15は須恵質土器坏の底部で、底

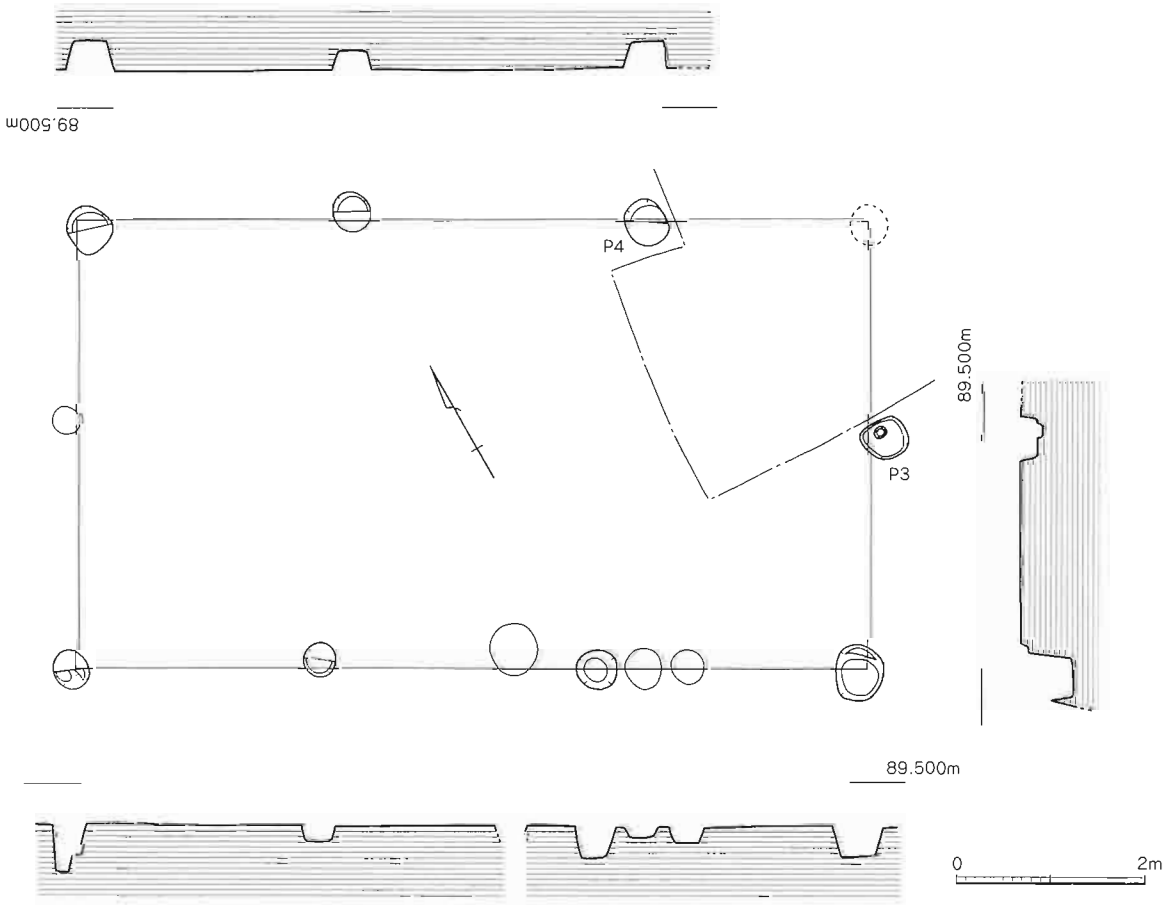


第４図　１号建物跡実測図（1/40）

面は糸切り。16は滑石製の小型石製品で、何らかの容器として「∞」状に加工したのだろうか。祭祀品の可能性がある。内外面にはノミ痕が顕著に残っている。最大長4.3cm、高さ1.4cm、幅2.2cm、内部の深さ1.1cmを測る。



第５図　２号建物跡実測図（1/80）



第６図　３号建物跡実測図（1/80）

５号建物跡（第３・８図）

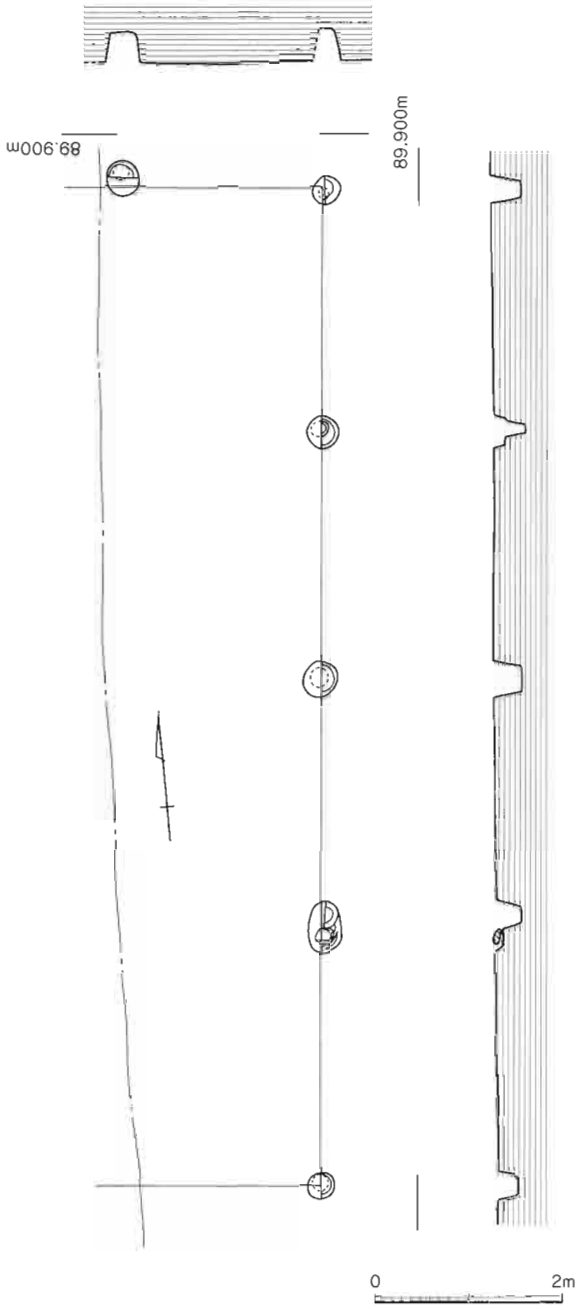
４号建物とほぼ同じ場所に棟の軸方向を違えて建てられた東西棟の建物で、西側の調査区外に続く。梁間2間（約4.4m）、桁行2間以上を測る。梁間方向の柱間平均は約2.2m、桁行方向の柱間平均は約2.6mを測る。建物の軸方位はN-7°-Eである。柱穴の検出面での掘り方の大きさは25cm平均を測り、深さは10cm～20cmと浅い。柱穴の中からは、土師器などの小破片が出土した。

５号建物跡出土遺物（第11図）

17～19はP1より、20はP2より出土。17・18は土師器小皿である。17の口縁部はやや斜め方向に外反気味に、18は逆に内湾気味に立ち上がる。19は土師器坏口縁部片で、やや外反気味に立ち上がる。20は高台付埦である。底部ヘラ切りの後、高台を貼付している。

６号建物跡（第３・９図）

４・５号建物の東側で確認された南北棟の建物で、7号建物と切り合い、４号土坑に切られる。梁間2間（約4.0m）、桁行3間（約6.4m）を測り、梁間方向の柱間平均は約2.0m、桁行方向の柱間平均は約2.1mを測る。建物の延床面積は約25.6㎡で、建物の軸方位はN-13°-Eである。柱穴の検出面での掘り方の大きさは約20cm平均と小さく、深さは10cm～20cmと浅い。柱穴の中からは、土師器などの小破片が出土した。



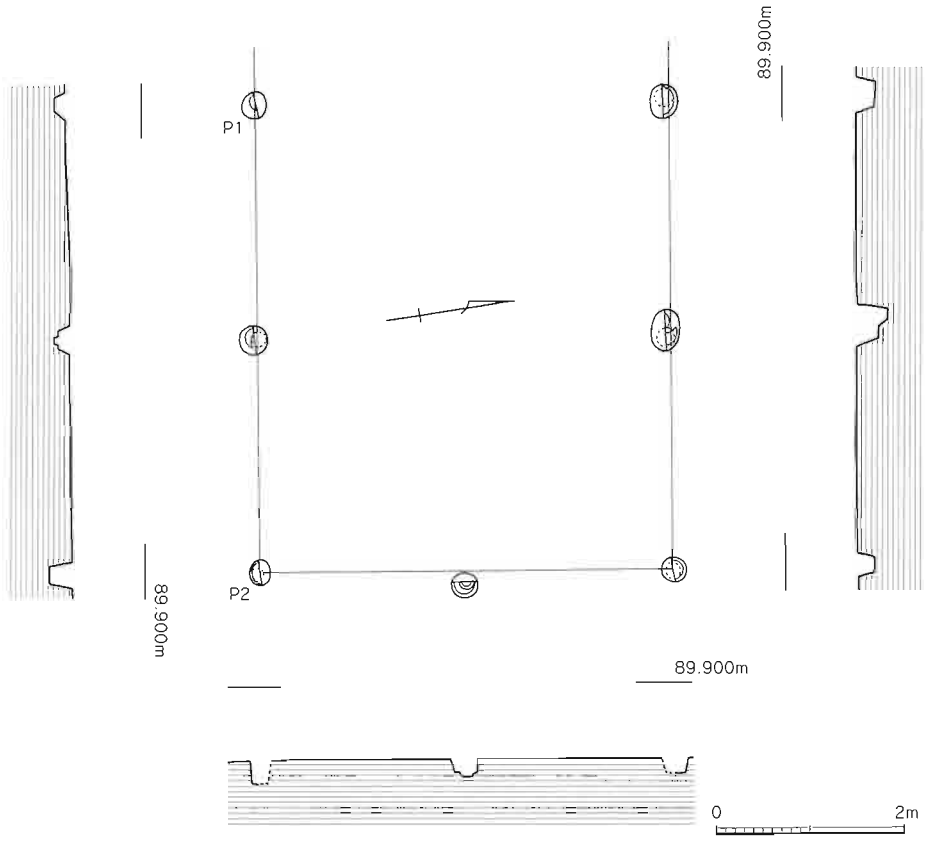
第７図　４号建物跡実測図（1/80）

６号建物跡出土遺物（第11図）

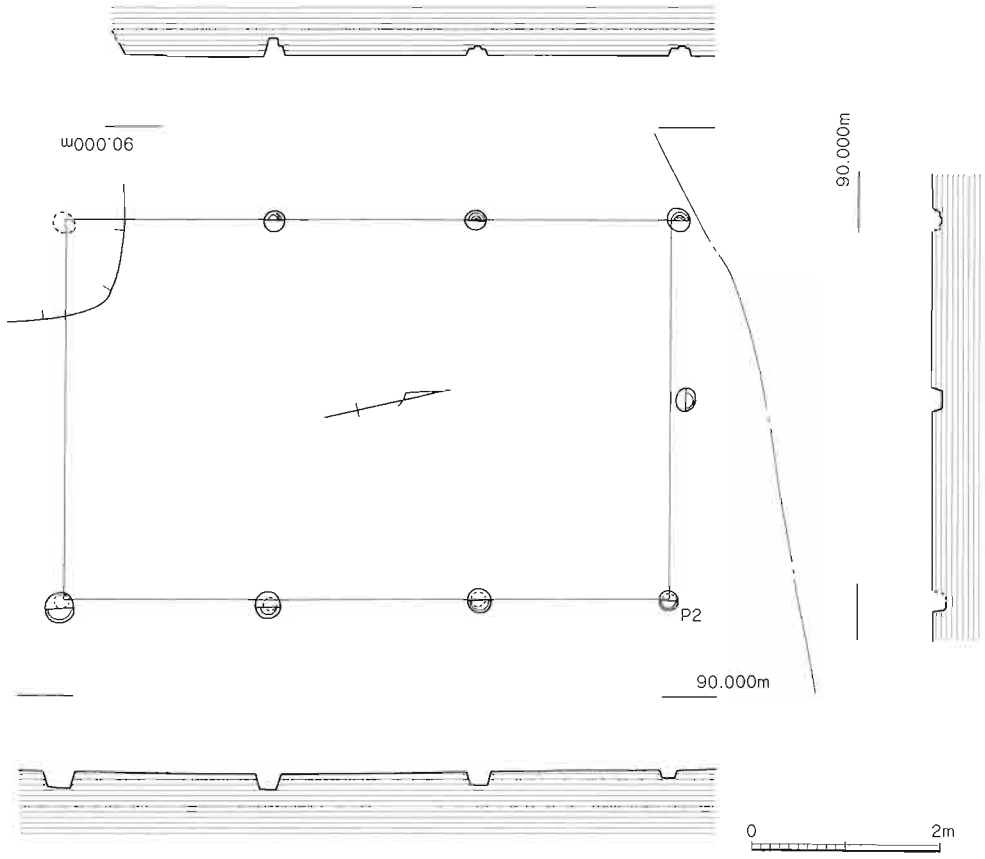
21・22はP2より出土の土師器小皿である。21は底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上り、底面はヘラ切りを施す。22も同様である。

７号掘立柱建物跡（第３・10図）

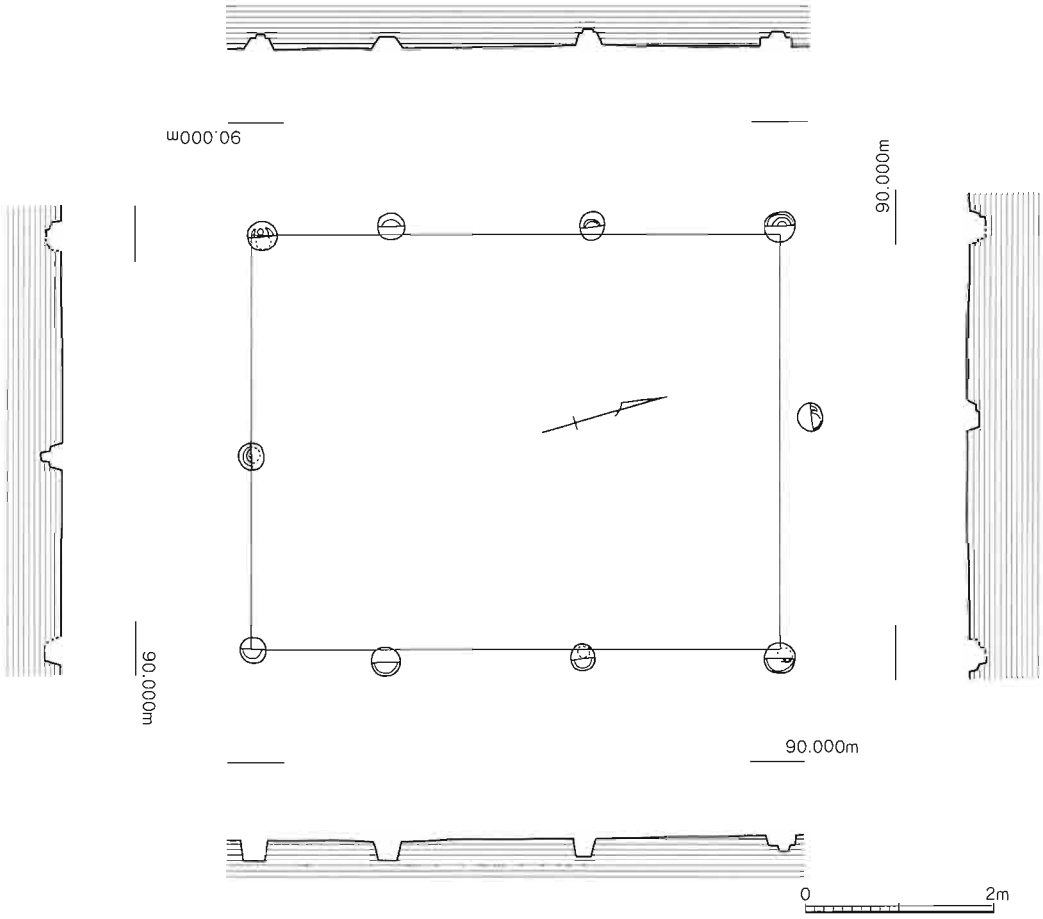
６号建物とほぼ同じ位置で確認された南北棟の建物で、６号建物と切り合う。梁間２間（約4.4m）、桁行３間（約5.6m）を測り、梁間方向の柱間平均は約2.2m、桁行方向の柱間平均は約1.9mを測る。建物の延床面積は約24.6㎡で、建物の軸方位はN-15°-Eである。柱穴の検出面での掘り方の大きさは約20cm平均と小さく、深さは10cm～25cmと浅い。柱穴の中からは、土師器などの小破片が出土したが、実測可能な遺物はなかった。



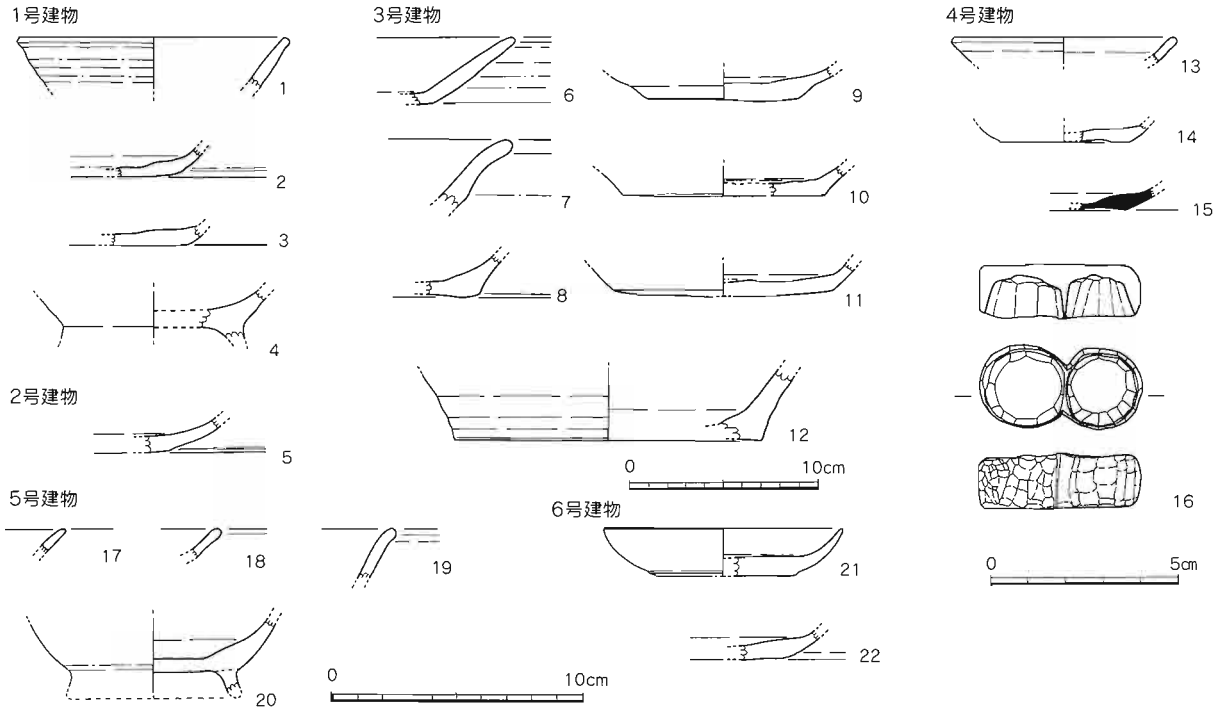
第８図　５号建物跡実測図（1/80）



第９図　６号建物跡実測図（1/80）



第10図　７号建物跡実測図（1/80）

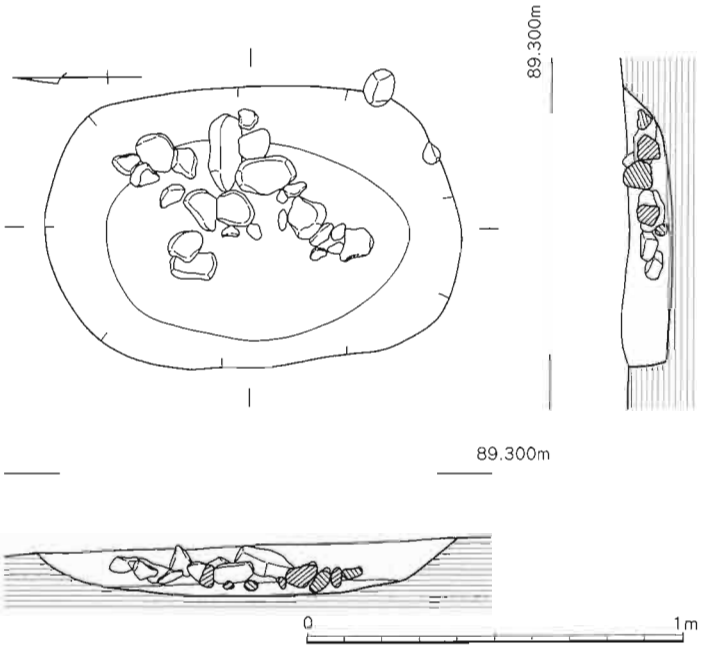


第11図　建物柱穴出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）

2） 土坑

1号土坑（第3・12図）

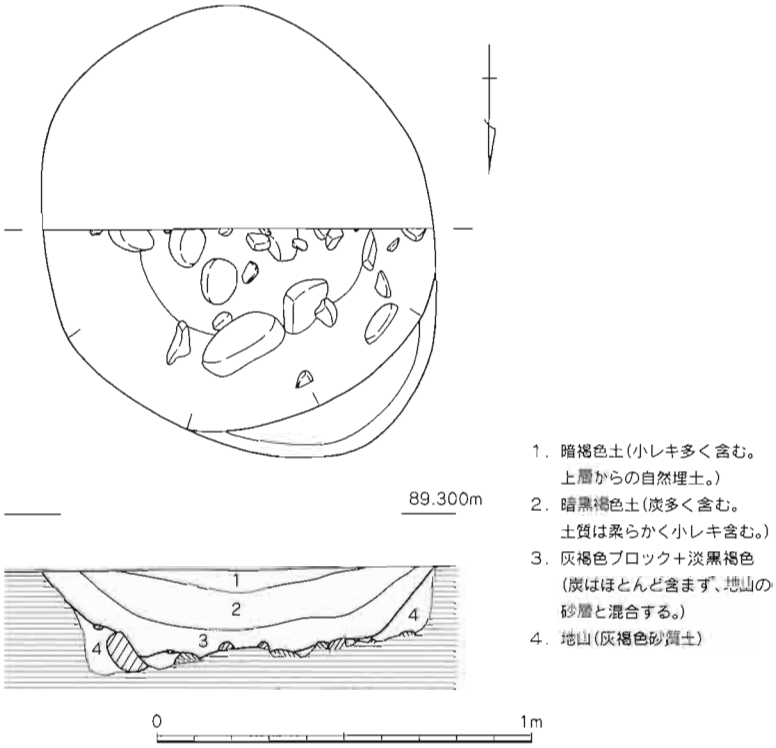
調査区の南西で確認された。検出面での規模は、長軸約1.1m、短軸約0.7mの楕円形プランを呈し、底面までの深さは約15cmを測る。壁面は斜め方向に緩やかに立ち上がり、底面はレンズ状に中央がやや深くなっている。土坑の中からは、扁平な河原石が東側に偏って、多数出土し、その間には炭層がみられた。また、土師器片も数点出土したが、実測可能な遺物はなかった。



第12図　1号土坑実測図（1/20）

2号土坑（第3・13図）

調査区の西側で確認され、北側のみを半裁して掘り下げた。検出面での規模は、直径約1mを測る円形プランを呈し、底面までの深さは約20cmを測る。壁面は斜め方向に緩やかに立ち上がり、底面はレキ層に繋がり、凹凸が著しい。土層を見ると、レンズ状に堆積しており自然に埋没したものと考えられる。この中からは数点土師器片が出土している。



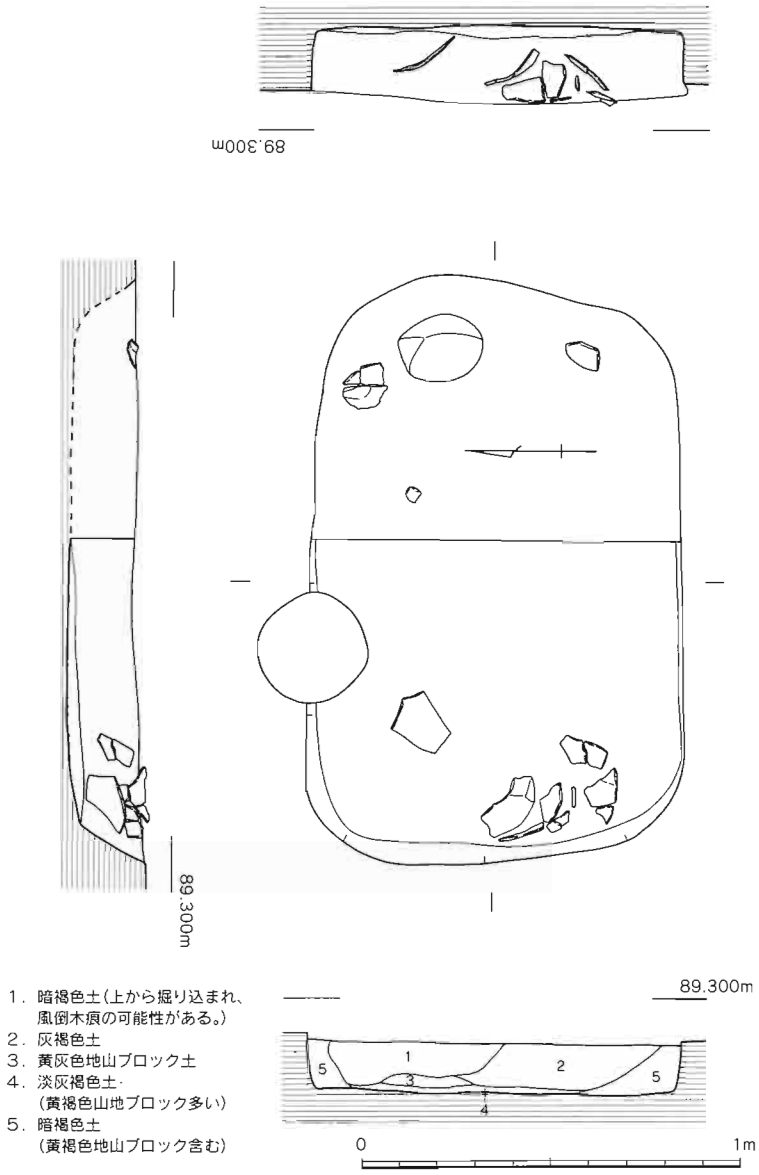
第13図　2号土坑実測図（1/20）

2号土坑出土遺物（第16図）

1・2は土師器小皿底部片である。底端部からは内湾気味に立ち上がる。底部は糸切り。

3号土坑（第14図）

調査区の西側で確認され、西側のみを半裁して掘り下げた。検出面での規模は、長軸約1.5m、短軸約1mを測る隅丸長方形プランを呈し、底面までの深さは約20cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦に整えている。土層を見ると、何度か掘り直しのような痕跡が見られた。この中からは数点土師器片などが出土している。



第14図　3号土坑実測図（1/20）

３号土坑出土遺物（第16図）

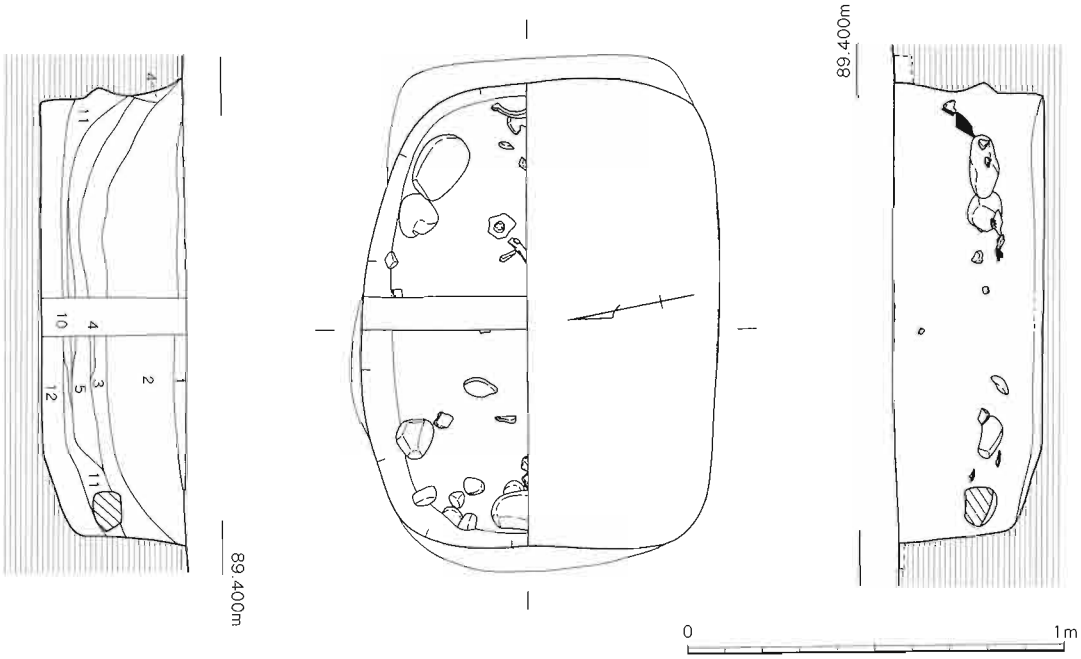
３・４は土師器小皿である。３は底端部から口縁部にかけて外反気味に立ち上る。底面はヘラ切り。４も３と同様に外反気味に立ち上がる。底面は糸切り。５・６は黒色土器である。５は丸みを帯びた体部から口縁部にかけては直口気味にのびている。内外面ヘラ磨きが行われている。６は深い体部を呈し、口縁部へはほぼ直口気味に立ち上がる。体部には短い高台が付けられ、口唇部はわずかに肥厚させる。内外面ヘラ磨きが行われ、外面下半は横方向のヘラ削りがみられる。７・８は甕である。７の口縁部は「く」の字に外反し、内面横方向のヘラ削りが施される。８は、頸部から胴部にかけての破片で、内外面荒いハケが顕著に残る。外面２次焼成を受ける。

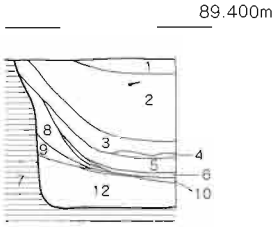
４号土坑（第３・15図）

調査区の西側で確認され、北側のみを半裁して掘り下げた。検出面での規模は、長軸約2.4m、短軸約1.9mを測る隅丸長方形プランを呈し、底面までの深さは約75cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦に整えている。土層を見ると、４・６・７層で炭や土器などがまとまって入っており、土坑の使用が終わった後に、投棄されたものと考えられる。この中からは多数の遺物が出土したが、その大半は２層下部中の遺物である。

４号土坑出土遺物（第16図）

9～16は土師器小皿である。９は分厚い底端部から口縁部にかけて斜め方向にほぼ直線的に延びる。底面はヘラ切り。10は口縁部片である。11・12は底端部から口縁部にかけて外反気味に延びる。いずれも底面は糸切り。13・14は口縁端部片。15・16は底面糸切り。17～20は土師器坏である。17の口縁部はラッパ状に大きく開く。18は口縁部片。19は底端部から内湾気味に立ち上がる。

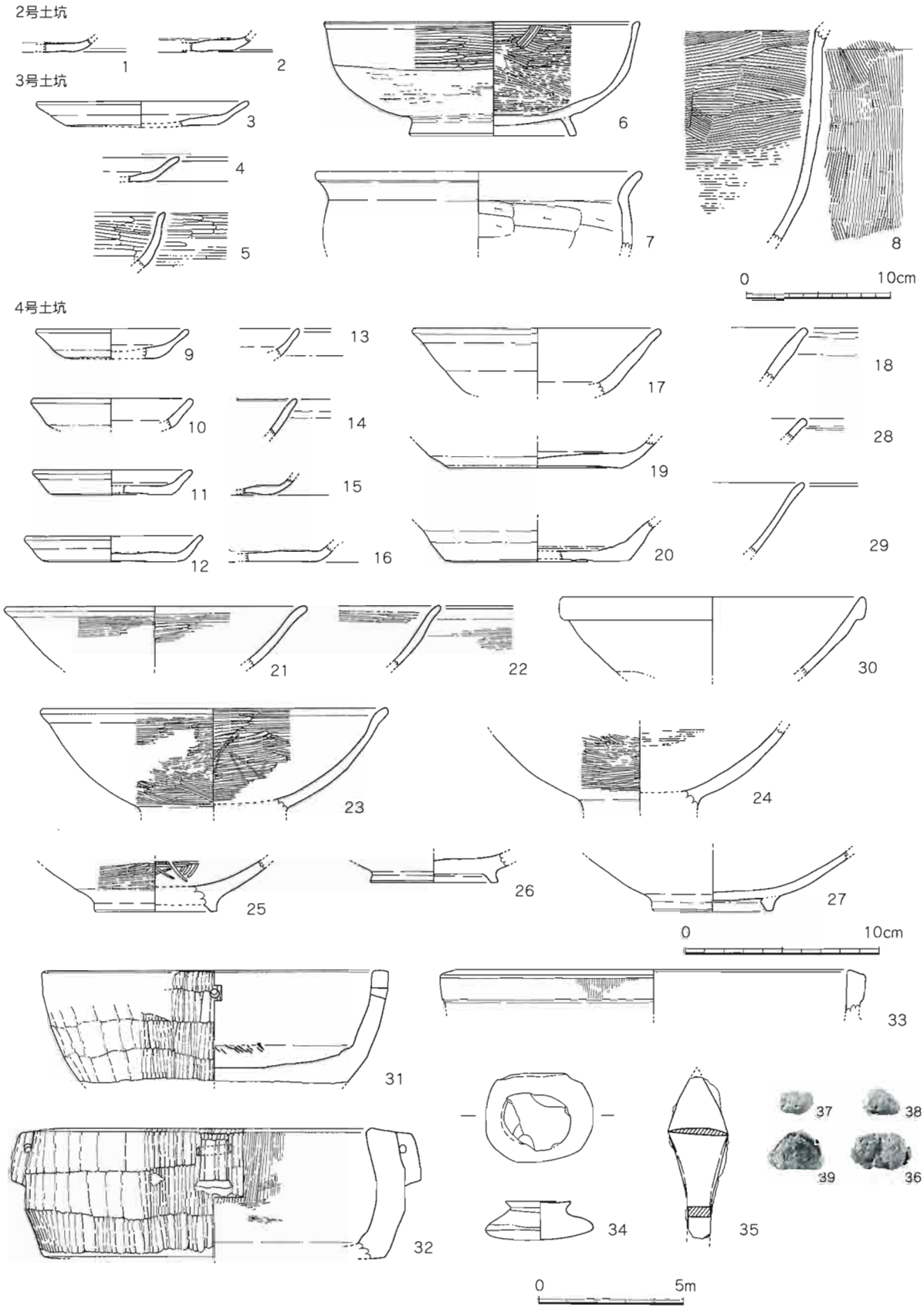




1．淡褐色土（遺構確認面上層の包含層）
2．淡黒褐色土（炭・焼土わずかに含みやわらか。遺物多く含む）
3．淡黒褐色土＋黄灰色地山ブロック土
4．黄灰色地山ブロック土
5．暗黒褐色土（炭・焼土多く含む）
6．淡層
7．淡黒褐色土
8．黄褐色ブロック＋淡黒褐色土（炭多く含む）
9．淡黒褐色土（炭はほとんど含まない）
10．淡層
11．焼土ブロック＋淡灰色砂質土
12．淡灰褐色砂質土（炭多く含む）

第15図　4号土坑実測図（1/40）

底面ヘラ切り。20は底端部から外反気味に開く。内面刷毛状のヘラの回転痕を不定方向に指でナデ消し、底面は糸切り。流れ込みの遺物であろう。21～26は黒色土器椀、27は土師器椀である。21は浅い体部から口縁部にかけては斜め方向にのび、端部付近でやや外反する。内外面ヘラ磨き。22・23も21と同様である。24は体部片。25は底部片で短い高台が付けられている。26も25と同様である。27は丸みを持った大きな体部に小さな高台が付けられている。内面ナデ、外面回転横ナデ。28～30は白磁碗である。28は端部付近が丸く肥厚する。29はやや丸みを帯びた体部を呈し、口縁端部付近でやや外反する。30は玉縁口縁で体部はあまり丸みを持たない。外面に無釉部分が見られる。31～34はいずれも滑石製品で、このうち31～33は石鍋である。31は口縁付近に穿孔が見られ、外面は鑿痕が顕著に残る。内面は仕上げ時にノミ痕を消した横方向の擦痕が残っている。32は長方形の取手が4カ所見られ、何れも側面に穿孔している。内外面に鑿痕が顕著に残る。33は口縁端部片である。34は用途不明で、何らかの当具の可能性がある。35は鉄鏃である。先端部は三角形を呈し、断面は蒲鉾状となる。残存長5.6cm、最大幅2.0cm。36～39は鉄滓である。36は羽口溶融滓で、重さ49.4g。37～39は鉄塊系遺物で重さは37が12.8g、38が13.4g、39が59.1g。



第16図　土坑出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）

3）その他の遺構と遺物

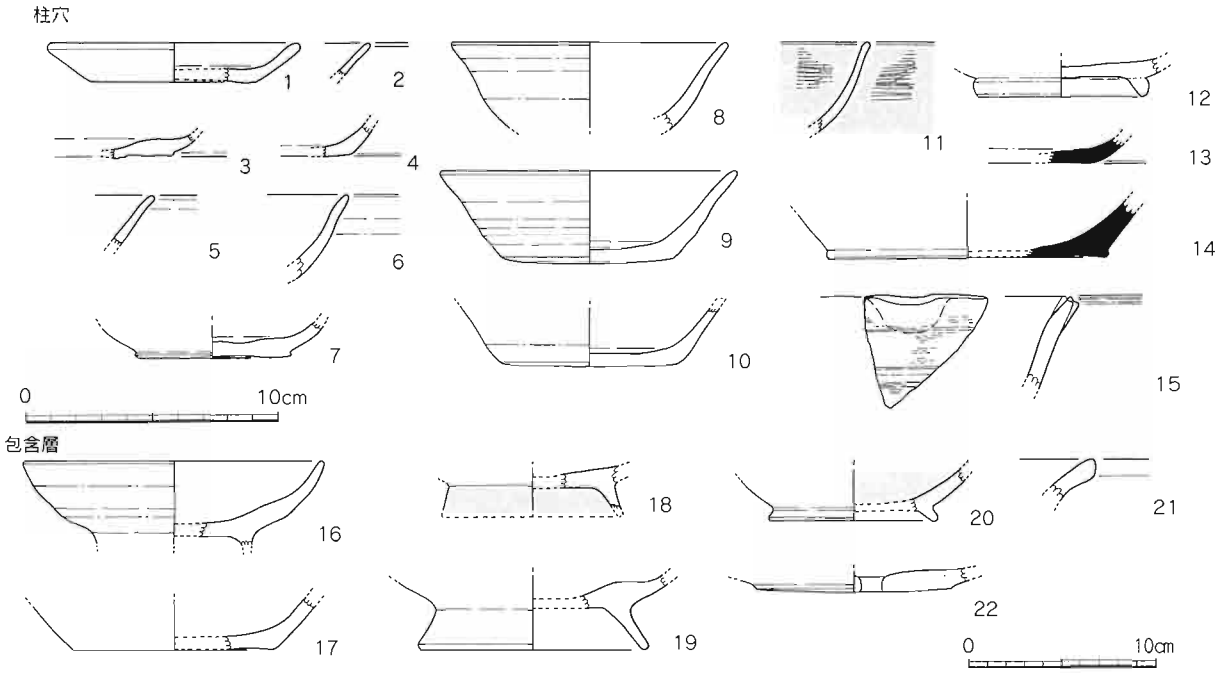
調査区の中からは、図示した建物群以外に多数の柱穴群が確認され、中から多くの遺物の出土があった。また、西側中央の落ち込みに堆積した黒色の包含層中や表土中からも、時期の特定できる貴重な遺物も多く出土している。ここでは、それらの遺物のうち図化可能な遺物をまとめ、説明を加えることにする。

柱穴出土遺物（第17図）

1はP25、2・3・11はP31、4～6・13はP5、7はP7、8～10はP21、12・14はP17、15はP16出土である。1～4は土師器小皿である。1は底端部から内湾気味に立ち上がる。底面糸切り。2は口縁部片。3・4は底部片。いずれも底面ヘラ切り。5～10は土師器坏である。5は口縁部に向かって直線的にのびる。6は口縁部に向かって内湾気味にのび、端部付近で外反する。9は底端部から内湾気味にのびる。8・9の口縁部はいずれもラッパ状に開く。9は底面ヘラ切り。10は底端部から7・8と同様ラッパ状に開く。10は底面ヘラ切り。11・12は黒色土器椀である。11は深い体部から口縁部にかけては直口気味に立ち上がる。内外面ヘラ磨き。12は黒色土器椀底部である。短い高台が付く。13は須恵質土器坏である。底面ヘラ切り。14は須恵質土器鉢である。底面糸切り。15は瓦質土器片口鉢である。

包含層出土遺物（第17図）

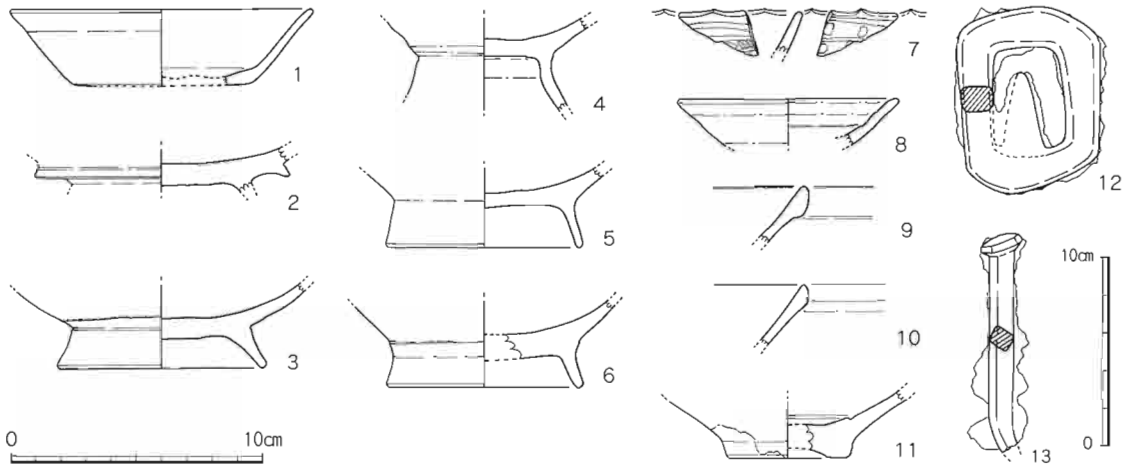
16・17は土師器坏である。16は底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。底端部に高台が付く。17も16と同様に底端部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。底面は糸切り。18～20は黒色土器椀の底部片である。21は土師器甕口縁部片である。22は瓦質土器蓋で、中央に穿孔がみられる。



第17図　柱穴・包含層出土遺物実測図（1/3・1/4）

調査区内出土遺物（第18図）

１は土師器坏である。底端部から口縁部にかけて外反気味にのびる。２は黒色土器埦底部片である。底端部に短い高台が付く。３から７は高台付土師器坏または埦である。３は擬高台の坏で、外面赤色顔料が塗布されていた。４は丸みを持つ体部に高い高台が付く。５～７も４と同様である。８は染付皿である。口縁端部は波状となり、内面には魚文を描く。９は白磁皿である。内面沈線を施す。10～12は白磁碗。10は玉縁状口縁を呈する。11は比較的小さく口縁部を肥厚させている。12は底部で、内面に沈線が見られる。13・14は鉄器である。13はベルトのように輪の内側に突起が見られる。最大長約5.0cm、幅約3.8cm、突起の長さ約2.0cmを測る。14は釘である。先端部を欠損する。残存長5.8cmを測る。



第18図　調査区内出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）

Ⅲ　調査のまとめ

１．器種構成について

遺跡からは、4号土坑を中心として、土師器や須恵器、瓦質土器、輸入陶磁器、石製品などの多数の遺物が出土したが、それらの器種構成はバラエティにとみ、また特定時期に製作された日常容器の特徴を示しているので、まずそれらを整理することにする。

まず、土師器については、小皿、坏、椀、甕などの種類がみられた。小皿は2・3・4号土坑、建物柱穴内などから出土している。いずれも厚めの底部から口縁部にかけてはやや外反気味に短くのびる。底面の調整は、4号土坑の11・12・15・16が糸切りであるほかは、大部分がヘラ切りである。坏は4号土坑や建物柱穴内、黒色包含層などから出土し、平底と高台付の2つのタイプがある。平底タイプのものはP21出土のようにややレンズ状に丸みを帯びた底部から、口縁部にかけて内湾気味に延び、端部付近はやや外反するものと、4号土坑出土17・18や表土中出土1のように同様の底部から直線的、あるいはわずかに外反気味に立ち上がる口縁部を持つものがある。高台付タイプは数少なく、5号建物柱穴出土20や包含層出土16などがある。椀は、通常の焼成か見られる土師器椀といぶし焼成により黒色化したいわゆる黒色土器椀の2種類が見られる。土師器椀は、高台付坏に比べ体部が丸みを持ち、全体に器形が大きい。4号土坑出土27や黒色包含層出土19、表土中出土３～６などがある。黒色土器椀は、内面のみ黒色化した内黒土器（黒色土器Ａ類）と内外底面

全体が黒色化している両黒土器（黒色土器Ｂ類）に分かれる。３・4号土坑、柱穴P31・P15、黒色包含層からそれぞれ両タイプが出土している。形態としては３号土坑５・６のように体部が深く、口縁部へ直口気味に延び、端部が逆三角形のように尖り気味となり、「ハ」の字に開くしっかりした高台が付くものと４号土坑21～25のように３号出土の土器に比べ、体部が浅く、口縁部は内湾しながら斜め方向にのび、端部は丸く収め、３号土坑に比べ短く、径も小さくなるものがある。いずれも内外面にはヘラ磨きの特徴がみられる。甕は３号土坑から出土しており、７のように精製なものと、８のように粗製のものに分かれる。次に須恵器については、出土数は少なく４号建物柱穴出土15や柱穴Ｐ５から坏底部片が1点、P17からは鉢底部片が1点それぞれ出土している。底部はいずれも糸切りである。また、瓦質土器は柱穴P17から片口擂鉢片、包含層から蓋がそれぞれ1点出土している。この他、輸入陶磁器類については、4号土坑出土28～30、表土中出土９～11の白磁椀、表土中出土８の白磁皿、表土中出土７の染付皿などが出土したが青磁碗の出土はない。さらに石製品として、４号建物柱穴出土16のように小型の容器や4号土坑出土31～33のような石鍋などもみられた。

２．遺構の年代について

これまで、市内でこの時期の遺物がまとまって出土した例はほとんどないため、本遺跡の遺構の年代を考える上では、すでに多くの研究がなされ、実年代の検討が行われている大宰府条坊跡出土資料を参考とし比較しながらみていくことにしたい。

本遺跡の検出遺構のうち、まとまって遺物が出土したのは、３号・４号土坑である。３号土坑出土資料のうち、黒色土器については中島氏により分類整理されている。ほぼ完形に近い状態である６は、中島氏の黒色土器椀Ｂ類Ⅲ―２類に器形的特徴が類する。このⅢ―２類は、大宰府条坊跡第87次SE015出土一括資料の中に含まれるものである。この資料の中には、薬師寺西僧坊跡出土の須恵器鉢と同形式の遺物が含まれており、西僧坊焼失の時期が文献より973年に記録されていることから、中島氏により10世紀末頃前後の年代設定が与えられている。また、土師器小皿3・4は、さきのSE015出土一括資料の中に含まれる土師器小皿と器形的特徴がやはり類している。このことから、3号土坑の年代については、ほぼそれと同時期と考えられる。４号土坑からは各種の遺物がまとまって出土している。これもまず黒色土器からみていくと、器形的には中島氏の黒色土器椀Ａ・Ｂ類Ⅲ―4類にその特徴を求めることができる。これはⅢ―２類より後出する形態としてとらえられている。また、共搬遺物として白磁碗があるが、断面や傾きなどが黒色土器の器形と非常に類似している特徴が認められる。この白磁碗は、山本氏により北宋期の貿易陶磁器として分類整理されている。それによれば白磁椀Ⅳ・Ⅴ類にこのタイプをあてることができる。氏によれば、白磁盛行期のＣ期に時期比定され、11世紀後半～12世紀前半代の実年代観が与えられている。石鍋は、森田氏により出現期の製作工程が明らかにされ、筒型容器として大宰府編年の中で10世紀末より登場してくることが指摘されている。また木戸氏により石鍋の形態による分類とその変化による年代観が与えられている。その中では32のように口縁部の四方に瘤状把手をつけるタイプはⅡ類ｂ-1に分類されている。31は穿孔が直接器面に施され把手をもたないタイプであるが、深さは32とさほど変わらず浅く、定型化される段階のものとしてⅡ類ｂの範疇として扱われるものであろう。木戸氏はⅡ類を石鍋のまわりに鍔をめぐらせるⅢ類が12世紀初頭から登場することから、その前段階と位置づけている。土師器については、径が復元可能な小皿が４点あるが、小皿の口径は8.0cm～

9.3㎝、器高1.3㎝～1.6㎝を測る。横田・森田氏によれば年代が下るにつれて径が小さくなり、また器高も低くなる指摘がされている。４号土坑の小皿は３号に比べ新しい傾向を示しているといえる。したがって、これらの遺物から総括して、４号土坑は11世紀後半段階の遺構として考えられる。なお、20については、内底面にヘラによる輪状痕が見られ、この遺物については中世後期としてみることができる。

この他の建物・土坑の時期については、少量の資料であることから細かく時期を示すことはできないが、大部分は、10世紀から11世紀代の時期として捉えることができる。ただし、２号建物Ｐ４出土12の資料は、底部が大きく焼成も他の遺物とは異なり悪い。遺物の中には、先の４号土坑出土20と同様、時期的には中世後期まで下る可能性があるものも含まれており、この建物についてはその時期まで下る可能性がある。このことは、３号建物の軸方位が他の建物と異なる点や掘り方もこの建物だけ大きい点からも指摘できる。また、その３号建物と軸方位があう2号建物も出土遺物は古代であるものの、時期は３号と同様下る可能性がある。

３．遺跡の性格について

日田条里上手地区では、１・２・５次調査を合わせると古代から中世にかけての18棟の掘立柱建物が確認されている。次に、これらの建物群の性格について考えてみることにする。

この地区では、古代の集落が営まれるのに先立って、古墳時代前期に日田条里遺跡で１軒竪穴住居跡が、夕田遺跡で２基の土坑がそれぞれ確認され、この時期に一端沖積地における開発が進んだことを物語っているが、しかしながら、その後の調査の中で、その時期以降古代に至るまで、沖積地での遺構の存在は確認されておらず、特殊な性格のものであったことがうかがえる。このことは、日田条里上手地区一帯が花月川の氾濫原であったためで、容易に開発を進めることができなかったからに他ならないと推測される。古代において、新たな集落が展開していった要因としては、その時期に進められた荘園開発によるものが大きいと考えられる。この時期の開発に伴う遺跡として荻鶴遺跡や大肥条里中村地区などが挙げられる。これらの遺跡は、花月川や大肥川沿いの河川の氾濫を受けやすい沖積地に立地し、水田開発に関連する水路や水田遺構などとともに掘立柱建物跡なども確認され、それらの開発の時期は、11世紀頃と推測される。このころの荘園開発の状況を示す資料としてあげられる「宇佐神領大鏡」によれば、長元９年（1036)、大蔵氏の証判を得た日下部氏によって、開発された土地が大宰府に寄進され、その後宇佐神宮の荘園になった経緯が記録として残されている。この時期は国司権限が強化され、奈良時代まで隆盛を誇っていた在地豪族層が衰えるとともに、新たに富豪の輩と呼ばれた新興豪族層が台頭する状況が各地で見られている。日田地域においては、10世紀頃より日下部氏にかわって大蔵氏が郡司として政治的地位を確立していたことが上記の文献から窺い知ることができる。この大蔵氏の居城は、日田条里上手地区より花月川を挟んで存在する慈眼山丘陵上であったことが知られ、また慈眼山眼下の裾部で調査が行われた慈眼山瀬戸口遺跡からは、８世紀代の墨書土器や11～12世紀にかけての整地層から念持仏が出土し、さらに15～16世紀にかけてとみられる大規模な濠に囲まれた建物群が確認され、大蔵氏と関連する中心的集落がその一帯に存在していることがうかがわれる。こうした背景にあって、大蔵氏の支配域に近い日田条里上手地区の集落立地は、こうした当時の大蔵氏を中心とする豪族層によって主体的に行われた、荘園開発の中で登場してきたものと推測される。

参考文献

1）中島恒次郎「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』日本中世土器研究会 1992

2）中島恒次郎「Ⅱ各地の地域相12.九州北部」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編真陽社 1995

3）山本信夫「北宋期貿易陶磁器の編年―大宰府出土例を中心として―」『貿易陶磁研究8』日本貿易陶磁研究会 1988

4）山本信夫「Ⅲ土器・陶磁器11(2)中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会真陽 1995

5）横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入陶磁器について―型式分類を中心に―」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館 1978

6）木戸雅寿「Ⅲ土器・陶磁器13石鍋」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会真陽社 1995

7）森田勉「滑石製容器―特に石鍋を中心として―」『大宰府陶磁器研究―森田勉氏遺稿集―』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会 1995（『佛教藝術』148号毎日新聞社より転載）

8）友岡信彦編『日田条里遺跡群他』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(6)大分県教育委員会 1997

9）友岡信彦編『夕田遺跡群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(14)　大分県教育委員会 1999

10）吉田博嗣編『日田条里上手地区』日田市埋蔵文化財調査報告書第21集 2000

11）若杉竜太編『日田条里上手地区5次』日田市埋蔵文化財調査報告書第31集 2001

12）西別府元日「第Ⅱ編古代・中世」『日田市史』日田市 1990

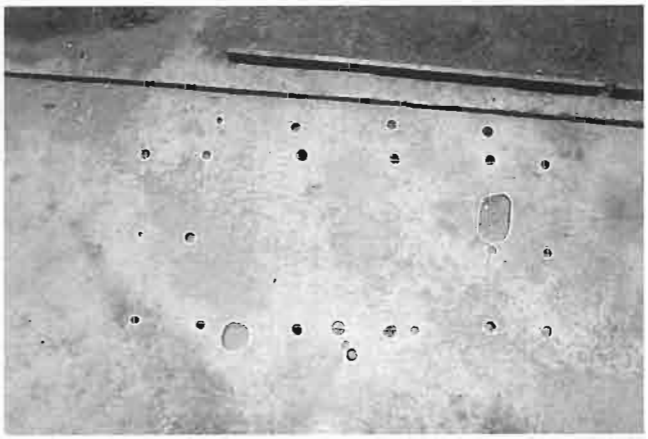
第１表　日田条里上手地区出土土器観察表（１）

挿図番号	遺物番号	遺構名	種別	器種	法量（　）は復元径(cm) 器高	口径	底径	胎土 石英／A・長石／B・角閃石／C・金雲母／D 赤色粒／E・白色粒／F・細砂粒／G	色調	備考
第11図	1	1号建物跡	土師器	坏		(10.9)		A．C．E	淡橙灰色	
第11図	2	1号建物跡	土師器	坏				A．B．C．E	淡茶色	
第11図	3	1号建物跡	土師器	坏				A．B．C．E	淡褐色	
第11図	4	1号建物跡	土師器	椀				A．B．C．E	淡灰茶色	
第11図	5	2号建物跡	土師器	坏				A．C．E	淡灰褐色	
第11図	6	3号建物跡	土師器	坏	2.7			A．B．C．E	淡茶灰色	
第11図	7	3号建物跡	土師器	坏				A．B．C．E	淡茶褐色	
第11図	8	3号建物跡	土師器	坏				A．B．C．E	淡灰褐色	
第11図	9	3号建物跡	土師器	坏				A．B．C．E	淡茶灰色	
第11図	10	3号建物跡	土師器	坏			(6.2)	A．C．E	淡茶色	
第11図	11	3号建物跡	土師器	坏			(8.2)	A．C．E	淡茶色	
第11図	12	3号建物跡	土師器	坏			(16.2)	A．B．C．E	淡茶褐色	
第11図	13	4号建物跡	土師器	小皿		(9.0)		A．B．C．E	橙褐色	
第11図	14	4号建物跡	土師器	小皿			(5.2)	A．B．C．E	橙褐色	
第11図	15	4号建物跡	須恵質土器	坏				A．B．C	淡黄灰色	
第11図	16	4号建物跡	小型石製品		1.4					
第11図	17	5号建物跡	土師器	小皿				A．B．C	淡灰色	
第11図	18	5号建物跡	土師器	小皿				A．C．E	淡茶褐色	
第11図	19	5号建物跡	土師器	坏				A．B．C．E	淡茶褐色	
第11図	20	5号建物跡	土師器	椀				A．B．C	淡灰白色	
第11図	21	6号建物跡	土師器	小皿	2.6	9.6	6.0	A．B．C．E	淡灰茶色	
第11図	22	6号建物跡	土師器	小皿				A．C．E	淡橙灰色	
第16図	1	2号土坑	土師器	小皿				A．C	淡茶灰色	
第16図	2	2号土坑	土師器	小皿				A．C．E	淡橙灰色	
第16図	3	3号土坑	土師器	小皿	1.3	11.2	8.0	A．C．E	淡灰褐色	
第16図	4	3号土坑	土師器	小皿				A．B．C．E	淡茶褐色	
第16図	5	3号土坑	黒色土器	椀				A	淡黒色	ヘラミガキ
第16図	6	3号土坑	黒色土器	椀	6.0	16.2	8.4	A．C．E	(内)淡黒色、(外)淡灰色	
第16図	7	3号土坑	土師器	甕		15.6		A．B．C．E		
第16図	8	3号土坑	土師器	甕				A．B．C．E	淡褐色	

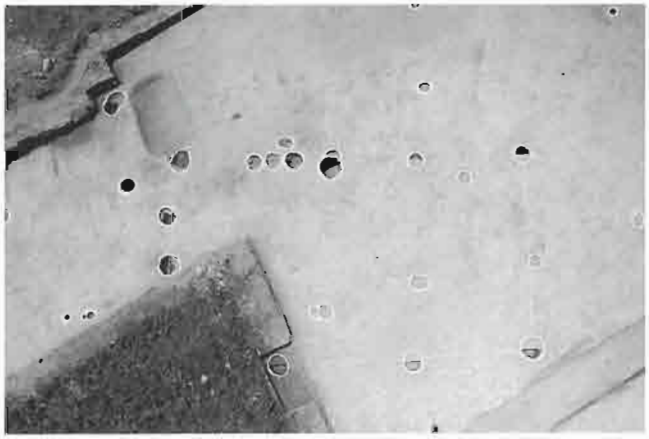
第２表　日田条里上手地区出土土器観察表（２）

挿図番号	遺物番号	遺構名	種別	器種	法量（　）は復元径（cm）			胎土	色調	備考
					器高	口径	底径	石英／A・長石／B・角閃石／C・金雲母／D 赤色粒／E・白色粒／F・細砂粒／G		
第16図	9	4号土坑上層	土師器	小皿	1.6	8.0	4.9	A．B．C．E	淡茶灰色	
第16図	10	4号土坑下層	土師器	小皿		(8.5)		A．B．C．E	淡茶褐色	
第16図	11	4号土坑上層	土師器	小皿	1.3	8.4	6.4	A．B．C．E	淡黄灰色	
第16図	12	4号土坑上層	土師器	小皿	1.4	9.3	7.3	A．B．C．E	淡黒褐色	
第16図	13	4号土坑上層	土師器	小皿				A．B．C．E	淡褐色	
第16図	14	4号土坑上層	土師器	小皿				A．B．C．E	淡黄茶色	
第16図	15	4号土坑上層	土師器	小皿				A．B．C	淡橙灰色	
第16図	16	4号土坑上層	土師器	小皿				A．B．C．E	淡灰色	
第16図	17	4号土坑下層	土師器	坏		(17.8)		A．B．C．E	淡褐色	
第16図	18	4号土坑上層	土師器	坏				A．B．C．E	淡茶褐色	
第16図	19	4号土坑上層	土師器	坏			(8.6)	A．B．C	淡灰茶色	
第16図	20	4号土坑	土師器	坏			(9.6)	A．B．C．E	淡橙灰色	
第16図	21	4号土坑下層	黒色土器	椀		(16.0)		A．C	(内)淡黒色、(外)淡灰茶色	
第16図	22	4号土坑	黒色土器	椀				A．C	(内)淡黒色、(外)淡橙灰色	
第16図	23	4号土坑上層	黒色土器	椀		(18.1)		A．C	(内)淡黒色、(外)淡黒灰色	
第16図	24	4号土坑上層	黒色土器	椀				A．C	(内)(外)淡黒色	
第16図	25	4号土坑上層	黒色土器	椀			(6.4)	A．B	(内)淡黒色、(外)淡橙灰色	
第16図	26	4号土坑上層	黒色土器	椀			(6.4)	A．C	(内)(外)淡黒色	
第16図	27	4号土坑	土師器	椀			(6.3)	A．C．E	淡橙灰色	
第16図	28	4号土坑下層	白磁	碗						
第16図	29	4号土坑上層	白磁	碗						
第16図	30	4号土坑上層	白磁	碗		(15.8)				
第16図	31	4号土坑上層	滑石製品	鍋		(23.8)				
第16図	32	4号土坑	滑石製品	鍋		(24.8)				
第16図	33	4号土坑	滑石製品	鍋		(29.4)				
第16図	34	4号土坑	滑石製品	当具						
第17図	1	柱穴P25	土師器	小皿	1.6	10.2	6.6	A．B．C	淡黒褐色	
第17図	2	柱穴P31	土師器	小皿				A．C	淡黒褐色	
第17図	3	柱穴P31	土師器	小皿				A．B．C．E	淡灰褐色	
第17図	4	柱穴P 5	土師器	小皿				A．C．E	淡茶灰色	
第17図	5	柱穴P 5	土師器	坏				A．B．C．E	淡茶灰色	
第17図	6	柱穴P 5	土師器	坏				A．B．C．E	淡茶褐色	
第17図	7	柱穴P 7	土師器	坏			(6.2)	A．C．E	淡橙灰色	
第17図	8	柱穴P21	土師器	坏		(11.2)		A．B．C．E	淡橙褐色	
第17図	9	柱穴P21	土師器	坏	3.7	12.0	6.9	A．B．C．E	淡茶褐色	
第17図	10	柱穴P21	土師器	坏			(7.2)	A．B．C．E	淡橙褐色	
第17図	11	柱穴P31	黒色土器	椀				A．C	淡黒色	
第17図	12	柱穴P15	黒色土器	椀			(7.0)	A．C	淡黒色	
第17図	13	柱穴P5	須恵質土器	坏				A．F	淡灰色	
第17図	14	柱穴P17	須恵質土器	鉢			(15.0)	A．C	淡灰色	
第17図	15	柱穴P16	瓦質土器	鉢				A	青灰色	
第17図	16	包含層	土師器	坏		(12.2)		A．B．C	淡黄茶色	
第17図	17	包含層	土師器	坏			(8.0)	A．C	淡橙灰色	
第17図	18	包含層	土師器	碗				A．B．C	淡茶褐色	
第17図	19	包含層	土師器	碗			(9.2)	A．B．E	淡灰白色	
第17図	20	包含層	黒色土器	碗			(6.8)	A．C．E	淡茶灰色	
第17図	21	包含層	土師器	甕				A．B．C．E	淡黒褐色	
第17図	22	包含層	瓦質土器	蓋			(7.9)	A．C．E	暗褐色	
第18図	1	調査区内	土師器	坏		12.2	7.1	A．B．C．E	淡茶褐色	
第18図	2	調査区内	土師器	坏				A．B．C．E	(内)淡黒褐色、(外)淡黄灰色	
第18図	3	調査区内	土師器	碗			(8.4)	A．D	淡黄茶色	
第18図	4	調査区内	土師器	碗				A．B．C．E	淡茶灰色	
第18図	5	調査区内	土師器	碗			(7.8)	A．B．C．E	黄灰色	
第18図	6	調査区内	土師器	碗			(7.8)	A．B．C．E	淡茶灰色	
第18図	7	調査区内	染付	皿						
第18図	8	調査区内	白磁	皿		(9.0)			白灰色	
第18図	9	調査区内	白磁	碗					白灰色	
第18図	10	調査区内	白磁	碗					淡緑灰色	
第16図	11	調査区内	白磁	碗			5.0		白灰色	

遺跡全景（真上より）

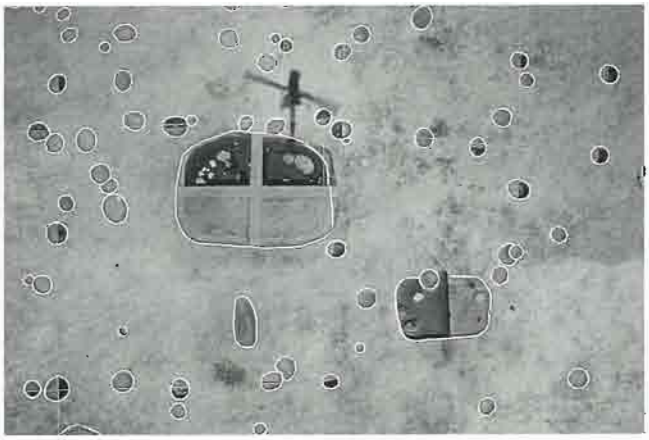


１号建物跡



３号建物跡

４～７号建物跡



３・４号土坑

図版２

１号土坑完掘状況

２号土坑半裁状況

２号土坑土層堆積状況

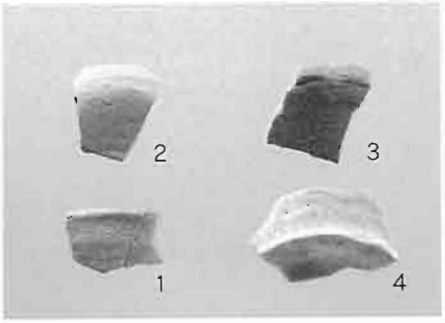
３号土坑土層堆積状況

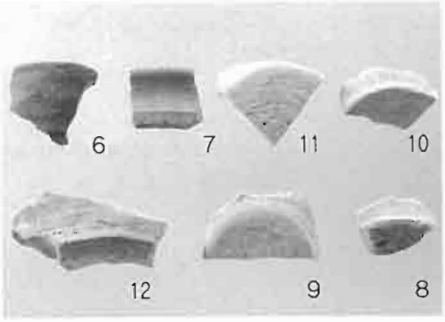
３号土坑遺物出土状況

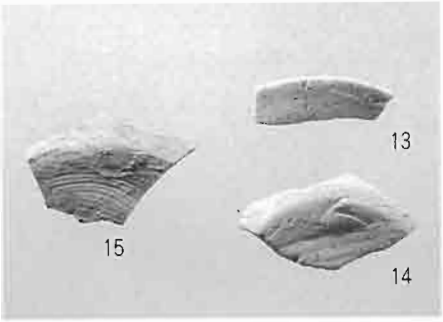
４号土坑土層堆積状況

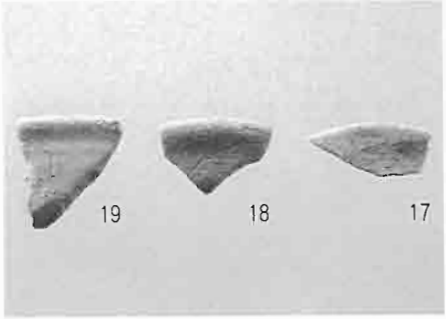
４号土坑遺物出土状況

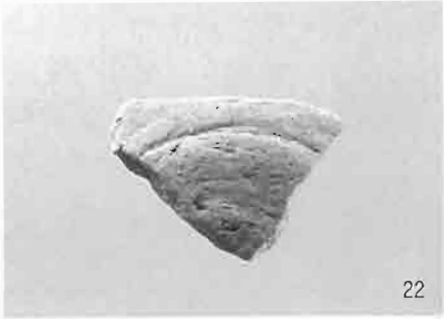
４号土坑土層堆積状況





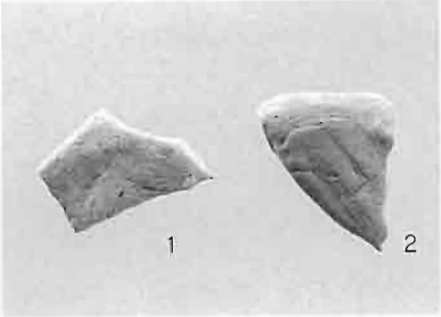




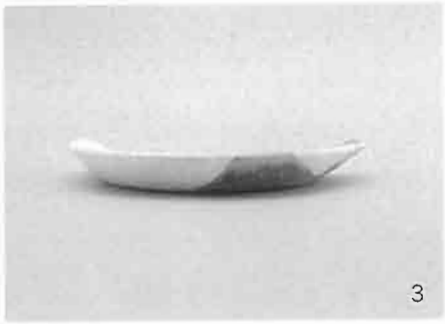


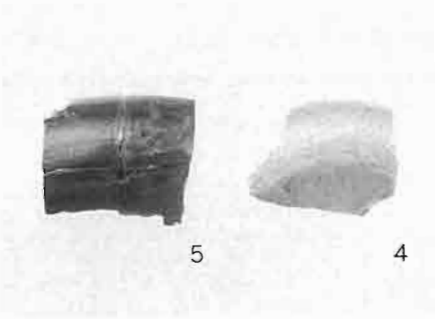
建物跡出土遺物

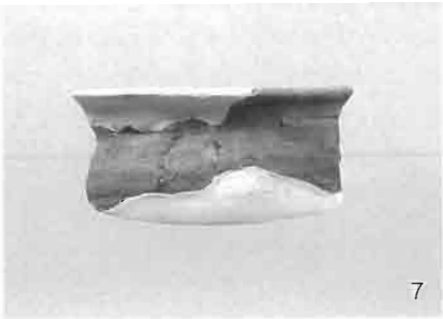
1～ 4	１号建物跡
5	２号建物跡
6～12	３号建物跡
13～16	４号建物跡
17～20	５号建物跡
21～22	６号建物跡

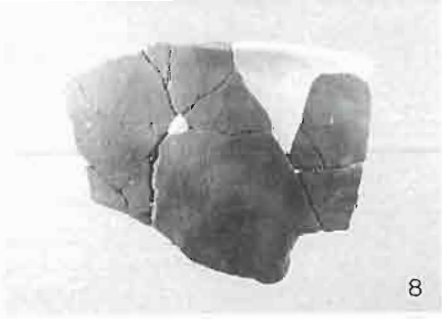


1・2　２号土坑出土遺物



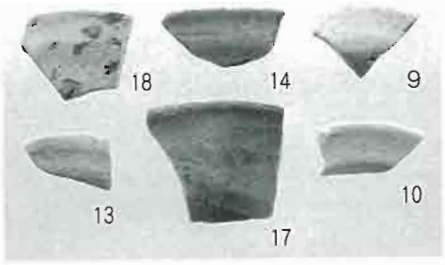


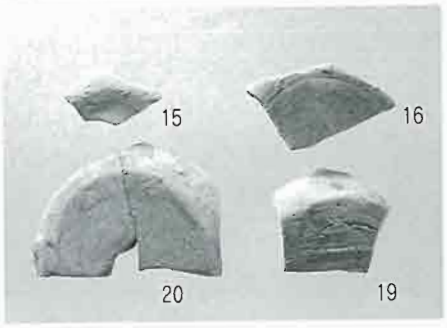


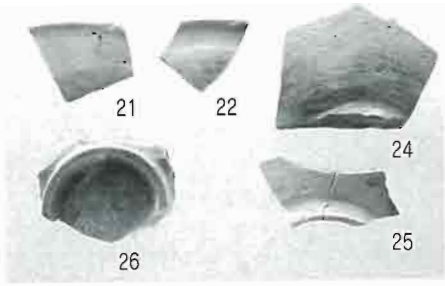


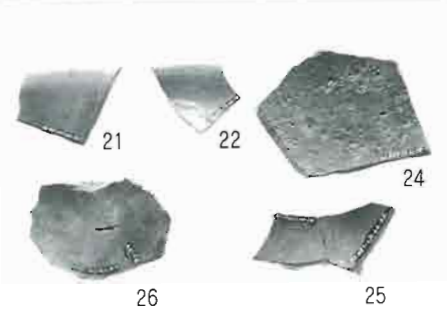
３～８　３号土坑出土遺物

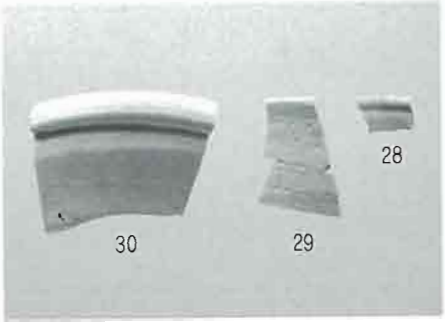
図版４



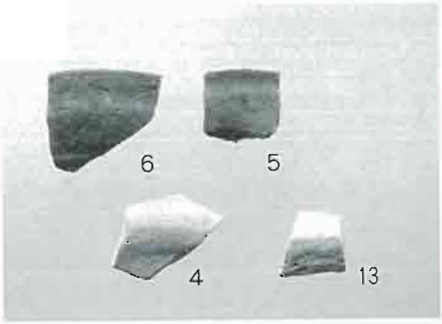


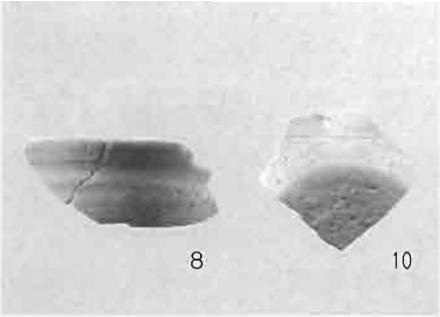


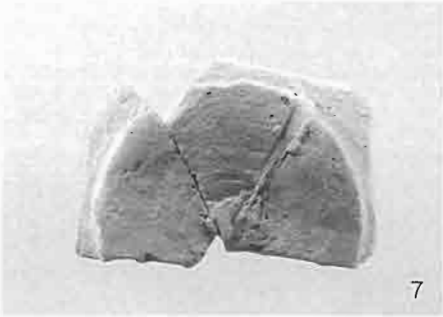


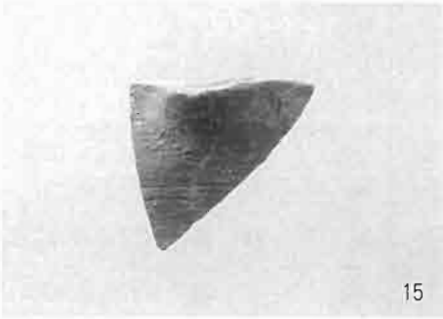


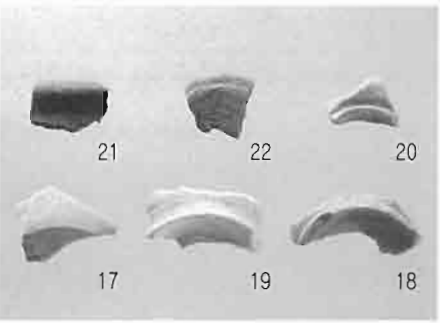
10～35　４号土坑出土遺物



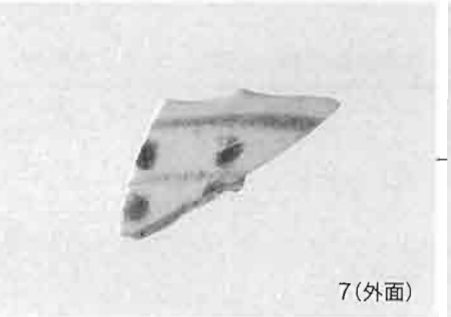


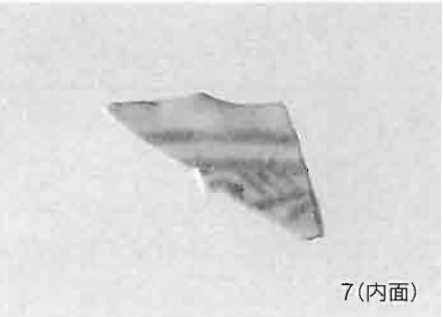


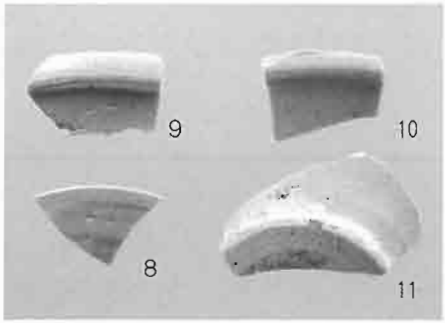


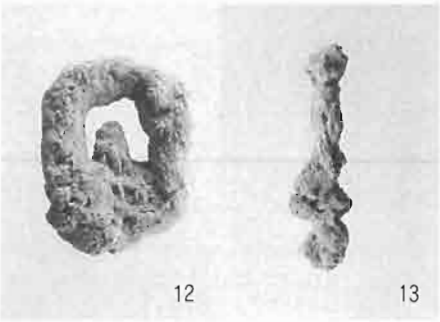


柱穴・包含層出土遺物
1(P25)　2·3·11(P31)
4～6·13(P5)　7·8·10(P21)
9(P7)　12(P15)　14(P17)
15(P16)　16～22(包含層)









1～13　調査区出土遺物

報告書抄録

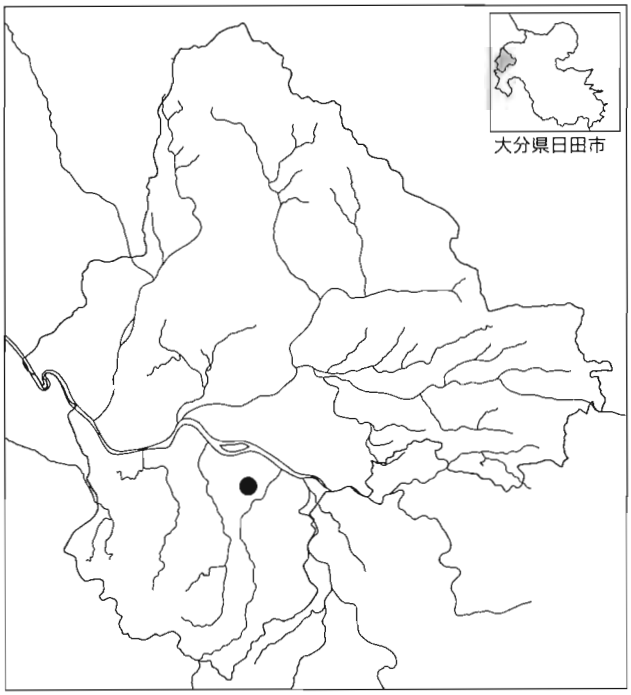
ふりがな	ひたじょうりのぼてちく
書名	日田条里上手地区Ⅲ
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第34集
編著者名	行時志郎
編集機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601　日田市田島2-6-1
発行年月日	2001年12月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
日田条里上手地区２次	大分県日田市 大字西有田字 上手48-2他					19990728 ～19990811	850	宅地造成分譲

所要遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
日田条里上手地区２次		古代	掘立柱建物　５棟 土坑　４基	土師器・須恵器・石鍋	
		中世	掘立柱建物　２棟	土師器・瓦質土器	

高瀬条里永平寺地区

遺 跡 全 景



遺 跡 位 置 図

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経過

平成12年３月１日、有限会社明代不動産より日田市大字高瀬字火ノ口663-1番地に宅地造成工事を実施する計画があることから、市教育委員会に事前の照会文書が提出された。この事業予定地は、埋蔵文化財包蔵地高瀬条里跡として、古代に施工された条里区画が存在する区域に含まれるとともに、事業予定地の近くには板碑や五輪塔などが祀られ、中世期の在地豪族高瀬氏の菩提寺である永平寺跡が存在したとされる場所としても知られていた。こうしたことから、遺構の存在する可能性が高いと判断されるため、平成12年３月21日~3月25日まで国庫補助事業により試掘調査を実施し、その結果、中世期とみられる多数の柱穴や古墳時代の遺物が出土した。この調査結果をふまえ、事業者である有限会社明代不動産代表取締役中川好明氏と遺跡の取り扱いについて協議を行い、下水道施設などを設置するなど現状としての保存が難しい道路部分と、それにより掘削される恐れのあるその隣接部分についての発掘調査を実施することで合意に達した。

その後スケジュール調整を行い、平成12年９月22日に委託契約書を締結し、平成12年10月２日から11月15日までの期間で発掘調査を実施した。

２．調査の経過

事前協議の中で、水田表土は近くの畑の所有者に譲るため、地盤下の土と別にしておくよう事業者の要望があったため、まず用地内の草刈作業を行い、機械により調査予定地の表土を除去した後、再度基盤より下を掘り下げる方法で遺構検出作業を進めていった。途中諸事情により遺構検出作業が遅れ、10月11日にようやく終了した。その間平行しながら作業員により遺構の精査を進めていったが、調査区内は旧河道にあたるのか、検出面は調査区中央にあたるほぼ半分以上の面積は砂レキ層の地山面となっていたため作業は難航し、さらに天候不順も加わって調査の全体工程がやや遅れてしまった。しかし、12日には㈲日田都市計画測量により基準点の設置を早くしていただいたため、各個別遺構については順次写真撮影、実測を行うことができ、11月上旬には個別及び全体の実測作業が終了するとともに、14日には空中写真撮影を実施、翌15日に器材の撤去を行い、すべての発掘調査業務を完了した。

３．調査組織の構成

調 査 主 体　日田市教育委員会
調査責任者　日田市教育長　加藤正俊（～平成12年11月）後藤元晴（平成12年11月～）
調 査 事 務　文化課課長原田俊隆　同課長補佐石井英信　同主査佐々木豊文（～平成13年３月）
　　主査島崎誠司（平成13年４月～）
調　査　員　文化課主任行時志郎（調査担当）同主任吉田博嗣、同主事若杉竜太（調査担当）
調査作業員　宇野京子、宇野真吾、宇野広光、梶原巳年、小野忠臣、坂本今朝人、坂本都美子、
　　毛利四郎三、真野瞳、横尾フサエ、横尾テル子、渡辺芳五郎、野村勉、毛利泰雄
整理作業員　石田紀代子、聖川暢子

4．遺跡の立地と環境

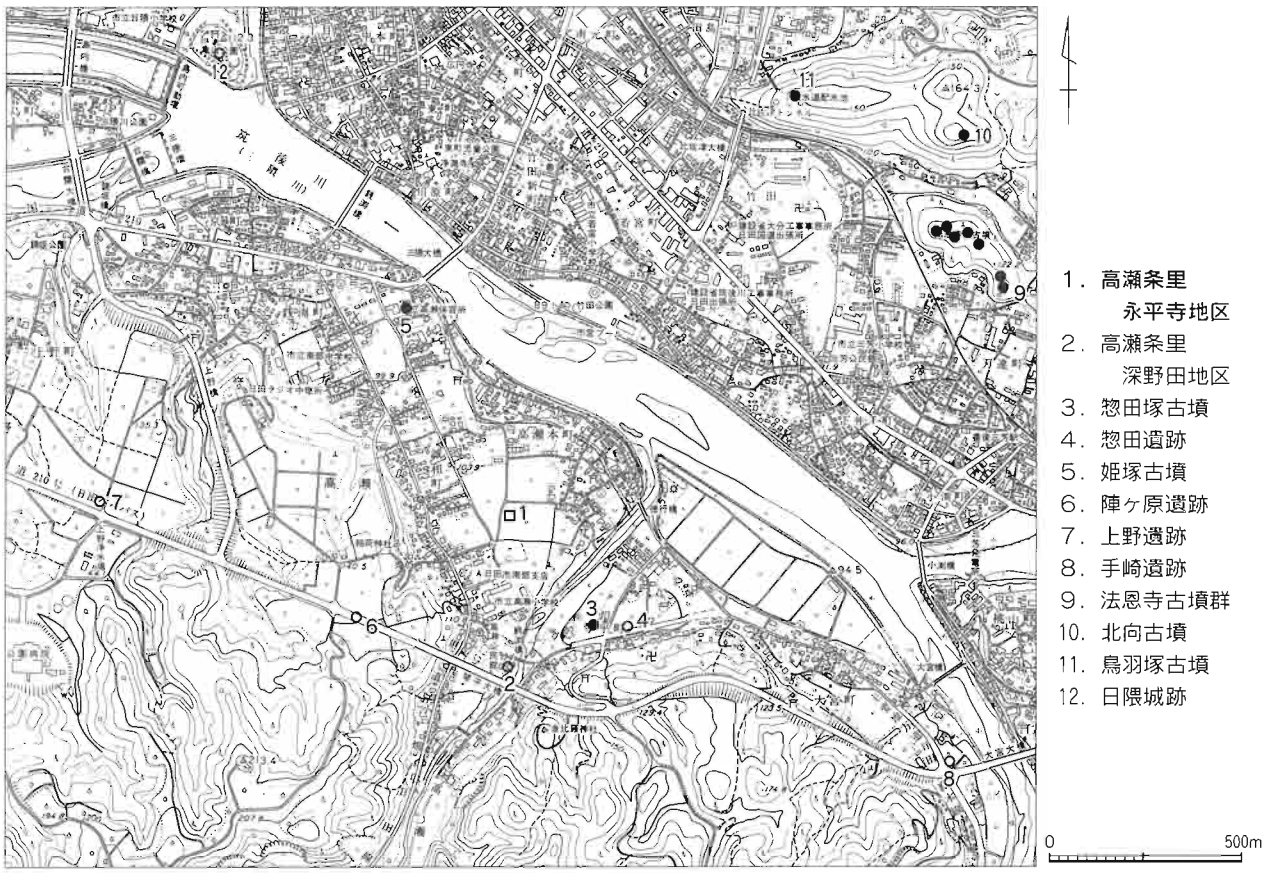
高瀬条里永平寺地区は日田盆地南部、高瀬川左岸河岸段丘上に存在する。遺跡の南側には、津江山系より派生する尾根筋が幾重にも延び、その先端には沖積地との比高差約30メートル程の台地や丘陵が広がっている。その間を縫うように高瀬川が盆地に向かって流れ、西走する三隈川と合流する。この合流点付近は、三隈川と高瀬川の浸食作用により河岸段丘が形成され、やや平坦な沖積地が広がっている。現在この一帯は、大宮町や琴平町、高瀬本町などの集落が山裾の小高い場所に帯状に連なって立地している。耕地の大部分は水田であるが、これは近年高瀬川や大山川の上流にダムや井関が設けられ、灌漑施設が充実するようになった昭和30年代以降のことで、それまでは畑作が主であったとおもわれる。本遺跡のある高瀬川左岸は、その土地の区画が碁盤目状となっており、古代に施行された条里跡と考えられているが、今回の調査区では中世期の遺構が発見されており、その地割はその後画されたものとおもわれる。

これまでの発掘調査の成果をもとに周囲の遺跡の動向を見てみると、本遺跡の南側、河岸段丘上には縄文時代後期の土坑や古墳時代中期の竪穴住居跡などが発見された高瀬条里深野田地区が存在する。また、高瀬川を挟んで右岸の河岸段丘上には、弥生時代中期の土坑や後期の大溝のほか、古代の竪穴住居跡が発見された惣田遺跡が存在している。この惣田遺跡の北側には、横穴式石室の主体部をもつ古墳時代後期の惣田塚古墳が存在し、さらに本遺跡の北側、三隈川を眼下に見下ろす河岸段丘の先端部には、竪穴式石室の主体部をもち、蛇行剣を副葬していた古墳時代中期の姫塚古墳が存在する。本遺跡からもこれらの時期に伴う遺物が破片資料ではあるが出土しており、調査区周辺に当該時期の遺構の広がりをうかがうことができる。また、本遺跡の道路を挟んで向かいには、小さなお堂があり、その周囲には、中世の紀年銘の彫られた板碑や五輪塔の一部が集められている。これらの石造物は、近所の人の話によると、水田化される以前、調査区周辺の畑の中に立っていたものを開墾と同時にこの場所に移築したもののようである。この付近は、中世に日田を支配した大蔵氏の一族で、内紛により命を落とした郡司大蔵永平の菩提を弔うために、その孫にあたる大蔵永俊が創建したと「日田郡司職次第」に記されている永平寺の推定地と伝えられている。この永平寺推定地の北東側には、その後この地域を支配し、中世末期に高瀬合戦により滅んだ郡老の一人高瀬山城守一族の霊を祀った高瀬天満宮が存在する。

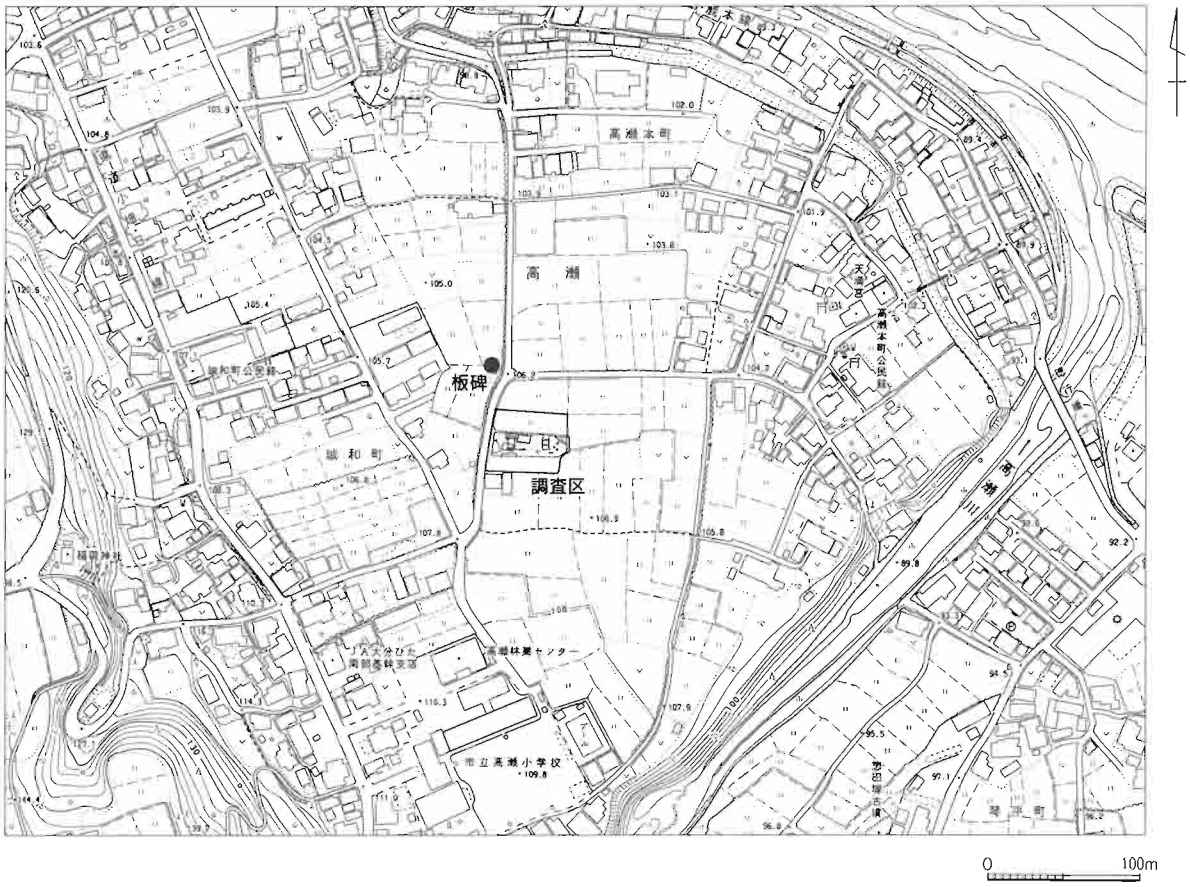
参考文献

1）田中祐介・友岡信彦編「高瀬深ノ田遺跡」『日田市高瀬遺跡群の調査1』一般国道210号線日田バイパス建設に伴う発掘調査報告書1　大分県教育委員会　1995

2）土居和幸編『惣田遺跡』日田市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集　1994



第19図　調査区周辺の主要遺跡位置図（1/20,000）



第20図　調査区位置図（1/5,000）

第21図　調査区遺構配置図（1/200）

II　調査の内容

1．調査の概要

調査区内での遺構検出面(地山)は、中央が砂礫層、東西両側が黄灰色の砂質性の強い土で、それまでの深さは、現地表から約30～50cmを測る。地形は、全体的に北方向に向かって幾分傾斜を示しているが、東端では東方向にも緩やかな傾斜が見られる。また調査区東側には、黒褐色の埋土を呈する弥生から古代の遺物包含層が浅く堆積している様子がうかがわれた。

調査区内では、最終的に掘立柱建物跡９棟、土坑８基、溝３条の存在が認められたが、それ以外に建物として扱うことができなかった多数の柱穴などが検出された。これらの遺構は、道路部分にかかるものについては完掘し、それ以外については、遺構の時期や内容が把握できる範囲内での確認調査にとどめている。

2．遺構と遺物

1）掘立柱建物跡

1号建物跡（第21・22図）

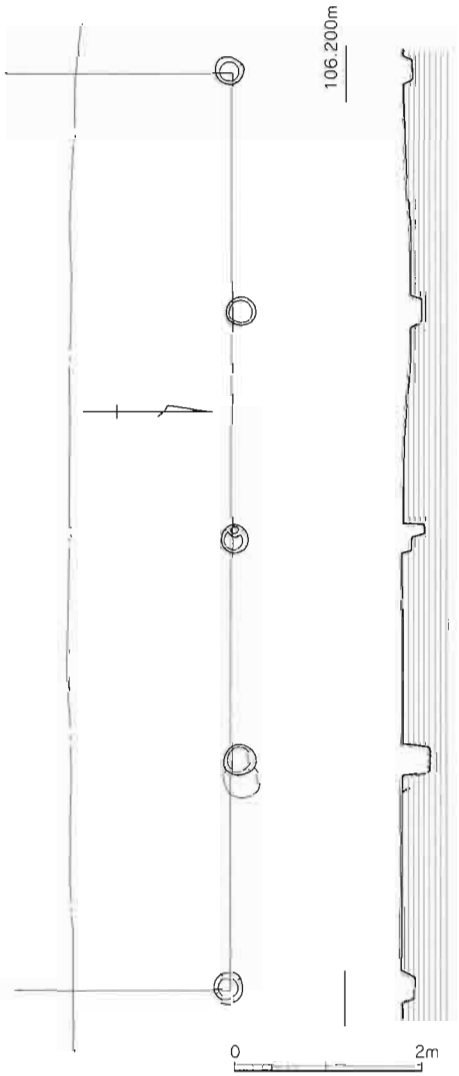
調査区南西端で確認された東西棟の建物で、南側半分は調査区外に展開する。桁行(約9.7m)を測り、その柱間平均は約2.4mを測る。建物の軸方位はN-1°-Wである。柱穴の検出面での掘り方の大きさは25cm平均で、深さは15cm～30cmとばらつきがある。柱穴の中からの出土遺物はなかった。

2号建物跡（第21・23図）

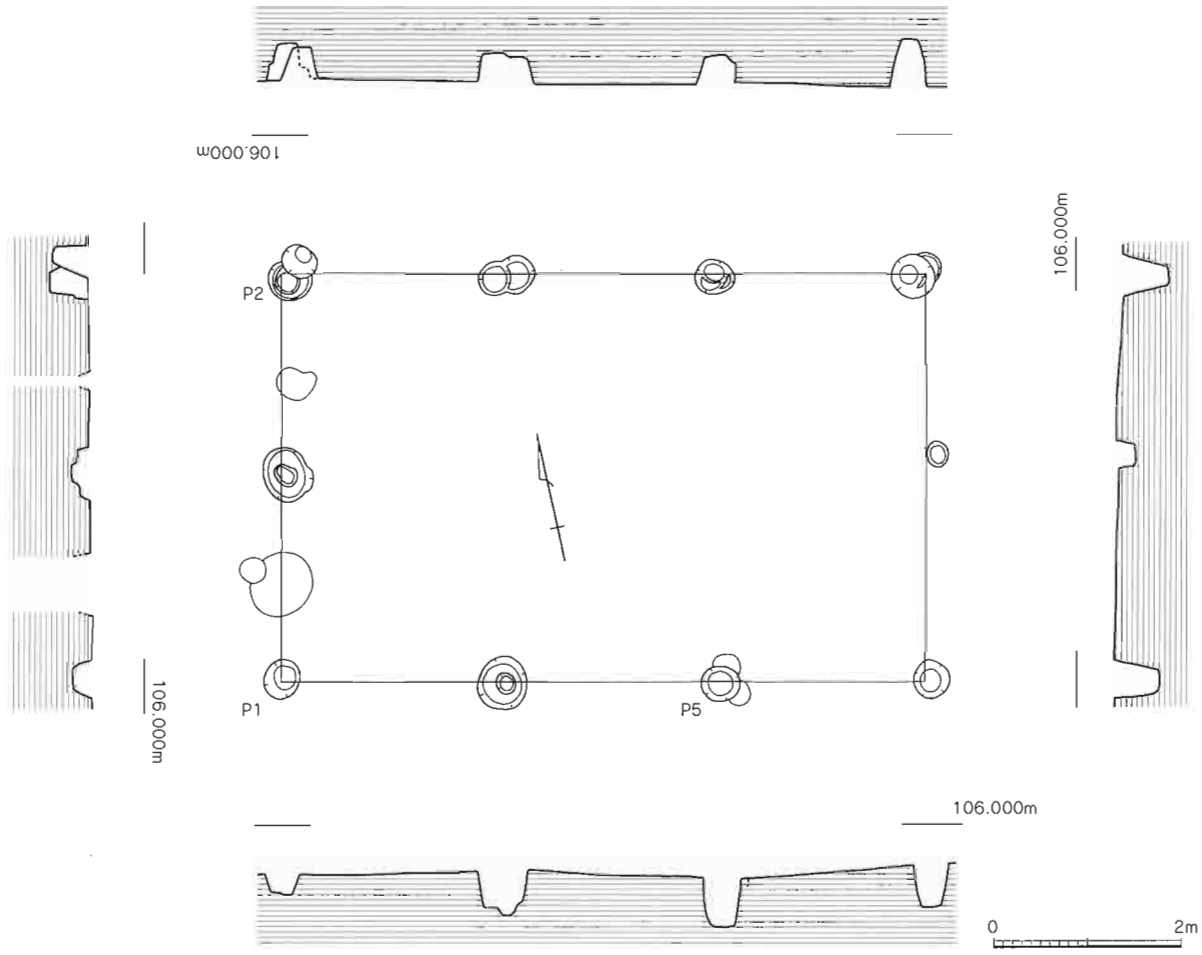
調査区西側で確認された東西棟の建物で、３号建物と切り合う。建物の梁間2間（4.4m)、桁行3間（6.8m)、梁間方向の柱間は約2.2m、桁行方向の柱間は約2.3mを測る。建物延床面積は約29.9㎡で、建物の軸方位はN-12°-Eである。柱穴の検出面での掘り方の大きさは約30cm～50cm、深さは25cm～50cmを測る。柱穴の中からは、土師器などの小破片が出土した。

2号建物跡出土遺物（第30図）

１・３はP1、２はP5、４はP2より出土。１～３はいずれも土師質土器坏口縁部片である。１の口縁部はほぼ直線的にのびる。２・３の口縁部はほぼ内湾気味にのびる。４は鎬蓮弁文青磁碗である。外面黄緑色を呈する。



第22図　1号建物跡実測図（1/80）



第23図　2号建物跡実測図（1/80）

３号建物跡（第21・24図）

調査区西側で確認された南北棟の建物で、1号土坑に切られ、２・７号建物と切り合い関係を持つ。建物の梁間２間（4.2m）、桁行４間（8.4m）、梁間方向の柱間は約2.1m、桁行方向の柱間は約2.1mを測る。建物延床面積は約35.3㎡で、建物の軸方位はN-1°-Wである。柱穴の検出面での掘り方の大きさは約30㎝～50㎝、深さは40㎝～55㎝を測る。柱穴の中からは、土師器などの小破片が出土した。

３号建物跡出土遺物（第30図）

５はP１、６はP２、７はP３より出土。５・６は土師質土器坏、７は瓦質土器火鉢である。５の口縁部は外反気味に立ち上がる。６は底部で、底面糸切り。７は貼付突帯が失われている。口縁部はほぼ直口する。

４・５号建物跡（第21・25図）

調査区中央北側で確認された東西棟の建物で、両者は同一場所で建て直しを行った可能性がある。梁間１間（4.5m）、桁行３間（7.6m）を測り、桁行方向の柱間は約2.5mを測る。建物延床面積は約34.2㎡で、建物の軸方位はN-7°-Eである。柱穴の検出面での掘り方の大きさは約50㎝平均、深さは35㎝～55㎝を測る。柱穴の中からは、土師器などの小破片が出土した。

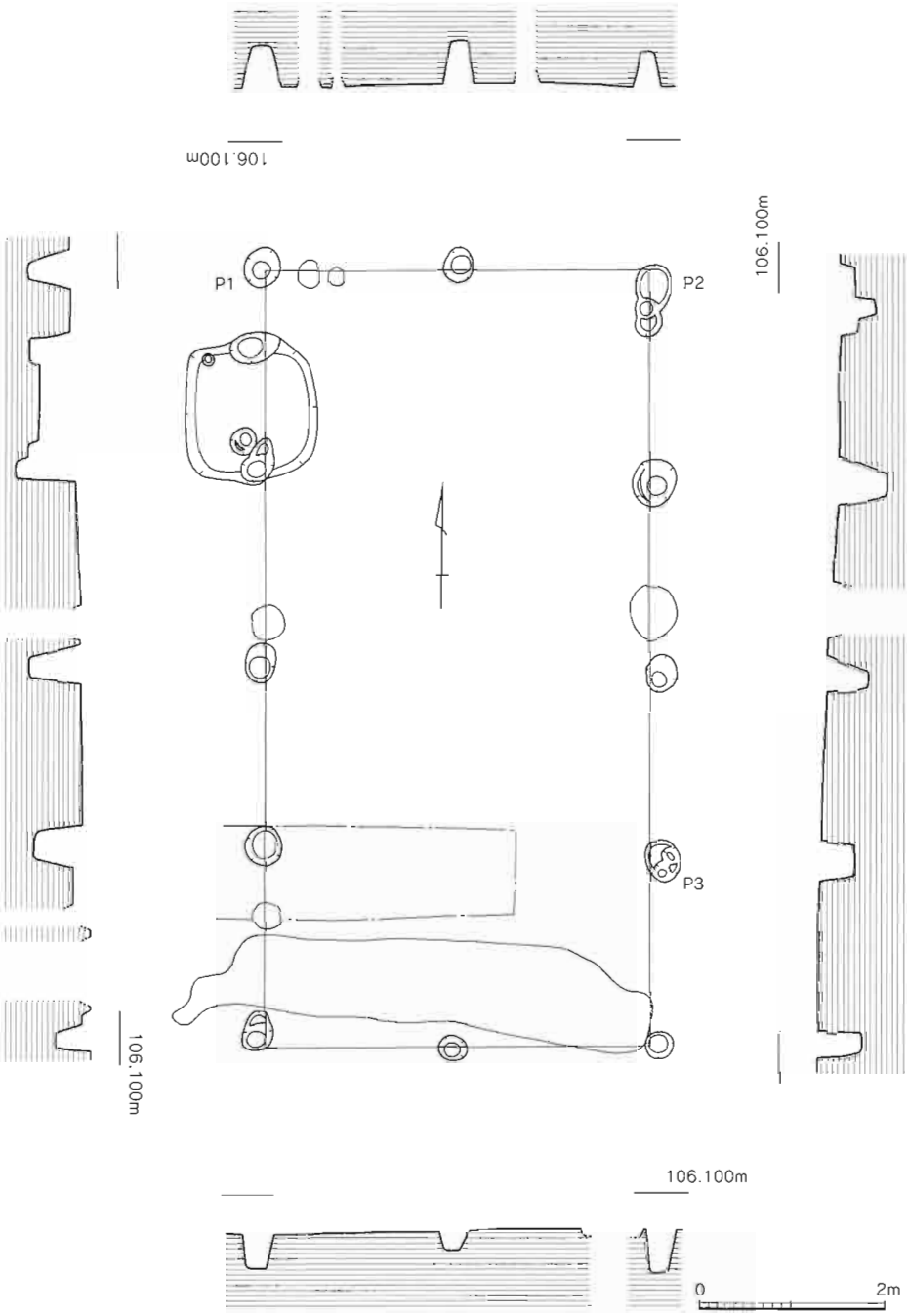
４・５号建物跡出土遺物（第30図）

８はP１、９はP２、10はP３より出土。８は土師質土器小皿である。底端部から口縁部にかけては、短くやや内湾する。底面は糸切り。９は土師質土器坏底部片である。底面糸切り。10は瓦質土器火鉢である。小さい蒲鉾状の突帯が貼付される。口縁部はほぼ直口気味に立ち上がる。

６号建物跡

（第21・26図）

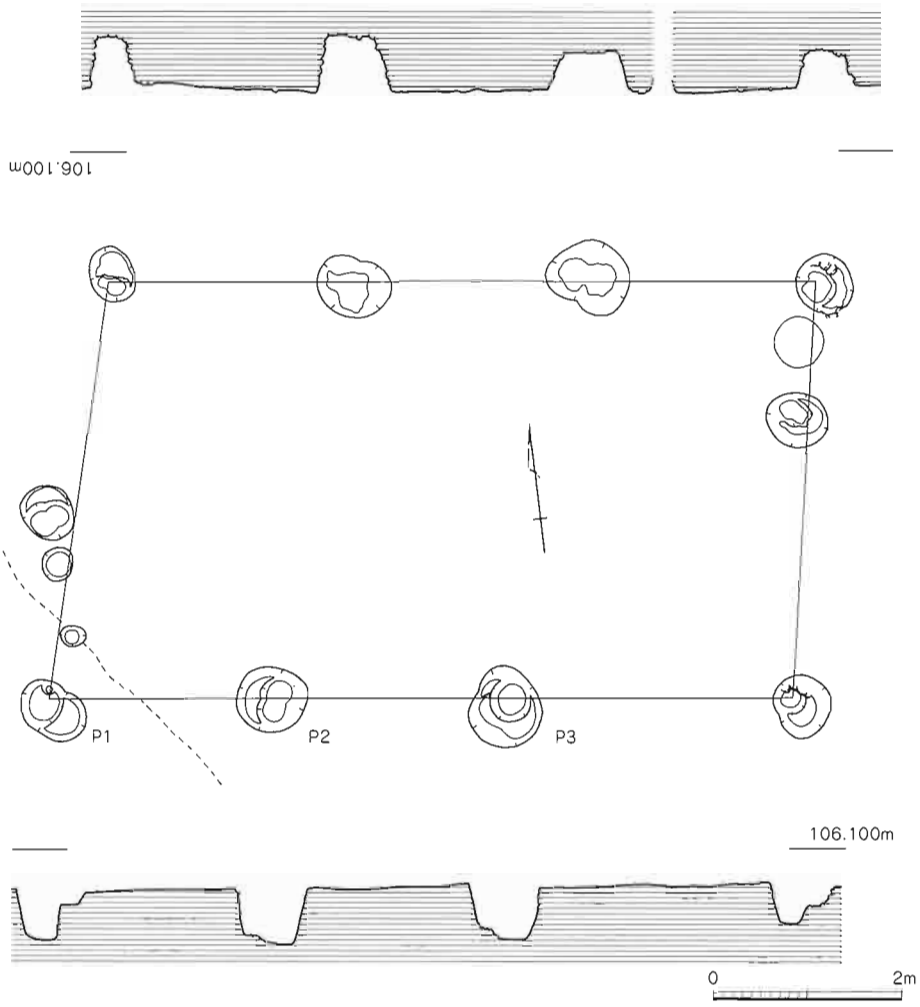
調査区西北側で確認された東西棟の建物で、北側は調査区外に展開し、３・７号建物と切り合う。建物の梁間(2)間、桁行３間（約6.6m）、梁間方向の柱間は約2.4m、桁行方向の柱間平均は約2.2mを測る。建物延床面積は推定で約31.7㎡で、建物の軸方位はN-4°-Eである。柱穴の検出面での掘り方の大きさは平均で約40㎝、深さは40㎝～55㎝を測る。柱穴の中からは、土師器などの小破片が出土した。



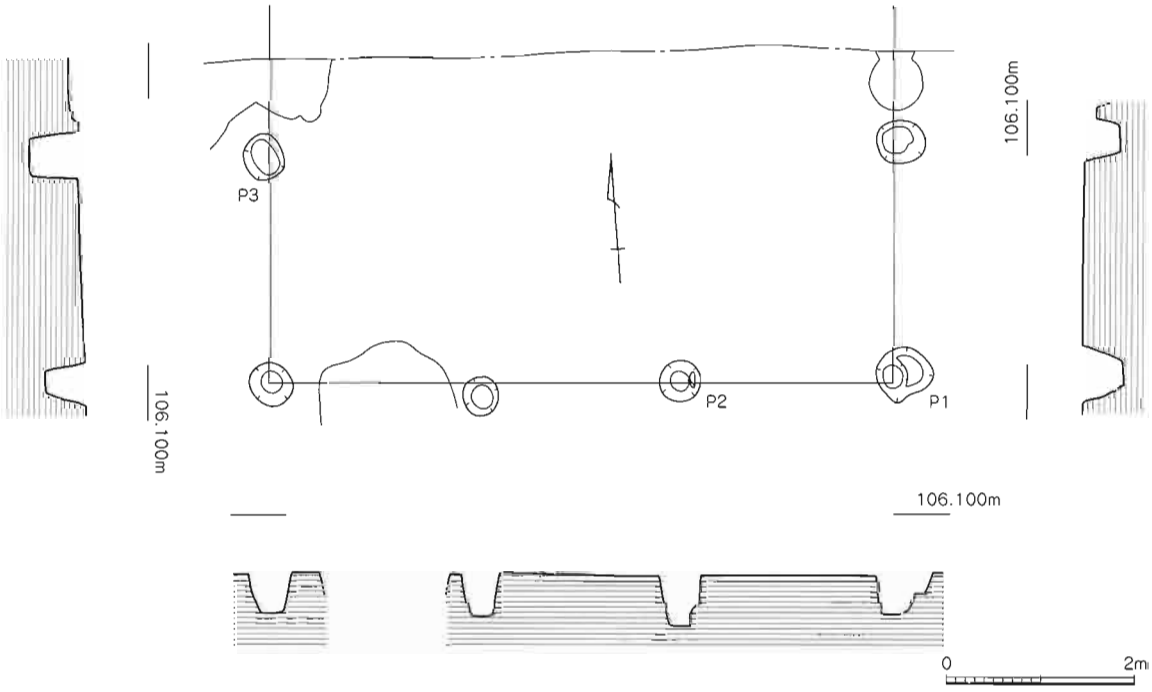
第24図　３号建物実測図（1/80）

６号建物跡出土遺物（第30図）

11はP１、12はP２、13・15はP３、14はP４より出土。11～14は土師質土器坏である。11は口縁部である。12～14はいずれも底部片で内湾気味に立ち上がる。底面はすべて糸切り。15は青磁碗である。見込み部分に花文を浮き彫りする。



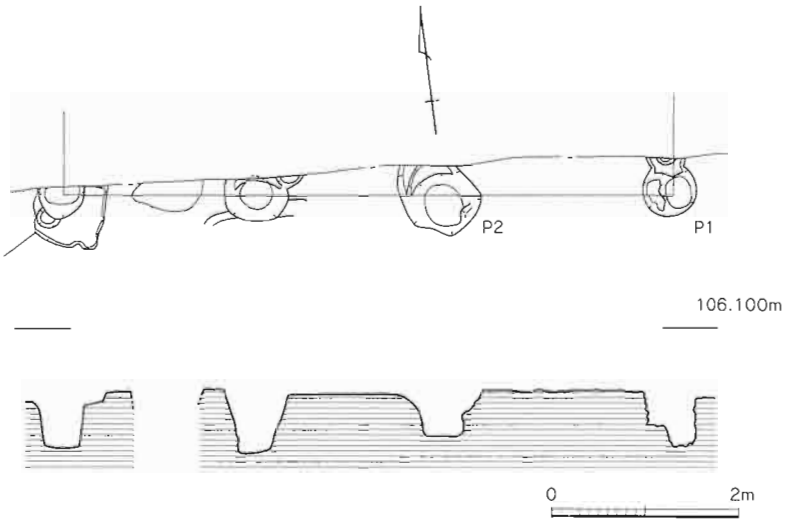
第25図　4・5号建物実測図（1/80）



第26図　6号建物跡実測図（1/80）

７号建物跡（第21・27図）

調査区西北側で確認された東西棟の建物で、大部分は北側の調査区外に展開している。６号建物と切り合う。建物は桁行３間（約6.5m）で、柱間平均は約2.2mを測る。建物の軸方位はN-8°-Eである。柱穴の検出面での掘り方の大きさは平均で約50㎝、深さは50㎝～60㎝としっかりしている。柱穴の中からは、土師器などの小破片が出土した。



第27図　７号建物跡実測図（1/80）

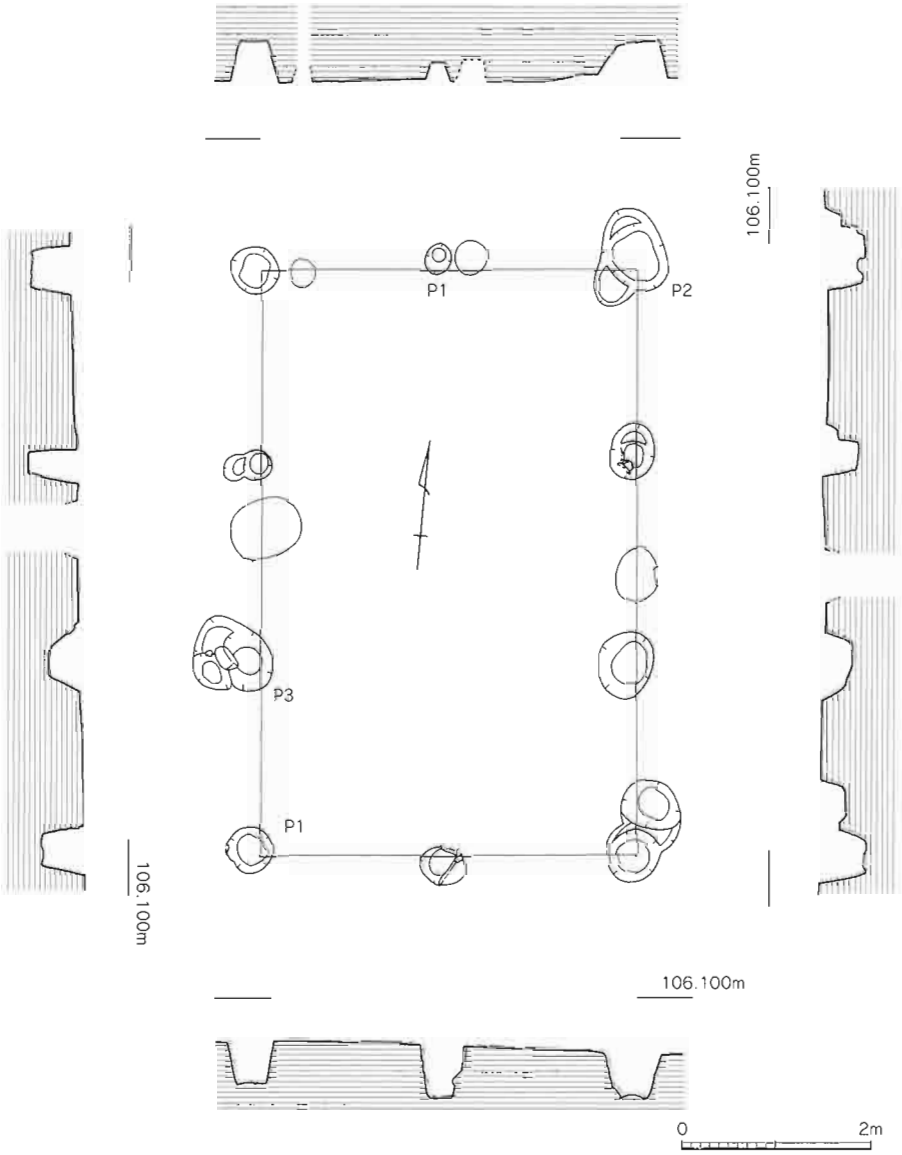
７号建物跡出土遺物（第30図）

16はＰ１、17はＰ２より出土。16は土師器坏口縁部で、体部からほぼ直口気味に立ち上がる。流れ込みの遺物であろう。17は土師質土器坏底部片である。底面糸切り。

８号建物跡

（第21・28図）

調査区東側で確認された南北棟の建物で、９号建物と切り合う。建物の梁間２間（約4.0m）、桁行３間（約6.2m）で、梁間方向の柱間は約2.0m、桁行方向の柱間平均は約2.1mを測る。建物延床面積は約24.8㎡で、建物の軸方位はN-5°-Wである。柱穴の検出面での掘り方の大きさは約30㎝～50㎝、深



第28図　８号建物跡実測図（1/80）

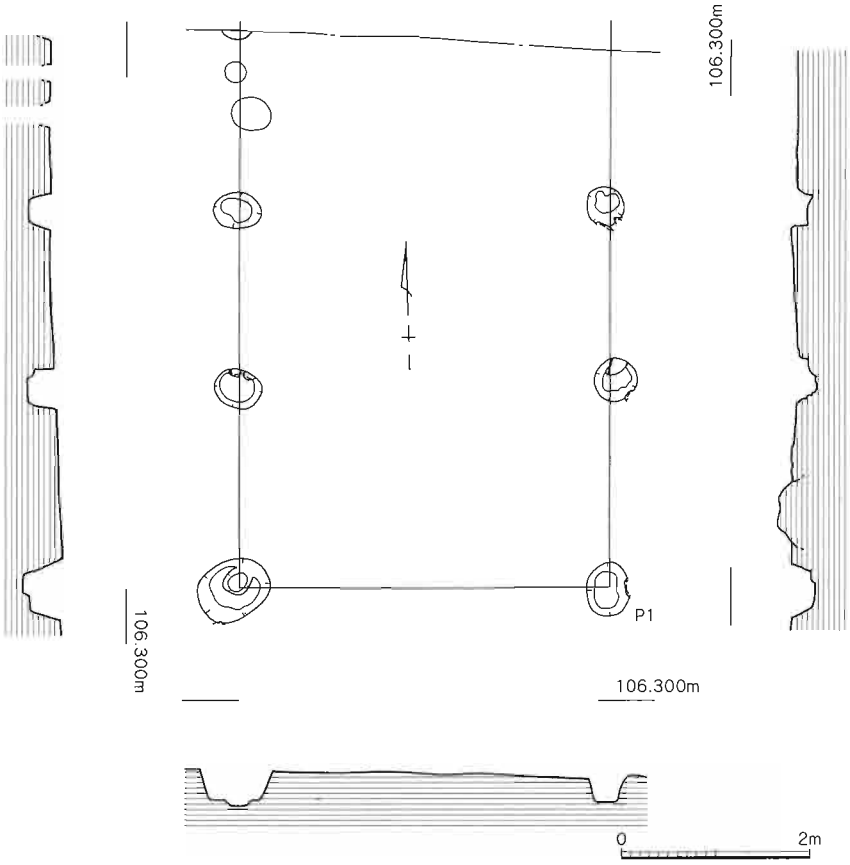
さは30cm～55cmを測る。柱穴の中からは、土師器などの小破片が出土した。

8号建物跡出土遺物(第30図)

18はP1、19はP2、20・21はP3より出土。18は土師質土器坏口縁部で、19は底部。20は鎬蓮弁文青磁碗片である。21は青磁碗である。外面蓮弁文のような文様を浮き彫りする。

9号建物跡（第21・29図）

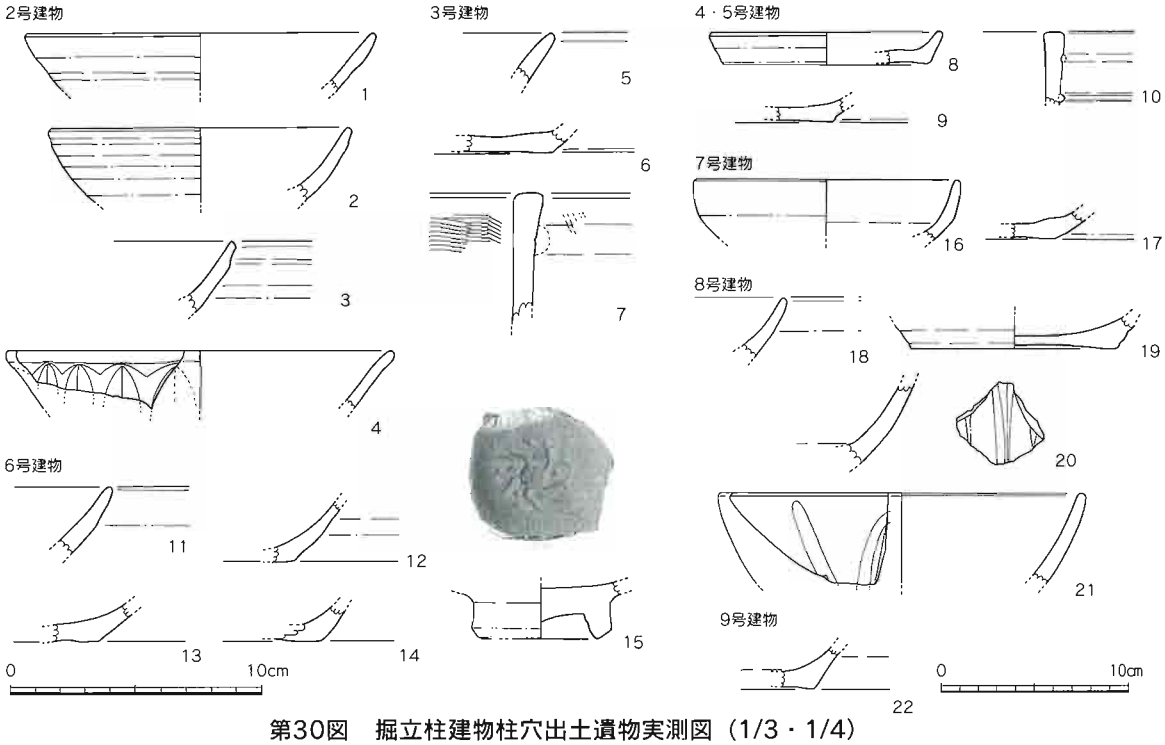
調査区東側で確認された南北棟の建物で、北側は調査区外に展開し、9号建物と切り合う。建物の梁間1間（約4.0m）、桁行(3)間以上（約6.0m以上）で、桁行方向の柱間平均は約2.1mを測る。建物延床面積は約24.0㎡以上で、建物の軸方位はN-1°-Eである。柱穴の検出面での掘り方の大きさは約40cm～60cm、深さは20cm～45cmを測る。柱穴の中からは、土師器などの小破片が出土した。



第29図　9号建物跡実測図（1/80）

9号建物跡出土遺物（第30図）

1はP1より出土の土師質土器坏底部片である。底面糸切り。

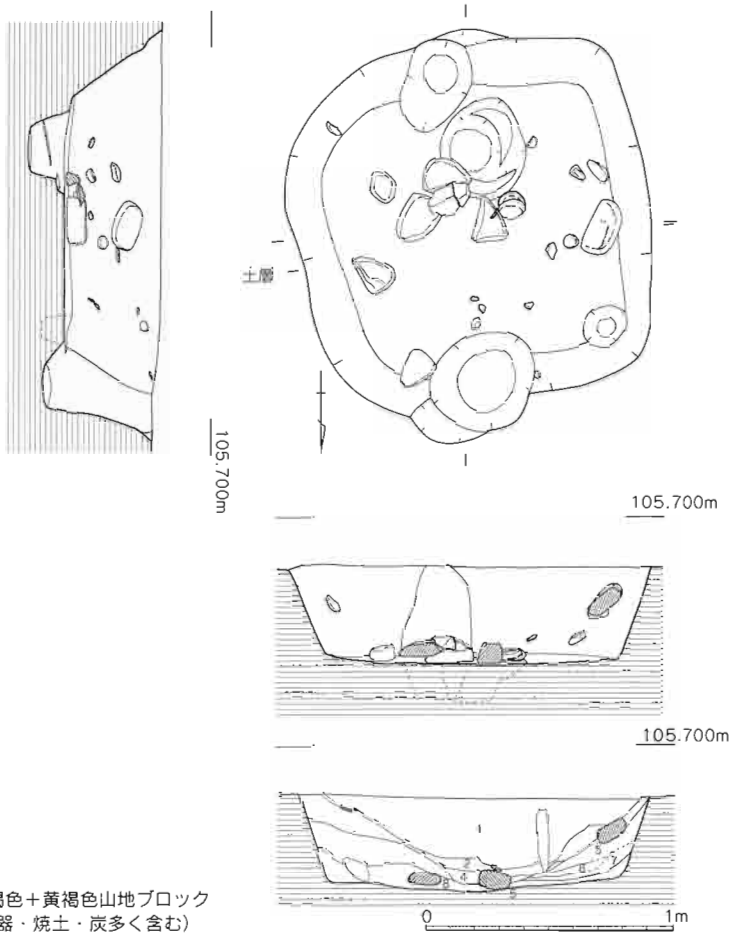


第30図　掘立柱建物柱穴出土遺物実測図（1/3・1/4）

2）土坑

1号土坑（第21・31図）

調査区の西側で確認されたが、土坑完掘後、3号建物の柱穴が確認されたため、3号建物の後から掘り込まれていたことがわかった。検出面での規模は、主軸長約1.4mを測る隅丸方形プランを呈している。底面までの深さは約40cmを測り、床面はほぼ平坦で、壁面はやや斜め方向に立ち上がる。土坑の中からは、扁平な河原石や土器が中央付近で多く認められたが、これらは土層を見る限りレンズ状堆積となっている層の最も低い位置にまとまっている様子から、土坑の機能が停止した後、自然堆積が進み、ある時期にこれらの遺物を人為的に投棄したものと推測される。また、プランから墓の可能性も推定されうるが、埋土の状況から墓の可能性はないと考えられる。



1．暗褐色＋黄褐色山地ブロック
（土器・焼土・炭多く含む）
2．暗褐色土
（黄褐色山地ブロック含まず、炭わずかに含む）
3．黒褐色土（炭多く含む）
4．黄褐色山地ブロック層
5．暗黒褐色土
6．淡褐色粘土質（しまっている）
7．黒褐色土（炭層）
8．暗褐色土＋黄褐色土ブロック土

第31図　1号土坑実測図（1/30）

1号土坑出土遺物（第39図）

土坑からは土師質土器などがまとまって出土した。1は土師質土器小皿である。底端部から口縁部にかけて内湾気味にのびる。内底面は刷毛状のヘラによる輪状痕を指でナデ消し、底面は糸切り。2～8は土師質土器坏である。2はほぼ完形で、底端部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。外面は轆轤整形時の回転横ナデ痕が顕著に残り、内底面は刷毛状のヘラによる輪状痕を指でナデ消し、底面は糸切りで板状圧痕が残る。3・4は底端部から口縁部にかけての破片で、いずれも内湾気味にのびる。5～8は底部片である。いずれも底面は糸切り。9は砥石である。幅3.3cm、厚さ0.6cmを測る。

2号土坑（第21・32図）

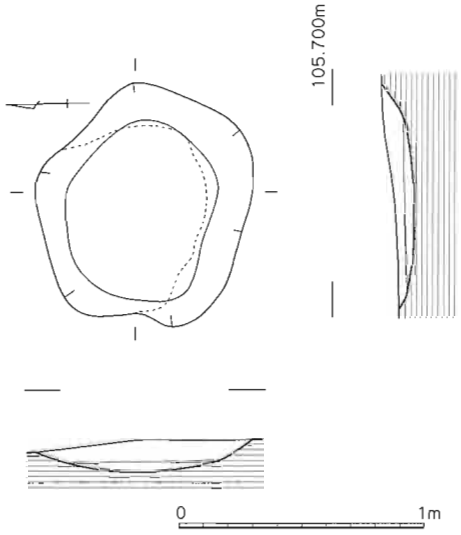
調査区の西端で確認された。検出面での規模は、長軸約1m、短軸約0.9mを測る不定形プランを呈し、底面までの深さは約10cmと浅い。底面から壁面にかけてはレンズ状となっている。床面北側は2次焼成を受け、赤褐色に変色していた。炉跡ないしはカマドの可能性が考えられるがこの遺構からの出土遺物がないため不明である。

３号土坑（第21・33図）

調査区の北西側で確認され、７号建物の柱穴を切ってつくられていた。検出面での規模は、長軸約1.3m、短軸約0.85mを測る隅丸長方形プランを呈し、底面までの深さは約40cmを測る。底面はややレンズ状を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。この中からは、多数の河原石が充填され、それに混じって１点陶器片が出土した。

３号土坑出土遺物（第39図）

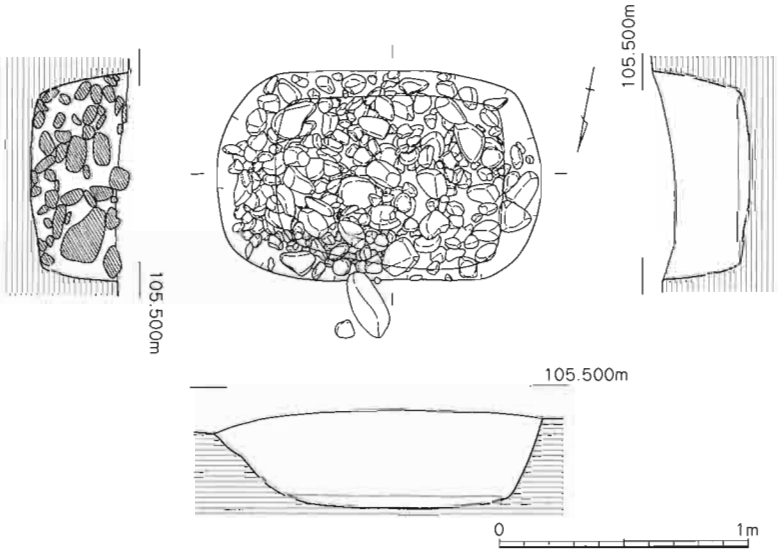
10は陶器壷（徳利）片である。胴部は下膨れ状となり、外面は轆轤整形時に意図的に凹凸をつけている。外面自然釉がかかる。



第32図　２号土坑実測図（1/30）

４号土坑（第21・34図）

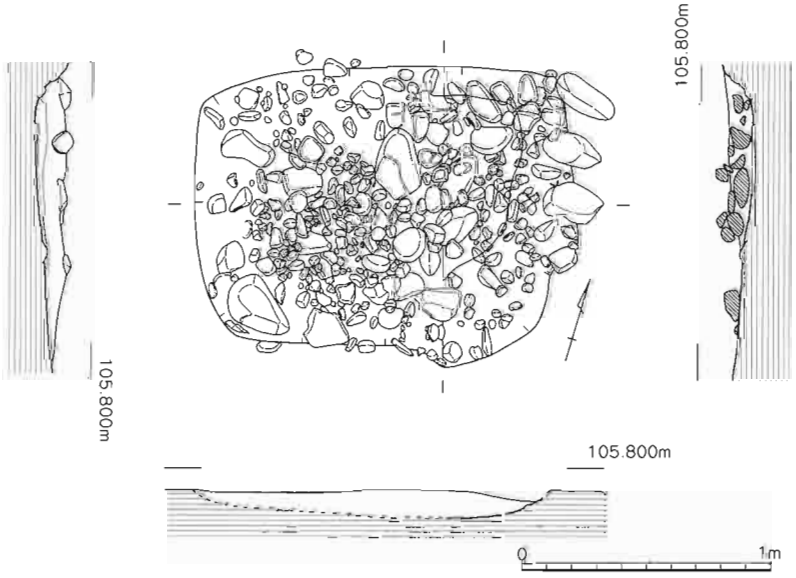
調査区の中央南側で確認され、土坑東側を半裁して掘り下げた。検出面での規模は、長軸約1.5m、短軸約1.1mを測る隅丸長方形プランを呈し、底面までの深さは約10cmと浅い。底面は周囲がレキ層となっており、凹凸が著しいが全体的にはレンズ状となっている。壁面は底端面から斜め方向に緩やかに立ち上がる。この中からは、多数の河原石が充填された状態で検出されたが、遺物の出土はなかった。



第33図　３号土坑実測図（1/30）

５号土坑（第21・35図）

調査区の南東側で確認され、土坑東側を半裁して掘り下げた。検出面での規模は、長軸約2.5m、短軸約0.8mを測る隅丸長方形プランを呈し、底面までの深さは約10cmと浅い。底面は４号と同様に周囲がレキ層となっており凹凸が著しいが、全体的にはレンズ状となっている。壁面は底



第34図　４号土坑実測図（1/30）

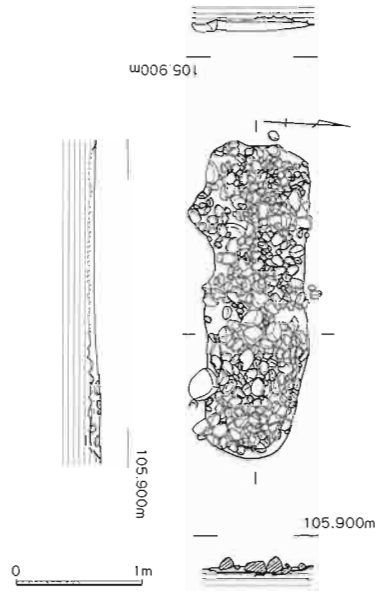
端面からそのまま斜め方向に緩やかに立ち上がる。この中からは、多数の河原石が充填された状態で検出されたが、遺物の出土はなかった。

６号土坑（第21・36図）

調査区の東側で確認された。検出面での規模は、直径約1.4ｍを測る円形プランを呈し、底面までの深さは約20㎝を測る。底面はほぼ平坦で、壁面はやや斜め方向に緩やかに立ち上がる。この中からも、多数の河原石が充填された状態で検出され、それに混じって陶器片などが出土した。

６号土坑出土遺物（第39図）

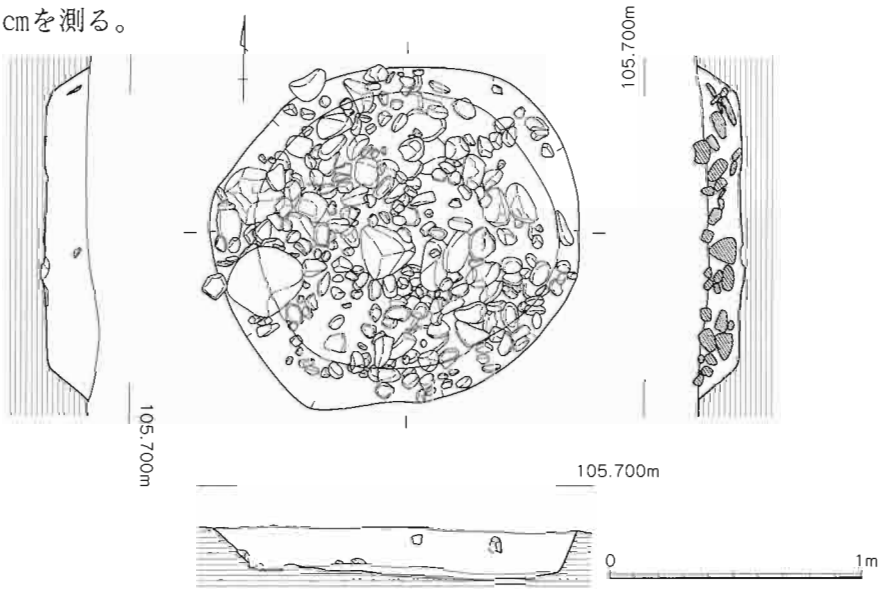
11は備前系甕底部片である。12は瓦質土器羽釜である。外面煤付着。13・14は鉄器である。13は鎌の形態と考えられるが、断面は両刃となっており、不明。残存長4.9㎝。14は釘である。先端を欠損。残存長5.2㎝を測る。



第35図　５号土坑実測図（1/60）

７号土坑（第21・37図）

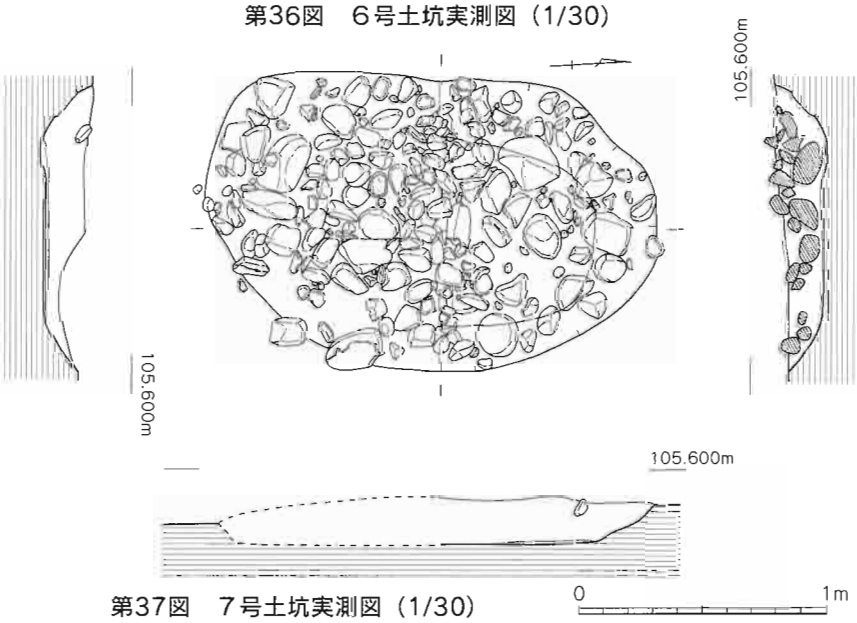
調査区の東側で確認され、土坑北側を半裁して掘り下げた。検出面での規模は、長軸約1.8ｍ、短軸約1.2ｍを測る楕円形プランを呈し、底面までの深さは約20㎝を測る。底面は砂礫層となっており、やや凹凸がみられるが、全体的にはほぼ平坦となっている。壁面はやや斜め方向に緩やかに立ち上がる。この中からも多数の河原石が充填された状態で検出されたが、遺物の出土はなかった。



第36図　６号土坑実測図（1/30）

８号土坑（第21・38図）

調査区の東側で確認された。検出面での規模は、長軸約1.5ｍ、短軸約1.2ｍを測る不定形プランを呈し、底面までの深さは約15㎝を測る。底面は平坦ではあるが、やや中央付近が低く

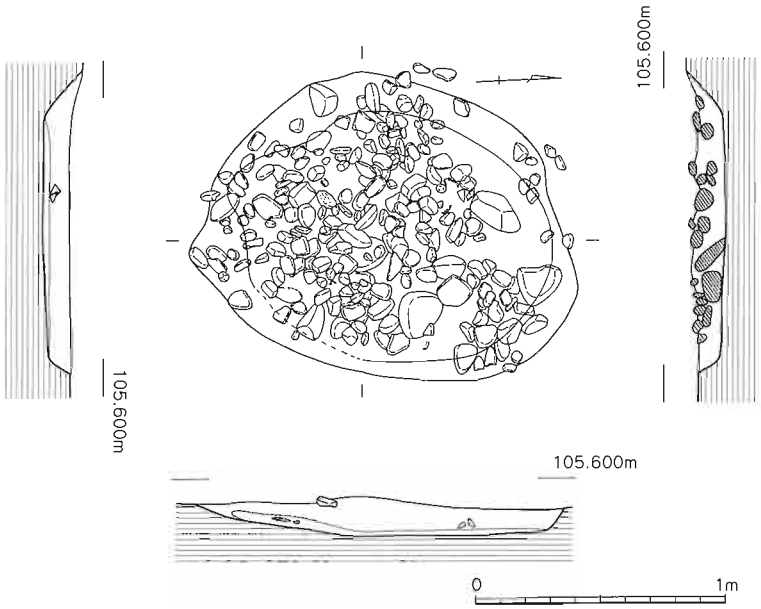


第37図　７号土坑実測図（1/30）

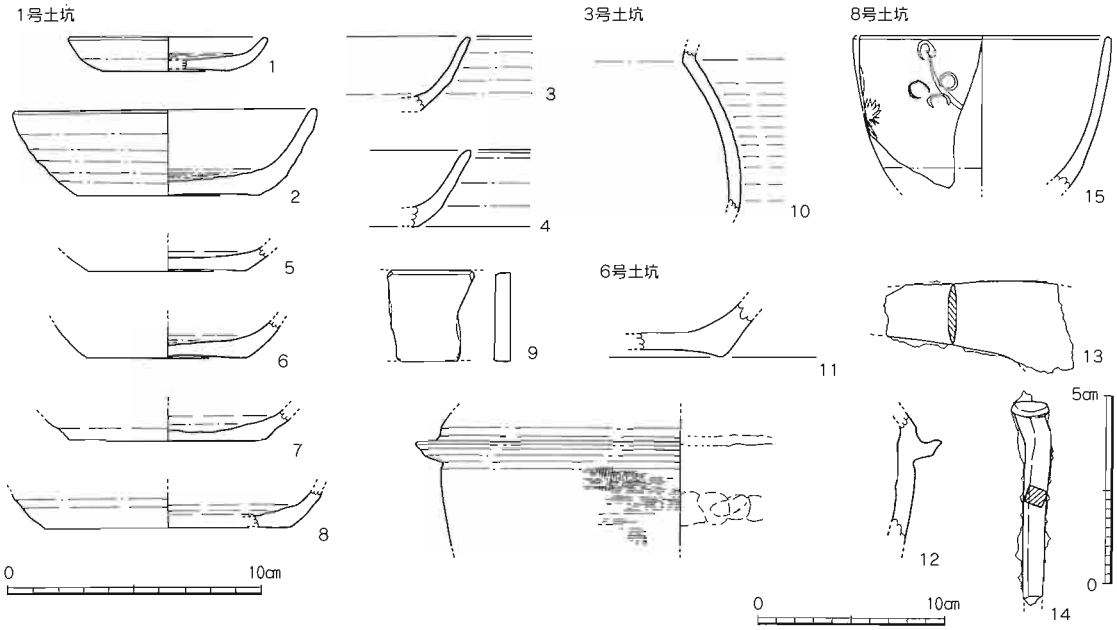
なるレンズ状を呈し、壁面はやや斜め方向に緩やかに立ち上がる。この中からも多数の河原石が充填された状態で検出されたが、それに混じって陶磁器片や鉄滓が出土した。

8号土坑出土遺物(第39図)

15は染付である。外面花文を描く。16は鉄滓である。形態から椀型鍛冶滓と考えられる。残存長8.5㎝。重量99ｇを測る。



第38図　8号土坑実測図（1/30）



第39図　土坑出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）

3）溝

1号溝（第21図）

調査区南側で確認され、途中途切れながら東西方向に延びている。溝の残存長は約12.7m、最大幅約1.2m、深さ約10㎝を測る。溝の底面はほぼ平坦で、この中からは、数点土師質土器片が出土したが、小さく図示できなかった。

２号溝（第21図）

調査区西端で確認され、調査区外へ延びている。溝の残存長は約７m、最大幅約２m、深さは最も深い位置で約20cmを測る。溝の断面はレンズ状を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。溝の中からは、土師質土器片や輸入陶磁器片がわずかに出土したが、小さく図示できなかった。

３号溝（第21図）

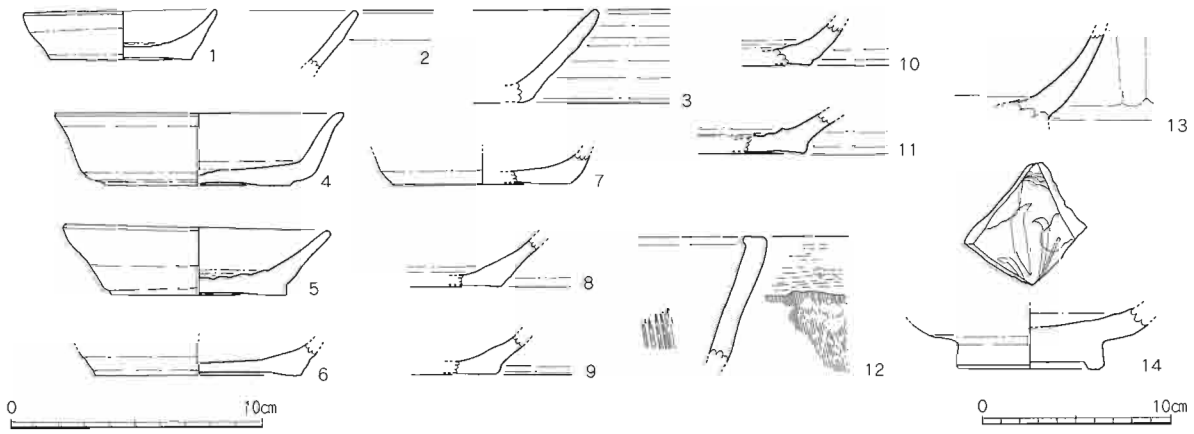
調査区北東端で確認され、両調査区外へ延びている。溝の残存長は約9.7m、最大幅約2.5m、深さはトレンチ部分で約20cmを測る。溝の断面は浅い「U」字状を呈する。溝の中からの出土遺物はなかった。

４）その他の遺構と遺物

調査区の中からは建物として捉えることができなかった多数の柱穴群が確認され、この中からも多くの遺物の出土があった。また、表土中からも、時期の特定できる貴重な遺物も多く出土している。ここでは、それらの遺物のうち図化可能をまとめて図示し、説明を加えることにする。

柱穴出土遺物（第40図）

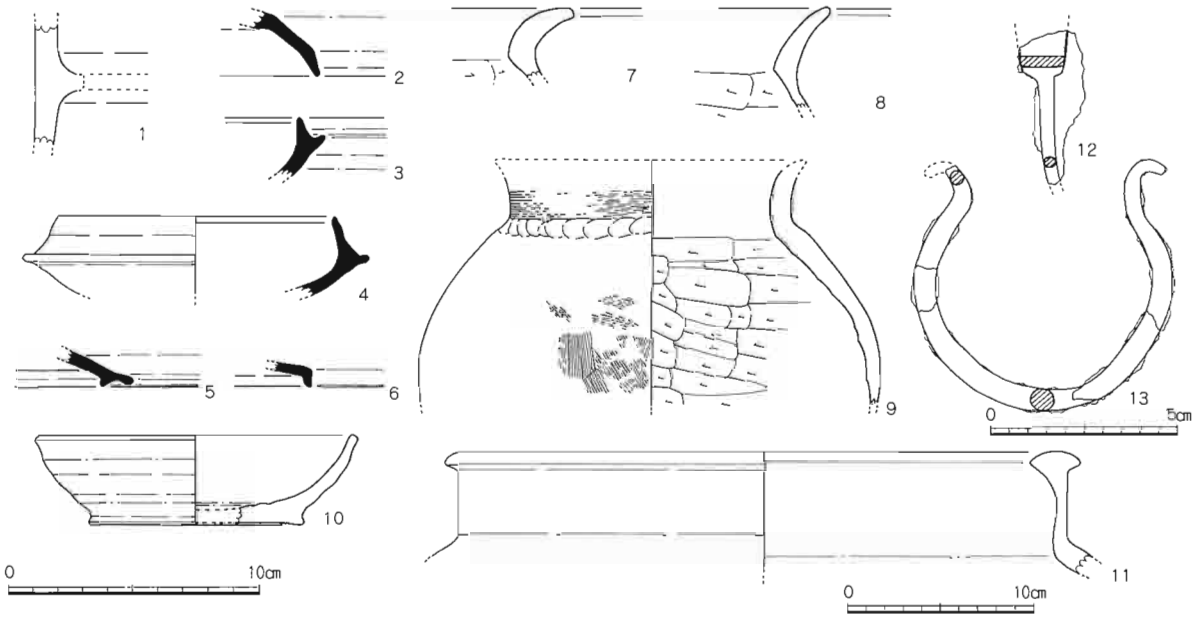
１はP43、２はP35、３はP34、４はP0、５はP44、６・７はP１、８はP２、９・12はP38、10はP10、11はP32、13はP36、14はP19出土である。１は土師質土器小皿である。底端部から内湾気味に立ち上がる。内底面は刷毛状のヘラ痕指ナデ消し。底面糸切り。２～11は土師質土器坏である。２・３は口縁部にほぼ直線的にのびる。４は底端部からやや外反気味にのびる。内底面は刷毛状の輪状ヘラ痕指ナデ消し。底面糸切り。５は底端面から口縁部に向かって直線的にのびる。内底面は刷毛状の輪状ヘラ痕指ナデ消し。底面糸切り。６～11は底部片。内底面、底面はいずれも４・５と同様、内底面は刷毛状の輪状ヘラ痕指ナデ消し。底面糸切り底面ヘラ切り。12は瓦質土器擂鉢である。内面５本の擂目が見られる。13・14は青磁碗である。13は鎬蓮弁文青磁碗片で外面に蓮弁が浮き彫りされる。14は見込み部分に花文が彫描される。



第40図　柱穴出土遺物実測図（1/3・1/4）

調査区内出土遺物（第41図）

１は弥生土器甕胴部片である。外面に突帯が貼付される。２～６は須恵器である。２は坏蓋である。端部は丸く収め、天井部は回転ヘラ削りを施す。３・４は坏身である。蓋受部は小さく開き、端部は短くのびる。５は蓋である。短いかえりがつく。６も蓋で鳥嘴状を呈する。７・８は甕口縁部で、外に向かって大きく「く」の字に外反する。９も甕である。球形の胴部を呈し、頸部から口縁部に向かって大きく外反する。10は土師質土器坏である。底端部から口縁部に向かって内湾気味にのびる。内底面は刷毛状のヘラによる輪状痕を指でナデ消し、底面は糸切りである11は備前系甕口縁部である。口縁端部は扇子状に膨らむ。12・13は鉄器である。12は鏃である。先端部を欠損する。残存長約4.2cm、最大幅約1.4cmを測る。13は吊り輪状を呈する。最大幅約7.0cm、厚さ約0.6cmを測る。



第41図　調査区内出土遺物実測図（1/2･1/3･1/4）

Ⅲ　調査のまとめ

１．高瀬条里永平寺地区の遺構の時期について

調査区内からは、弥生時代から近世にかけての土器が出土したが、このうち大部分は中世に属するものであった。この中世期の土器の器種構成については、土師質土器・瓦質土器・輸入陶磁器などがみられた。これらの遺物の時期比定については、市内においてはまだ中世期の全体の編年基準となるものが量的に不十分であり組めていない段階であるため、すでに横田・森田・山本氏などにより分類整理が進んでいる大宰府における調査資料をもとに市内遺跡出土遺物の時期を検討していくことにする。まず、本遺跡から出土した青磁碗については、Ｐ19出土の割花文は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-２a類に、複弁鎬蓮弁文は同じく龍泉窯系青磁碗Ⅰ-５ｂ類に、鎬蓮弁文の内底面に陰印刻草花文がみられるタイプは同じく龍泉窯系青磁碗Ⅰ-５c類にそれぞれ分類される。山本氏はこれらの青磁碗のうち、Ⅰ-２類は、青磁が白磁にかわって増加するＤ期(12世紀中頃～後半)とし、Ⅰ-5ab類は、次の時期を代表するタイプのものでＥ期（13世紀初頭から前半）とし、Ⅰ-５ｃ類はさらに

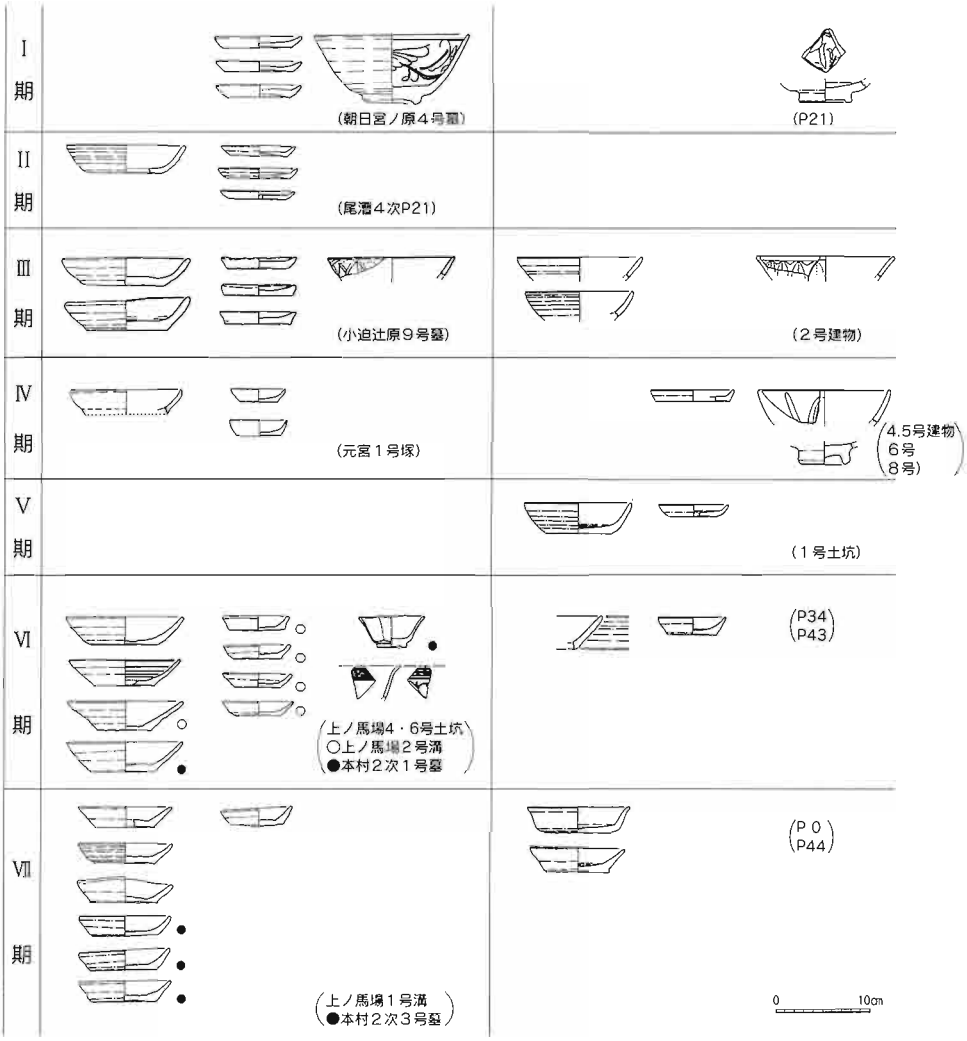
その後に登場するタイプでＦ期（13世紀中頃～14世紀初頭）にそれぞれ文様形態により時期区分をしている。次に土師器をみていくことにするが、これについては、森田氏により口径・器高にみられる時期的な推移が整理され、また市内遺跡では田中氏が慈眼山遺跡で分類の指標を示しているので、これらを参考としながらこれまで調査された市内遺跡の遺構からまとまって出土した遺物を中心にみていくことにする。市内で中世土師器がまとまって出土した遺構としては、朝日宮ノ原遺跡4号墓、尾漕遺跡4次Ｐ21、小迫辻原遺跡Ｂ区９号墓、元宮遺跡３次１号塚墳丘内出土遺物、慈眼山遺跡Ａ区１・２号土坑・整地層、上ノ馬場遺跡土坑・溝、、荻鶴遺跡１号土坑・溝、尾漕遺跡Ａ地区２号墓などがある。これらのうち、朝日宮ノ原遺跡４号墓は、龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2b類、青磁合子のほか小皿３点が出土している。この小皿はいずれも底部がやや薄手で、口縁部は底端部から短く斜め方向に直線的に延びる。口径は9.0～9.2㎝、器高は1.1～1.3㎝を測る。尾漕遺跡４次P21は、小皿3点、坏１点が出土している。小皿は器形が朝日宮ノ原例に類似しているが、口径8.2～8.8㎝、器高0.9～1.2㎝とやや比較すると小さい。坏は底端部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるタイプで、口径13.2㎝、器高3.2㎝を測る。小皿から朝日宮ノ原例より後出するものと推測される。小迫辻原9号墓は、龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5ｂ類とともに坏2点、小皿３点が出土している。坏は両者とも尾漕４次例に類似し、口径13.2～13.6㎝、器高3.1～3.6㎝を測る。小皿は、底部に厚みがあり、口縁部は短く立ち上がるタイプで、口径7.9～8.0㎝、器高1.2～1.4㎝を測る。青磁碗や小皿は朝日宮ノ原例や尾漕4次例に比し後出するタイプであり、それらより新しい時期に区分される。元宮遺跡３次１号塚墳丘内遺物は、形の復元できるもので、坏１点、小皿２点が出土している。坏は口縁部のみであるが、底端部から口縁部にかけて外反気味に延び、端部付近で内湾するタイプで、口径12.4㎝、器高2.8㎝を測る。また小皿は底端部から坏と同様の立ち上がりを示すものと、底端部からやや内湾気味に直口に近い形で立ち上がるものの２つのタイプがみられる。口径6.0～6.4㎝、器高1.5～1.8㎝を測る。小皿はこれまでの遺構出土のものとは別タイプであり、森田氏は14世紀に新たに登場するタイプとして分類している。これまでみてきた遺構のものより新しい時期とみられる。慈眼山遺跡A区整地層中からは多量の坏・小皿が出土している。田中氏は坏に注目し、径の小さな底部を持ち、底端部から口縁部にかけて直線的に延びるタイプを坏Ｃ類に分類し、このタイプが前段階の遺構には含まれていないこと、またそれらの中から出土した土師器の調整の特徴として、内底面にみられる渦状痕（篦回転輪状痕）を指でナデ消す技法が取られていることを指摘している。これらと同様の器形が出土した遺構として上ノ馬場遺跡４・６号土坑、２号溝拡張部、10号溝、本村遺跡２次１号墓、荻鶴遺跡１号土坑などがあげられる。また先の元宮遺跡例はこうした調整がみられないことから、これらの遺構より古い時期にあてはめることができる。また、本村遺跡２次３号墓からは坏が３点出土している。これらの坏は同遺跡１号墓のものに比し、器面調整が雑で小型化の様相がみられる。３号墓は、１号墓を切っておりそれより新しい時期としておさえられる。これと同様の器形の坏は、上ノ馬場遺跡１号溝や尾漕遺跡A区２号墓などでみられる。

以上のような資料と比較しながら、本調査区の出土遺物をみてみると、２号建物は青磁碗Ⅰ-5ｂ類や坏が出土している。坏は破片資料であるが口径12.2㎝、14.2㎝を測る。青磁碗とのセット関係から小迫辻原遺跡例とほぼ同時期とみることができる。4・5号建物から出土した小皿は、復元口径9.4㎝、器高1.3㎝を測り、器形的には小迫辻原例と同じかやや後出すると考えられる。６号

建物からは青磁碗Ⅰ-５ｃ類が出土し、２号建物より新しい時期と考えられる。８号建物は鎬蓮弁文と単弁鎬蓮弁文青磁碗が出土しており、これも時期的には６号建物とほぼ同時期と考えられる。１号土坑からは坏と小皿が出土しているが、法量を復元できるのは各１点のみである。坏は口径12.2cm、器高3.5cmを測り、器形は小迫辻原例や尾漕4次例、上ノ馬場４号土坑例とさほど変わらないが、小皿は口径8.0cm、器高1.35cmを測り、４・５号建物に比べ器高が高く、口縁部が延びる傾向にある。また、調整の面からは慈眼山遺跡例などに見られる手法がとられているものの、坏C類の出土がないため、慈眼山例などより一時期古い様相がうかがえる。また、P34は慈眼山坏C類と同様の形態をとるもので、さらにP43出土の小皿も同例にみることができる。この他、P44出土の坏はC類が小型化したタイプで、タイプの異なるP0出土のものも含めて本村３号墓例などと同様のタイプとしてみることができる。

以上から本遺跡の中世遺構の時期として別表に示すように全体で７期としてた。Ⅰ期は、柱穴P19が該当し、朝日宮ノ原４号墓と同様の12世紀後半から13世紀前半頃に相当し、Ⅱ期は本調査区で確認されなかったが、小皿がさらに小型化する尾漕４次P21の遺物をとって13世紀中頃～後半に、Ⅲ期は、２号建物が該当し、小迫辻原９号墓と同様の13世紀末から14世紀前半に相当し、Ⅳ期は、４・５号、６、８号建物が該当し、元宮遺跡例と同様の14世紀中頃から後半に相当し、Ⅴ期は1号土坑が該当し、15世紀前半から中頃に相当し、Ⅵ期は柱穴Ｐ34やＰ43が該当し、慈眼山遺跡整地層、上ノ馬場４・６号土坑、２号溝、本村２次１号墓と同様の15世紀後半に相当し、Ⅶ期は柱穴Ｐ44、P0が該当し、上ノ馬場１号溝、本村２次３号墓と同様の16世紀代に相当しよう。

この他の遺物については、調査区内から出土した１は弥生時代後期、２～６は須恵器坏端部の特徴から、２～４は古墳時代後期(６世紀後半)、５は(７世紀後半)、６は古代(８世紀前半)、７～９は土師器口縁部の特徴から古墳時代後期（６世紀後半）と推測される。また、３・８号土坑から出土した陶器染付類、はいずれも近世後期の所産と考えられる。



第42図　日田市内遺跡出土遺物の比較図（1/8）

２．遺跡の性格について

本遺跡からは、弥生時代以降から近世にかけての遺物が出土した。弥生時代から古代にかけての遺構は調査区内より出土していないが、高瀬川の東側河岸段丘上には弥生中～後期の遺構や古代の竪穴住居跡が確認された惣田遺跡があり、また６世紀後半頃に築造された惣田塚古墳が存在すること、また調査区より南に約300ｍほどの地点にある高瀬条里深野田遺跡からは、縄文時代の土坑や古墳時代中期の竪穴住居跡も発見されていることから、調査区周辺には、縄文時代から古代に至る各時代の遺構が存在していた可能性がある。調査区内で確認された遺構は先に説明したように、12世紀後半から16世紀までの掘立柱建物９棟、土坑２基及び近世後期の土坑７基である。

立地と環境でふれたように、調査区西側には周囲の畑や水田造成の時に掘り出され、祀られている板碑や多数の五輪塔の石材がある。板碑は２基あり、向かって北側の１基には、「正和二季」（1313年）の、もう１基には「応長元年」（1311年）の造立年号がみられる。他の石塔類についての時期は不明であるが、これらの石塔類がこの一帯に立てられた理由として、地域の人々が伝えている永平寺の存在がある。「日田郡司職次第」には、保元２年（1157）に暗殺された郡司大蔵永平の霊を祀るため、孫である郡司大蔵永俊が永平寺を建立したと記録されている。また、当時高瀬氏の居城があった場所は、「造領記」によれば、調査区の約300ｍ東側の河岸段丘に位置し、高瀬氏が滅んだ後、その霊を祀るために建てられたと伝えられる高瀬天満宮一帯とされている。この永平寺は、天文17年（1547）郡老間の内紛により大蔵氏の一族である高瀬氏が滅んだ後、廃寺となったと伝えられるが、調査区内の建物や土坑から出土した遺物の年代は、ほぼその創建時期から廃寺となる時期までの遺物を含んでおり、調査区内が寺域内にあった可能性は高いと考えられる。近世以降は、調査区内では土坑が7基確認されただけである。この時期の建物柱穴などは確認されておらず、これらの土坑は畑に伴って掘られた石溜めであった可能性がある。このうち、８号土坑からは１点鉄滓（椀型鍛冶滓）が出土している。現在、調査区一帯の小字は「火ノ口」とされ、またその北側の小字は「カジヤ園」となっている。近世期には、永平寺の寺域内に鍛冶を伴う集落が新たに生まれたことを物語っている。

参考文献

1）田中裕介編『慈眼山遺跡Ａ区』日田教職員住宅改築工事に伴う発掘調査報告書　大分県教育委員会 1991

2）横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入陶磁器について―型式分類を中心に―」『九州歴史資料館研究論集４』九州歴史資料館 1978

3）山本信夫「Ⅲ土器・陶磁器11(2)中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会真陽 1995

4）田中裕介編『小迫辻原遺跡ⅠA・B・C・D編』九州横断自動車道関係発掘調査報告書(10)大分県教育委員会 1999

5）行時志郎編『尾漕遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第30集 2001

6）若杉竜太編『元宮遺跡３次』日田市埋蔵文化財調査報告書第25集 2000

7）友岡信彦編『尾漕遺跡群』九州横断自動車道関係発掘調査報告書(9)大分県教育委員会 1998

8）行時志郎編『上ノ馬場遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第23集 2000

9）行時志郎編『荻鶴遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第9集 1995

10）橋本操六「第Ⅱ編第2章中世」『日田市史』日田市 1990

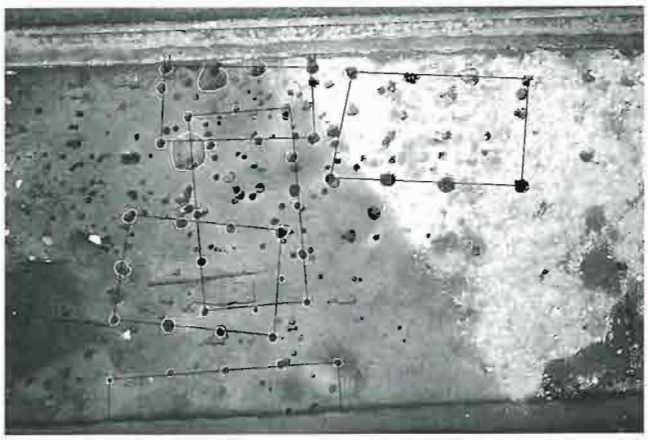
第３表　高瀬条里永平寺地区出土土器観察表

挿図番号	遺物番号	遺構名	種別	器種	法量（　）は復元径(cm) 器高	口径	底径	胎土 石英／A・長石／B・角閃石／C・金雲母／D 赤色粒／E・白色粒／F・細砂粒／G	色調	備考
第30図	1	２号建物跡	土師質土器	坏		(14.2)		A．B．C．E	淡黄茶色	
第30図	2	２号建物跡	土師質土器	坏		(12.2)		A．B．C	淡灰褐色	
第30図	3	２号建物跡	土師質土器	坏				A．B．C．E	淡茶灰色	
第30図	4	２号建物跡	青磁	碗		(15.6)			青緑色	
第30図	5	３号建物跡	土師質土器	坏				A．B．C．E	淡茶褐色	
第30図	6	３号建物跡	土師質土器	坏				A．B．C．E	淡褐色	
第30図	7	３号建物跡	瓦質土器	火鉢				A	暗灰色	
第30図	8	4･5号建物跡	土師質土器	小皿	1.3	(9.4)	(8.4)	A．B．C．E	淡茶褐色	
第30図	9	4･5号建物跡	土師質土器	坏				A．B．C．E	淡茶褐色	
第30図	10	4･5号建物跡	瓦質土器	火鉢				A．E．F	黒褐色	
第30図	11	６号建物跡	土師質土器	坏				A．B．C．E	暗茶褐色	
第30図	12	６号建物跡	土師質土器	坏				A．B．C．E	淡褐色	
第30図	13	６号建物跡	土師質土器	坏				A．B．C．E	淡褐色	
第30図	14	６号建物跡	土師質土器	坏				A．B．C．E	淡灰褐色	
第30図	15	６号建物跡	青磁	碗			5.6		濃緑色	
第30図	16	７号建物跡	土師質土器	坏		(10.6)		A．B．C．E	淡灰褐色	
第30図	17	７号建物跡	土師質土器	坏				A．B．C．E	淡褐色	
第30図	18	８号建物跡	土師質土器	坏				A．B．C．E	淡茶灰色	
第30図	19	８号建物跡	土師質土器	坏		(8.2)		A．B．C．E	淡茶灰色	
第30図	20	８号建物跡	青磁	碗					淡緑灰色	
第30図	21	８号建物跡	青磁	碗		14.8		A	淡緑灰色	
第30図	22	９号建物跡	土師質土器	坏				A．B．C	淡褐色	
第39図	1	１号土坑	土師質土器	小皿	1.35	8.0	4.8	A．C	淡橙褐色	
第39図	2	１号土坑	土師質土器	坏	3.5	12.2	7.3	A．B．C．E	淡黄灰色	
第39図	3	１号土坑	土師質土器	坏				A．C．E	淡橙褐色	
第39図	4	１号土坑	土師質土器	坏				A．C．E	淡橙灰色	
第39図	5	１号土坑	土師質土器	坏			(6.2)	A．B．C．E	淡橙褐色	
第39図	6	１号土坑	土師質土器	坏			(6.2)	A．B．C．E	淡茶褐色	
第39図	7	１号土坑	土師質土器	坏			(8.0)	A．C	淡橙褐色	
第39図	8	１号土坑	土師質土器	坏			(10.8)	A．B．C．E	淡橙褐色	
第39図	10	３号土坑	陶器	壺				A	紫褐色	
第39図	11	６号土坑	陶器	甕				A．B．F．G	茶褐色	
第39図	12	６号土坑	瓦質土器	羽釜				A．F	淡黒灰色	
第39図	15	８号土坑	染付	碗		(10.4)				
第40図	1	柱穴Ｐ43	土師質土器	小皿	2.0	7.8	5.7	A．C	淡茶褐色	
第40図	2	柱穴Ｐ35	土師質土器	坏				A．B．C．E	淡茶褐色	
第40図	3	柱穴Ｐ34	土師質土器	坏	(3.6)			A．B．C．E	淡茶褐色	
第40図	4	柱穴Ｐ０	土師質土器	坏	2.9	11.6	7.3	A．B．C．E	黄茶色	
第40図	5	柱穴Ｐ44	土師質土器	坏	2.9	10.8	7.0	A．C．E	淡黄茶色	
第40図	6	柱穴Ｐ１	土師質土器	坏			(8.2)	A．B．C．E	淡茶褐色	
第40図	7	柱穴Ｐ１	土師質土器	坏			(7.2)	A．B．C．E	淡茶灰色	
第40図	8	柱穴Ｐ２	土師質土器	坏				A．B．C．E	淡茶褐色	
第40図	9	柱穴Ｐ38	土師質土器	坏				A．C．E	淡褐色	
第40図	10	柱穴Ｐ10	土師質土器	坏				A．C．E	淡灰茶色	
第40図	11	柱穴Ｐ32	土師質土器	坏				A．C．E	茶褐色	
第40図	12	柱穴Ｐ38	瓦質土器	擂鉢				A．C	黒褐色	
第40図	13	柱穴Ｐ36	青磁	碗					淡緑灰色	
第40図	14	柱穴Ｐ19	青磁	碗						
第41図	1	調査区内	弥生土器	甕				A．B．C	淡灰白色	
第41図	2	調査区内	須恵器	坏蓋				A．F	淡青灰色	
第41図	3	調査区内	須恵器	杯身				A．F	淡灰色	
第41図	4	調査区内	須恵器	杯身		(11.1)		A	淡灰色	
第41図	5	調査区内	須恵器	坏蓋				A	暗青灰色	
第41図	6	調査区内	須恵器	杯蓋				A．F	青灰色	
第41図	7	調査区内	土師器	甕				A．B．C．E	淡茶褐色	
第41図	8	調査区内	土師器	甕				A．B．C	淡褐色	
第41図	9	調査区内	土師器	甕				A．B．C．E	淡褐色	
第41図	10	調査区内	土師質土器	坏	3.6	13.0	6.7	A．C．E	淡黄灰色	
第41図	11	調査区内	陶器	甕				A	暗褐色	

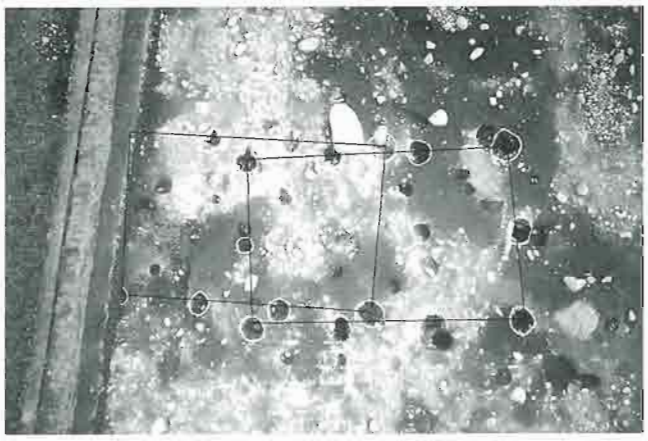
遺跡全景（真上より）

遺跡全景（真上より）

図版７



１～７号建物



８・９号建物

１～７号建物

柱穴内土器出土状況

柱穴内土器出土状況

１号土坑遺物出土状況

１号土坑土層堆積状況

２号土坑半裁状況

３号土坑集石検出状況

３号土坑半裁状況

６号土坑半裁状況

６号土坑完掘状況

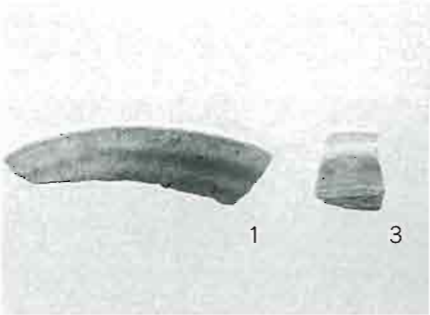
７号土坑集石検出状況

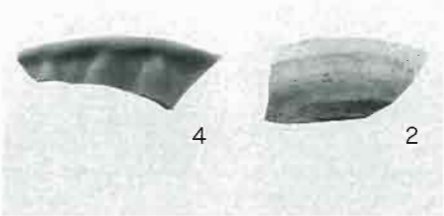
８号土坑完掘状況

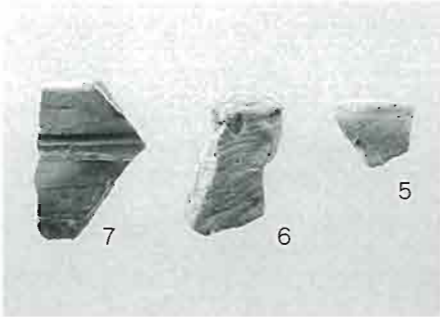
２号溝状遺構検出状況

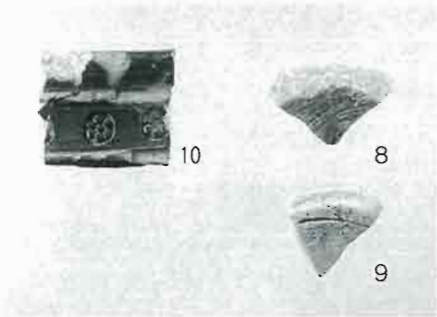
３号溝状遺構トレンチ完掘状況

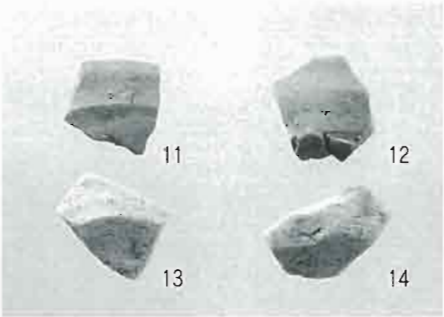
図版９

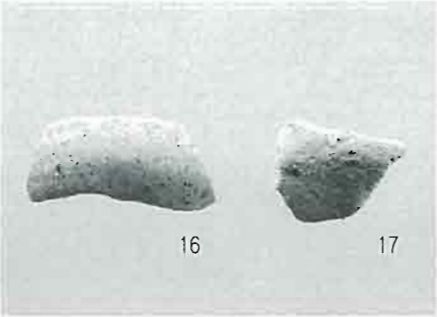


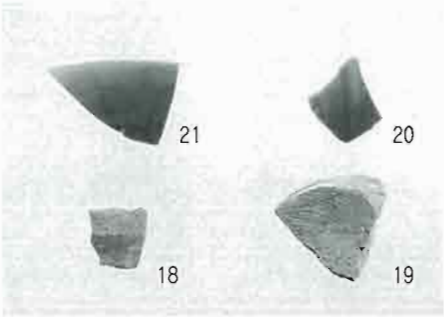






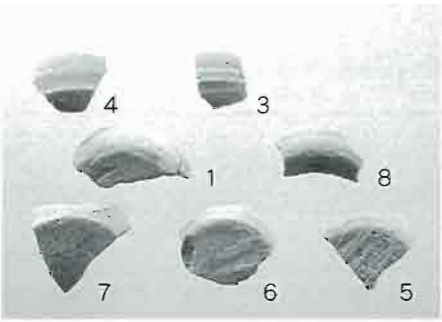




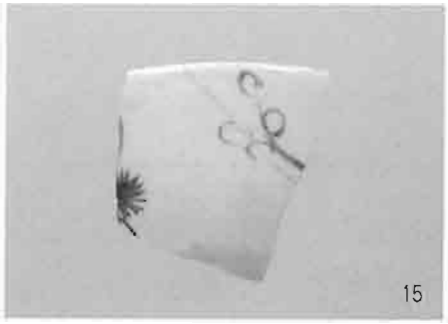


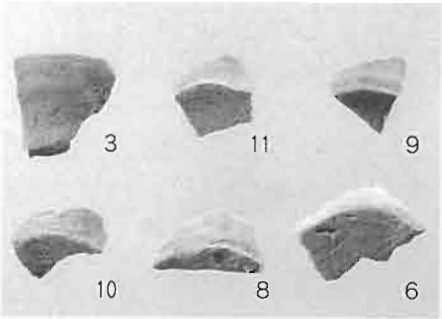
建物跡柱穴内出土遺物

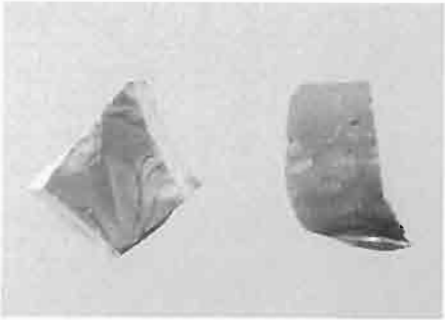
1～ 4	２号建物跡
5～ 7	３号建物跡
8～10	４・５号建物跡
11～15	６号建物跡
16・17	７号建物跡
18～21	８号建物跡
22	９号建物跡



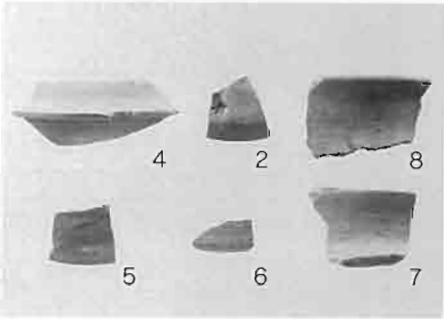
1～ 9　1号土坑
10　　3号土坑
11～14　6号土坑
15・16　8号土坑

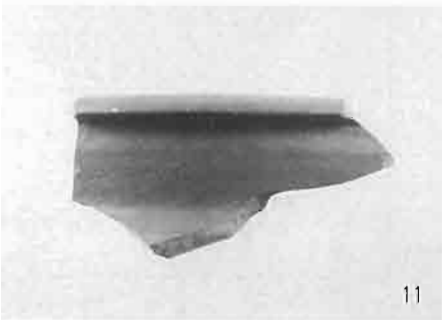


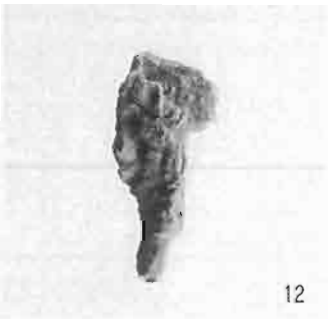


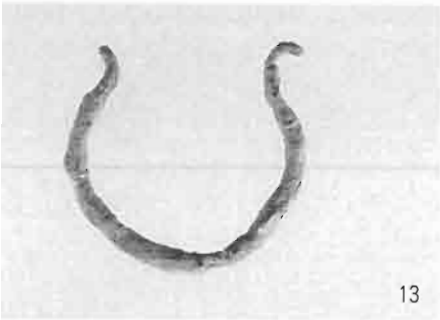


柱穴内出土遺物









調査区内出土遺物

報告書抄録

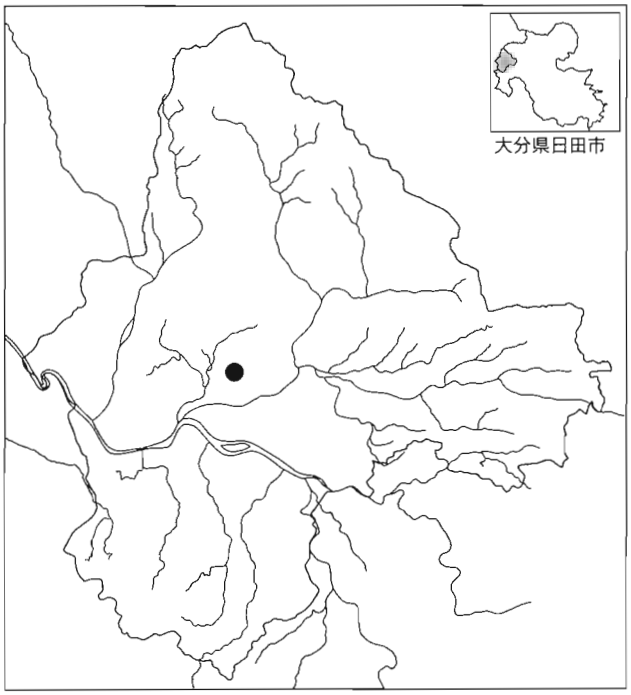
ふりがな	たかせじょうりいひじちく
書名	高瀬条里永平寺地区
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第34集
編著者名	行時志郎
編集機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601　日田市田島2-6-1
発行年月日	2001年12月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
高瀬条里永平寺地区	大分県日田市 大字高瀬字 火ノ口663-1					20001002 ～20001115	700	宅地造成

所要遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高瀬条里永平寺地区		縄文時代	竪穴住居跡　1軒	縄文土器・石器	
		弥生時代 ～古墳時代	竪穴住居跡　7軒	弥生土器・石器・鉄器	
		中世	溝　3条 掘立柱建物　9棟 土坑　2基	土師器・輸入陶磁器・瓦質土器	
		近世	土坑　6基	染付・鉄器・鉄滓	

尾部田遺跡

遺跡全景



遺 跡 位 置 図

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経過

平成12年７月３日、貞清製材株式会社より、日田市大字小迫字尾部田808-1番地に宅地分譲開発を実施する計画があることから、市教育委員会に事前の照会文書が提出された。事業予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である尾部田遺跡の範囲内であり、また近接する台地上には、国指定史跡小迫辻原遺跡や弥生時代や中世の集落遺構が発掘されている朝日宮ノ原遺跡、日田市内最大の前方後円墳である天満古墳群などの遺跡が存在しており、遺構の存在する可能性が高いと考えられることから、平成12年８月３日に国庫補助事業により試掘調査を実施した。調査の結果、トレンチ内からは弥生時代の円形住居跡や古代と考えられる柱穴などの遺構が検出され、それに伴う土器や石器も出土した。

この結果をふまえ、事業者である貞清製材株式会社取締役社長貞清正信氏と協議を行い、計画では、予定地の南側約３割程度を切土とし、中央に勾配をつけた道路を設置する計画であることから、工事により遺構の損なわれる可能性のある範囲を対象とした発掘調査を実施することで合意に達し、平成12年11月30日に委託契約書を提出し、平成12年12月5日から同年12月25日までの期間、発掘調査を実施した。

２．調査の経過

発掘調査では、切土となる南側の一段高くなっている部分より機械による表土除去及び遺構検出作業を進めていった。その後、12月７日には遺構検出作業を終了し、作業員による遺構精査並びに掘り下げ作業を順次行っていった。その過程の中で、当初弥生時代の遺構が主体を占めると考えていたが、作業が進むにつれ、縄文時代、古墳時代、古代の竪穴住居跡をはじめとする遺構群が主体であり、試掘で発見された弥生時代の遺構については検出することはできなかった。試掘調査のトレンチは調査対象となった範囲より北側であったため、その位置より北側には弥生時代の遺構が広がっていたことが想定されるが、いずれにしても一部トレンチによる試掘調査の難しさを痛感することとなった。最終的に調査は、切土部分のほか道路部分も対象としたが、北側では遺構検出面までの含土が深くなっており、工事で失われる危険性は薄いと判断されるため、この部分は確認調査のみの実施とした。その後12日に諫元憲司事務所に基準点の設置、22日には空中写真撮影を実施、24日には実測作業を完了し、翌25日に器材の撤去を行ってすべての発掘調査業務を完了した。

３．調査組織の構成

調 査 主 体　日田市教育委員会
調査責任者　日田市教育長　加藤正俊（~平成12年11月）後藤元晴（平成12年11月～）
調 査 事 務　文化課課長原田俊隆　課長補佐石井英信　主査佐々木豊文（～平成13年３月）
　　主査島崎誠司（平成13年４月～）
調　査　員　文化課主任行時志郎(調査担当)　主事若杉竜太　主事渡邉隆行(調査担当)
調査作業員　中尾タマエ、高村笑美子、猪熊ヨネ、伊藤暁子、手嶋トシエ、蒲池妙子、穐本文雄
　　安達義男、安心院照雄、安達アサ子、安心院ケイ子、安達ツヤ子、行村シズエ
整理作業員　梶原ひとえ、吉田千津子

４．遺跡の立地と環境

尾部田遺跡は日田盆地北部、谷状沖積地のやや小高い位置に存在する。遺跡のある谷部は、比高差約30メートルを測る平坦な台地の間を縫うように東西に「S」字状に細長く延びる。谷部の幅は300～500メートル程で、台地の裾に近くなるにつれ高くなっており、断面観は「U」字状を呈している。現在この一帯はこうした地形を利用して、台地の裾の小高い場所には、朝日町や小迫町などの集落が帯状に連なって立地し、その間を畑として葡萄や芋などの果物・野菜類を中心に栽培し、中央の低い湿地部分は水田として活用している。これらの水田への幹線水路は、現在水田の両側に設けられ、上流の渡里川から井関を通して引き入れられ谷部一帯を潤しているが、かつては台地の裾に湧水地があり、その水をくみ上げて水田経営を行っていた時期もあったようである。

本遺跡の周辺台地は、市内でも有数の遺跡地帯として知られ、これまでの発掘調査で数多くの様々な遺構が発見されている。遺跡東部にある小迫辻原遺跡では、昭和61年から平成５年度まで行われた発掘調査で、弥生時代から近世に至るまでの各時期の遺構が発見され、とくに古墳時代前期につくられた環溝居館は、弥生時代から古墳時代に移り変わる歴史的な動きを知りえる貴重な発見として全国的に注目を集めている。また古代には、「コ」字型の官衙風配置を呈する掘立柱建物群とともに近くの竪穴住居跡から「大領」と書かれた墨書須恵器が出土し、古代日田を支配した郡司日下部氏の居宅の可能性も推測されている。さらに中世では「ロ」字状に溝で囲まれた中に多数の掘立柱建物や墓などが発見され、鎧の一部である小札や武士の幼名である「乙王丸」と書かれた墨書青磁碗も出土しており、中世の武家屋敷跡としての可能性も考えられている。この他、遺跡北側にある朝日宮ノ原遺跡では、昭和62・63年度の発掘調査で弥生時代中期から後期の多数の竪穴住居跡や石棺墓や木棺墓をはじめとする墓、また中世では青磁碗や紅皿、鋏、数珠、鏡などの副葬品を持つ木棺墓などが発見されている。同じ台地上の先端には、古墳時代後期に築造された日田市内最大の前方後円墳である天満古墳群が存在し、平成９年度からの確認調査で剣菱型の周溝や須恵器の埴輪壷の存在が明らかとなっている。また、ここ数年で沖積地の発掘調査も行われ、谷の東端にあたる本村遺跡では、弥生時代後期の多数の竪穴住居跡をはじめ、それに続く古墳・古代の竪穴住居跡や中世の掘立柱建物・墓なども発見され、台地上だけでなく沖積地においても、台地と同様の時期に集落が存在していたことが明らかとなってきている。

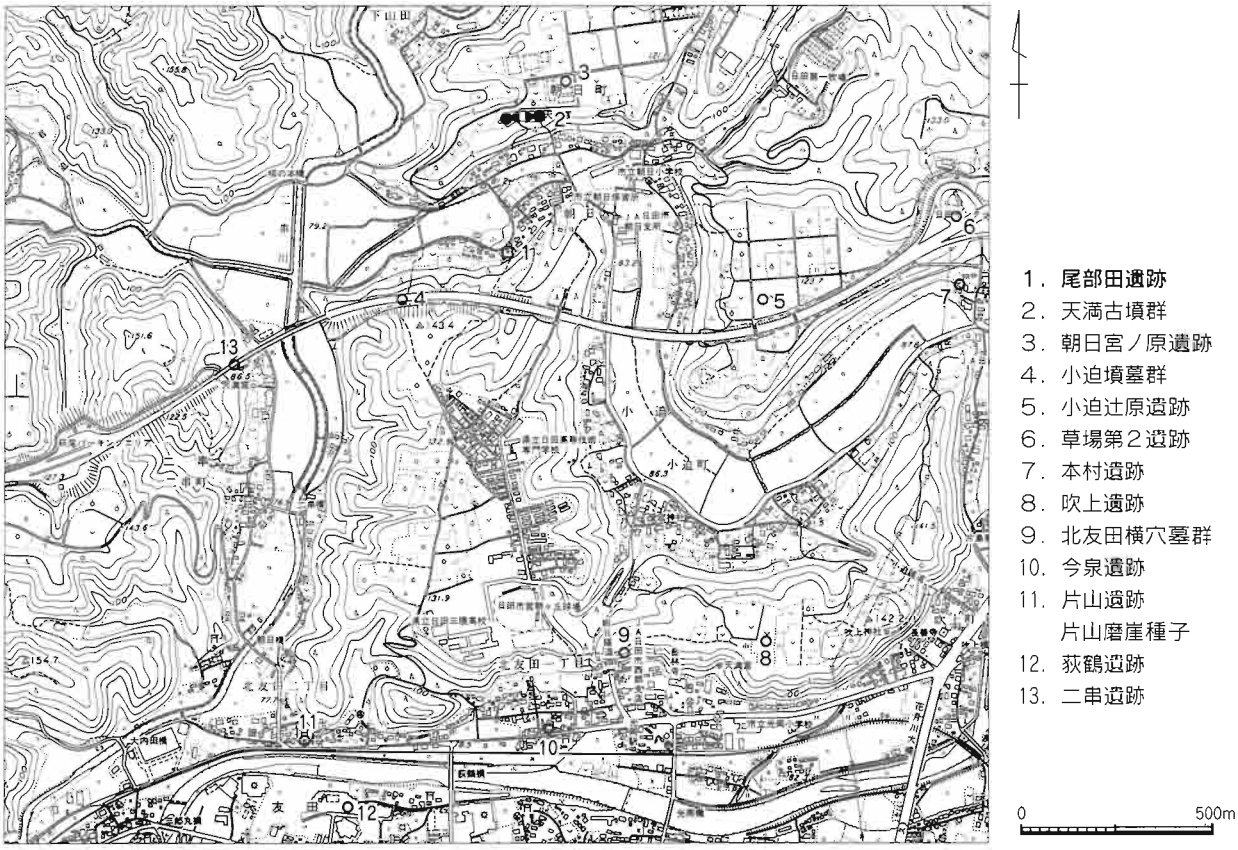
参考文献

田中祐介編『小迫辻原遺跡Ⅰ』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書10　大分県教育委員会 1999

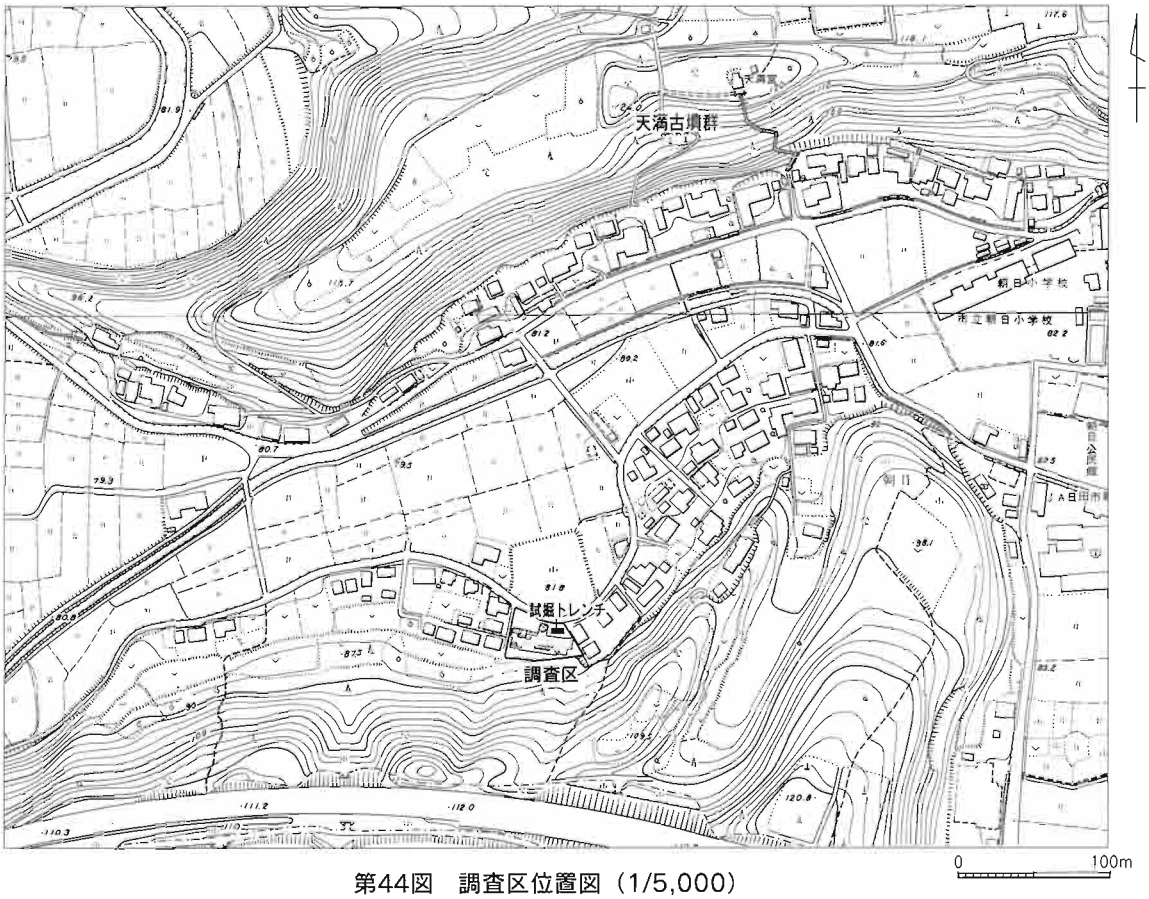
土居和幸編『小迫辻原遺跡』日田市 1994

友岡信彦・土居和幸「日田市朝日宮ノ原遺跡の中世墓」『おおいた考古創刊号』1989

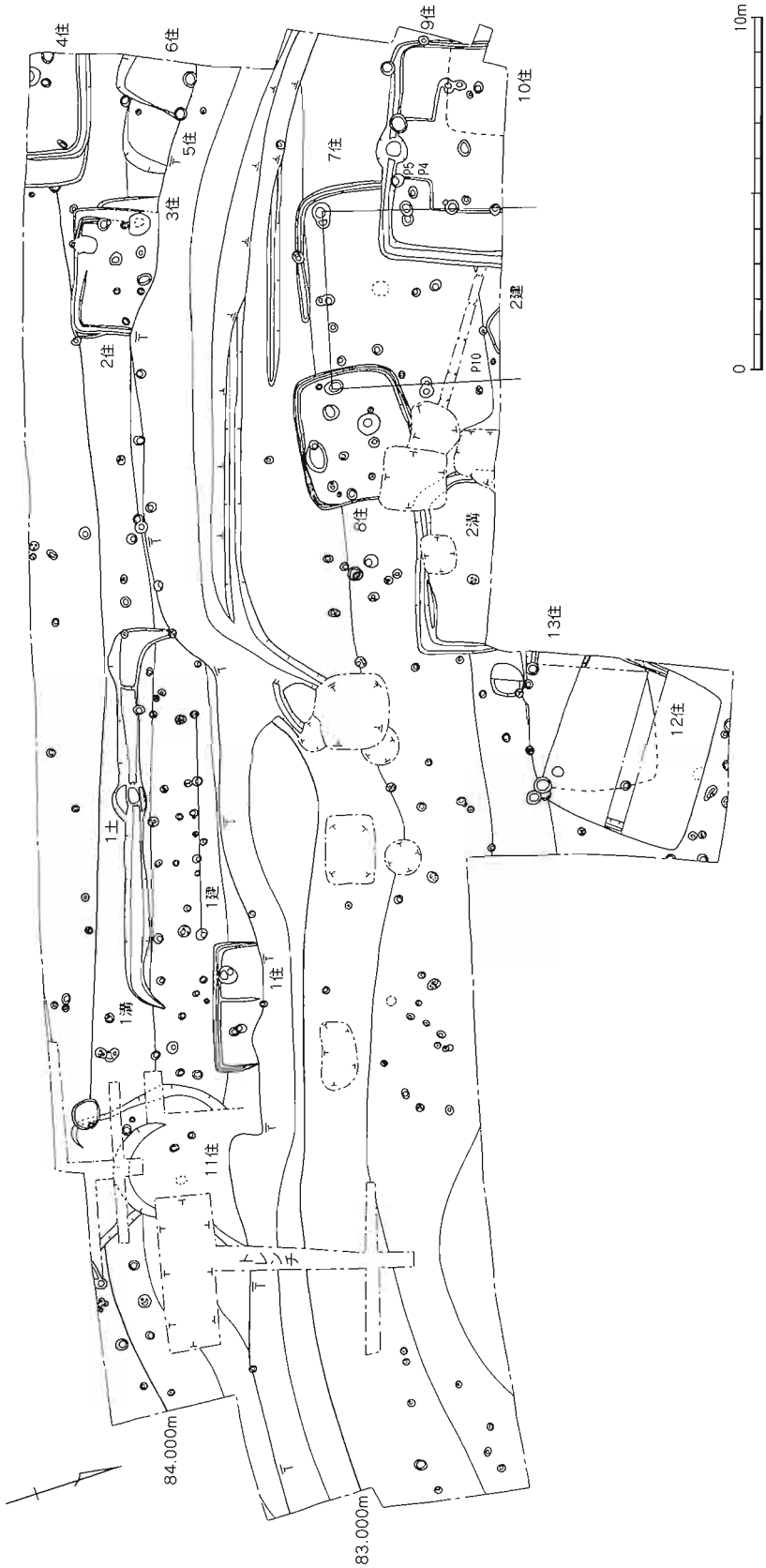
「平成9～11年度日田市埋蔵文化財年報」日田市教育委員会 1999～2001



第43図　調査区周辺の遺跡位置図（1/20,000）



第44図　調査区位置図（1/5,000）



第45図　尾部田遺跡遺構配置図（1/200）

II　調査の内容

1．調査の概要

調査区内は、もともと宅地のあったところで、すでに2段にわたって平坦に造成されており、調査前から１m以上の段差がみられた。表土除去した後に明らかとなった旧地形は、北方向に向かって緩やかに傾斜しており、段差のあるすでに掘削を受けた部分以外は、比較的遺構はよく残っていた。遺構検出面(地山)は、黄褐色を呈する粘質土で、この地域特有の緻密で粘りのあるしまった土である。遺構検出面までの深さは、上段で約10cmと浅く、下段は下にいくほど深くなっていた。調査区は道路部分を除き、切土となる現地表より約50cmほどの深さの場所でとどめている。

調査区内では、最終的に竪穴住居跡13軒、掘立柱建物跡1棟、土坑1基、溝状遺構2条の存在が認められたが、それ以外に建物として扱うことができなかった多数の柱穴や縄文時代の包含層が検出された。これらの遺構は、切土となるため完掘し、道路部分の北側にかかるものについては、遺構検出面が深いため、工事によっても保存が可能なことから、一部トレンチを入れ、遺構の時期や内容が把握できる範囲内での確認調査を実施するにとどめている。

2．遺構と遺物

1）竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（第45・46・47図）

調査区南東側で検出され、北半分はすでに削平されていた。住居跡の規模は、東西約3.65m、南北1.3m＋αを測る。東側半分は一段高くなっており、ベッド状遺構と考えられる。西側中央壁面沿いには、住居付設土坑が存在しており、ここが、住居の中央とすれば、西側にも本来ベッド状遺構が備わっていたと推測される。この土坑の中からは、完形の甕型土器が割れた状態で主土した。また、住居跡の壁面沿いには、浅い周溝が巡っていた。この他、住居跡の主柱穴については、削平を受けた住居跡の北側より、やや主軸とはずれるものの2つの深い柱穴が検出されており、住居の方向や他にこの周囲からは柱穴が見当たらないことからみても、これが主柱穴となる可能性は高いと考えられる。

1号竪穴住居跡出土遺物（第48図）

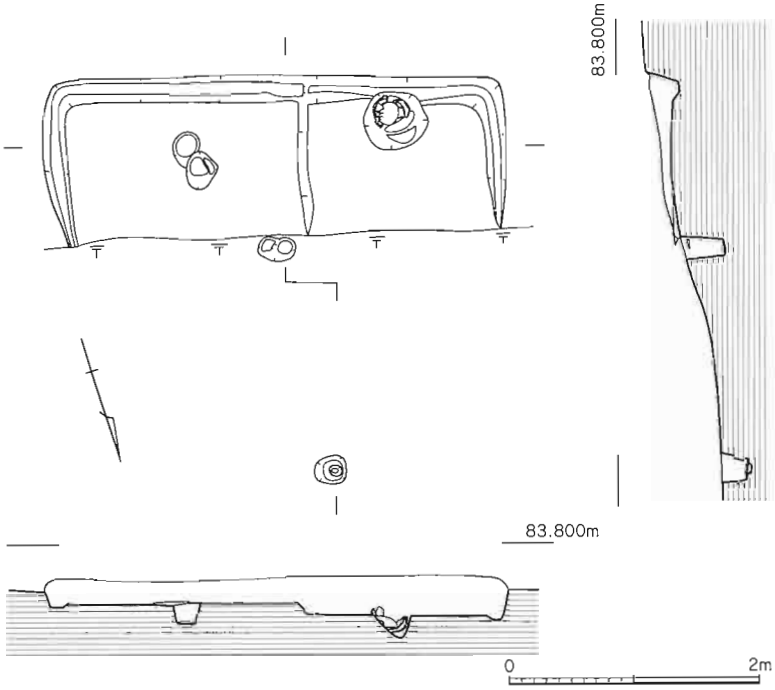
１～３は甕である。１は住居跡付設土坑から出土した外来系の土器である。ほぼ完形で、胴部はやや球形に膨らみ、口縁部は頸部から「く」の字に外反し、口縁端部はわずかに内側に屈曲する。底部はわずかにレンズ底を残す。外面は、口縁部から胴部上位にかけて横ハケ、胴部中位から下部は縦ハケ。内面は、口縁部付近は横ハケ、頸部下から胴部中位にかけてはヘラ削り、下部は縦ハケによる調整が施される。２は短い口縁を呈し、胴部はあまり膨らまない。外面タタキ、内面頸部下ヘラ削りが施される。３はやや胴部が膨らむタイプで、口縁部は「く」の字に外反する。２・３は在地系長胴甕とみられる。４は長頸壷の口縁部である。端部は1と同様内側にわずかに屈曲する。

2号竪穴住居跡（第45・49図）

調査区南西部で検出され、北半分はすでに削平されていた。３号竪穴住居跡とほぼ重なりあっており、住居の造り直しが行われたものと考えられる。住居跡の規模は、東西約3.35m、南北約2.3m＋αを測る。住居跡南側壁面の中央より西側にはカマドが付設され、煙道部もわずかながら

出された。カマド東側壁面沿いには周溝が巡っていた。主柱穴は、それと見られる柱穴として２個が主軸に沿って検出されたが、やや西側壁面によりすぎており、もともと存在しなかった可能性の方が高いと推測される。

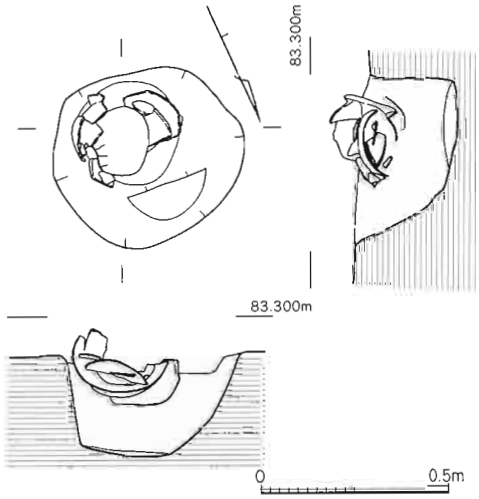
カマドは主軸長約60㎝、幅約50㎝を測る。カマドの両袖部分は残っておらず、また袖石抜取痕などもないことから、粘土構築であったことが伺え、またこれは住居跡廃棄時に壊されたものと推測される。カマド焼成面は、床面よりわずかに窪ませ、赤く変色していたが、硬化するまでには至っていなかった。



第46図　１号竪穴住居跡実測図（1/60）

２号竪穴住居跡出土遺物（第51図）

１～４はいずれも須恵器である。１は坏蓋で口縁端部は鳥嘴状を呈する。２は住居跡中央付近より出土した高台付坏身で、底部はほぼ平坦で、底端部から口縁部にかけてはほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部はやや外反する。３は皿である。底部はヘラ切りでほぼ平坦となり、底端部から口縁部にかけてはやや外反しながら開く。４は住居跡西側より出土した横瓶の胴部である。外面には轆轤回転時の調整痕が残る。

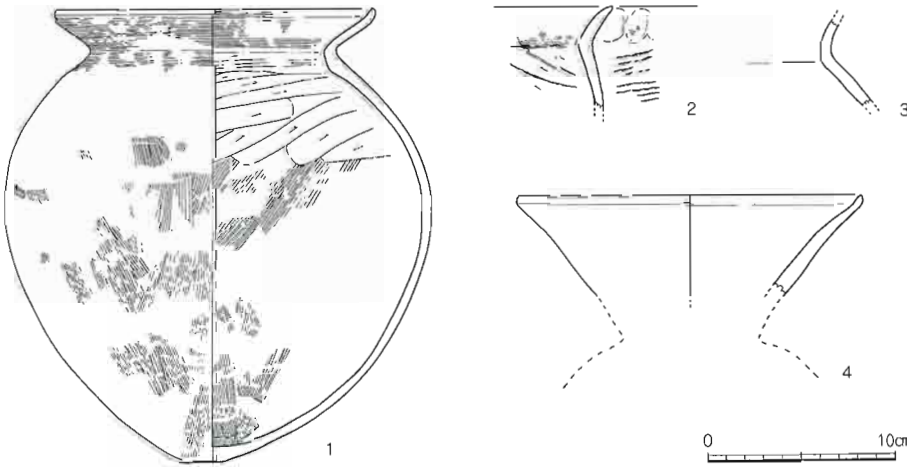


第47図　1号住居跡内付設土坑実測図（1/20）

３号竪穴住居跡

（第45・50図）

２号竪穴住居跡に大部分を切られていたが、東西の壁面沿いの部分だけが残っていた。住居跡の規模は東西で約3.7mを測る。西側壁面沿いには、３



第48図　１号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/4）

号同様床面より深く掘り込んだために検出することができたカマドが付設されていた。また、住居跡の状況から主柱穴は存在しなかったと推測される。

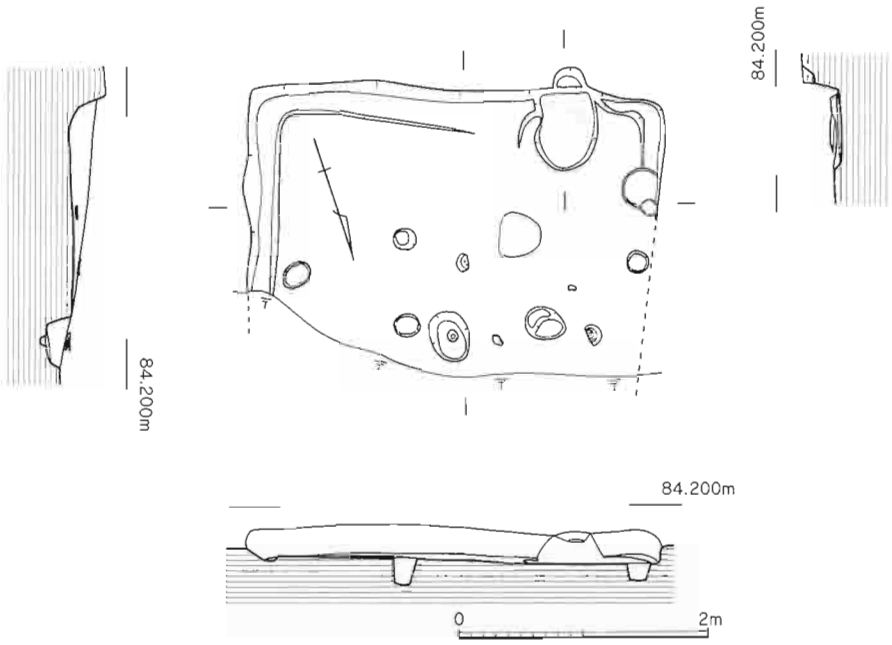
３号竪穴住居跡出土遺物（第51図）

５はカマド内から出土した土師器甕口縁部である。胴部から口縁部にかけて「く」の字に外反する。

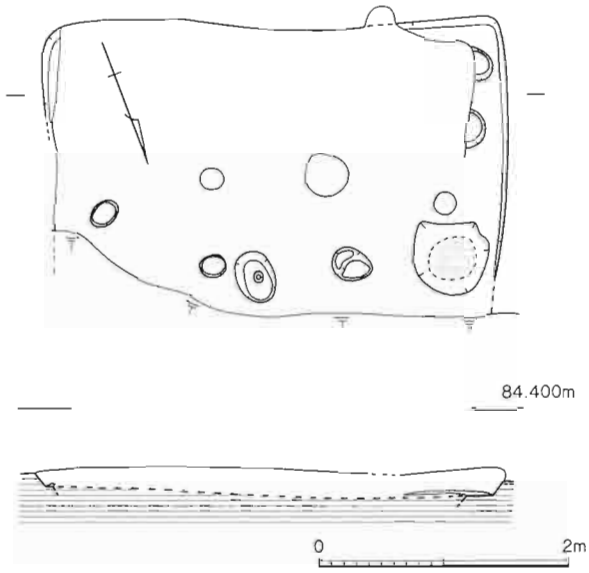
内面ヘラ削りを施す。

４号竪穴住居跡（第45・52図）

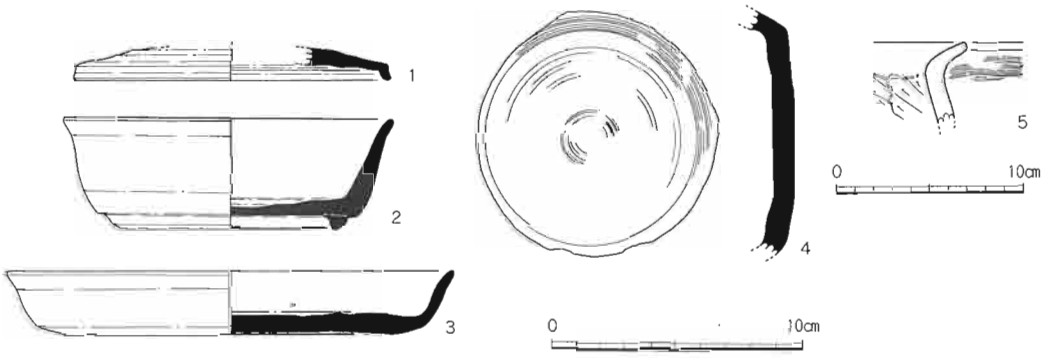
調査区南西端コーナー付近で検出された。全体は遺構全体は調査区外へ展開する。検出面での規模は、東西約3.8m＋α、南北約1.8m＋αを測る。住居跡東側はベッド状遺構が付設され、その内側壁面沿いには周溝が巡る。炉跡や主柱穴は、住居跡内からは確認することができず、調査区外に存在したと考えられる。



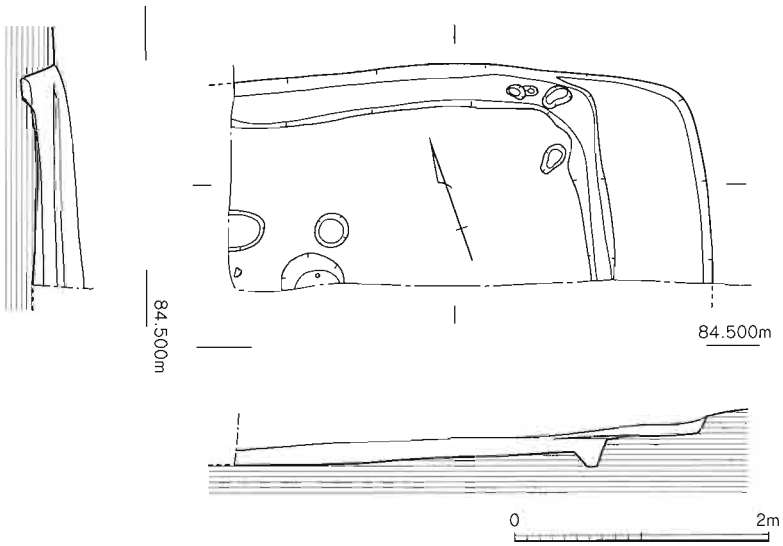
第49図　２号竪穴住居跡実測図（1/60）



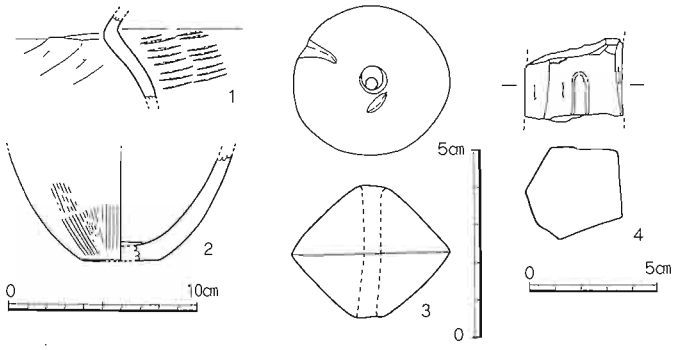
第50図　３号竪穴住居跡実測図（1/60）



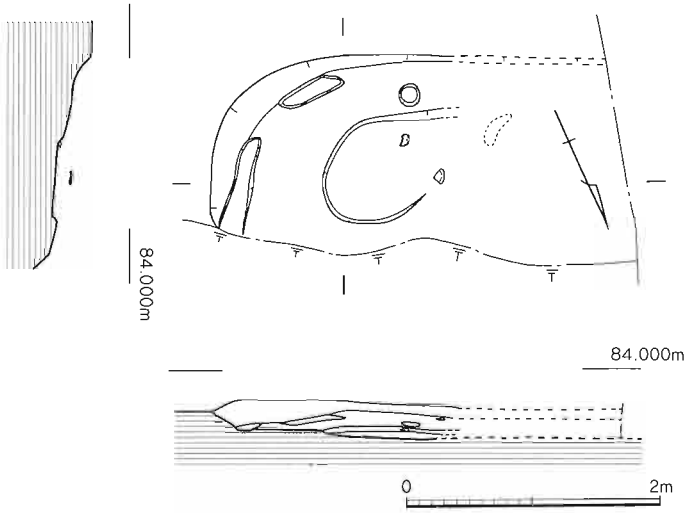
第51図　２・３号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/4）



第52図　４号竪穴住居跡実測図（1/60）



第53図　４号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）



第54図　５号竪穴住居跡実測図（1/60）

４号竪穴住居跡出土遺物（第53図）

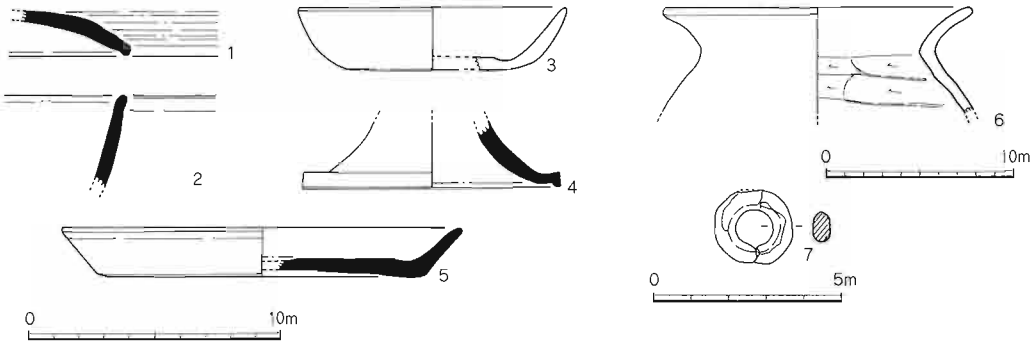
１は甕口縁部片で、球形に膨らむ胴部を持つ。外面タタキ、内面ヘラ削りが施される。２は甕底部片で、レンズ底を呈する。外面ハケ、内面ナデ調整。３は土製紡錘車で算盤玉の形状を呈する。直径約４㎝、高さ約3.5㎝を測る。中央には心棒を通す穴が穿たれ、両面穿孔である。４は砂岩製の砥石で、５面とも使用している。残存長約3.1㎝を測る。

５号竪穴住居跡（第45・54図）

調査区南西端で検出され、西側調査区外へ展開し、北側はすでに削平を受けている。担当者の不手際で住居跡の西側半分は６号住居跡床面まで掘りすぎてしまったため、壁の断面で復元した。住居跡の規模は、東西約3.35m＋α、南北約1.7m＋αを測る。住居跡東側コーナー付近はわずかに周溝の痕跡が検出され、また南側壁面中央よりやや北側で赤褐色の焼成面が確認されており、この位置にカマドが存在していたと推測される。また、住居跡の中央付近は不定形の浅い掘り込みが確認された。

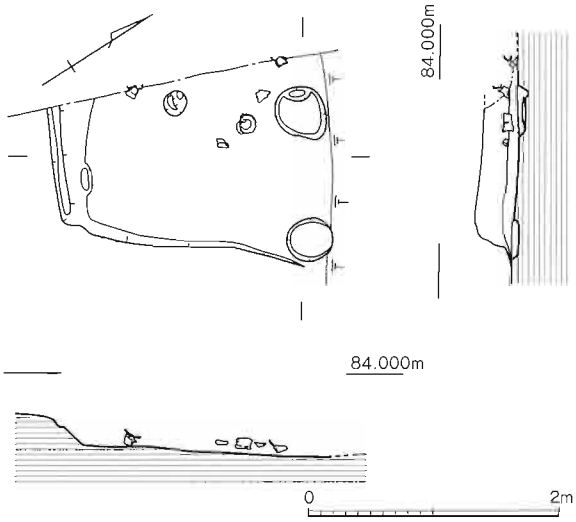
５号竪穴住居跡出土遺物（第55図）

１～３・５は須恵器である。１は坏蓋で、わずかに鳥嘴状の口縁を呈する。外面轆轤回転時の横ナデが顕著に残る。２は坏身で、やや内湾気味に延び、口縁端部付近はわずかに外に屈曲する。３は土師器坏身で平坦な底部を呈し、底端部から口縁部にかけては直線的に延びる。端部をやや尖らせている。４は高坏底部片である。底端部は鳥嘴状を呈す。５は皿である。底部はやや上底で、底



第55図　５号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）

端部から底端部から口縁部にかけてはわずかに外反気味に開く。６は土師器甕である。胴部から口縁部にかけて「く」の字に大きく外反する。外面ナデ、内面ヘラ削りを施す。７は耳環である。銀箔がよく残っている。長さ約2.0cm、厚さ0.5cm、重量6.1ｇを測る。



第56図　６号竪穴住居跡実測図（1/60）

６号竪穴住居跡（第45・56図）

調査区南西端で検出され、住居跡北側はすでに削平され、西側は調査区外へ展開する。住居跡の規模は東西約1.7m＋α、南北約2.2m＋αを測る。住居跡の上部は5号住居跡に大部分が切られていた。主柱穴や炉跡は検出されなかったことから、調査区外に存在すると推測される。この住居跡の中からは多数の遺物が出土した。

６号竪穴住居跡出土遺物（第57図）

１～７は甕である。１は長胴甕で、胴部から口縁部にかけては「く」の字に大きく外反する。胴部は砲弾状を呈する。外面タタキ、内面ハケによる調整を施す。２は球形の胴部を持ち、口縁部は直線的に延びる。外面は口縁部までタタキが行われ、胴部はその後ハケで調整を施す。内面は粘土紐の痕跡を顕著に残し、一部ハケによる調整を施す。３は胴部から口縁部にかけて「く」の字に大きく開く。外面はタタキ後、横方向のハケによる調整が施され、内面は、頚部下ヘラ削りが施される。４は下膨れの形態で、底部は若干平坦面をもつ。外面タタキ、内面ハケによる調整が施される。５～７は五様式甕底部である。５の底部はほぼ平坦で、外面タタキ、内面指頭圧痕が残る。６はややレンズ状の底部を呈する。７は外面タタキ、内面ナデ調整が施される。８～10は壷である。８は広口壷で、胴部から口縁部にかけてはほぼ垂直に立ち上がり、端部付近で外反する。内外面ハケ調整。９も広口壷で胴部から口縁部にかけてやや斜め方向に立ち上がる。内外面ハケ調整。10は複合口縁壷胴部片である。粘土紐の飾りは剥離している。外面わずかにハケが残り、内面は斜め方向のヘラ削りが施される。11・12は小型の鉢である。11は胴部から口縁部にかけて明確な稜をもつ。口縁端部を欠損する。12は胴部からほぼ直線的に口縁部に至る。底部は失われているが、胴

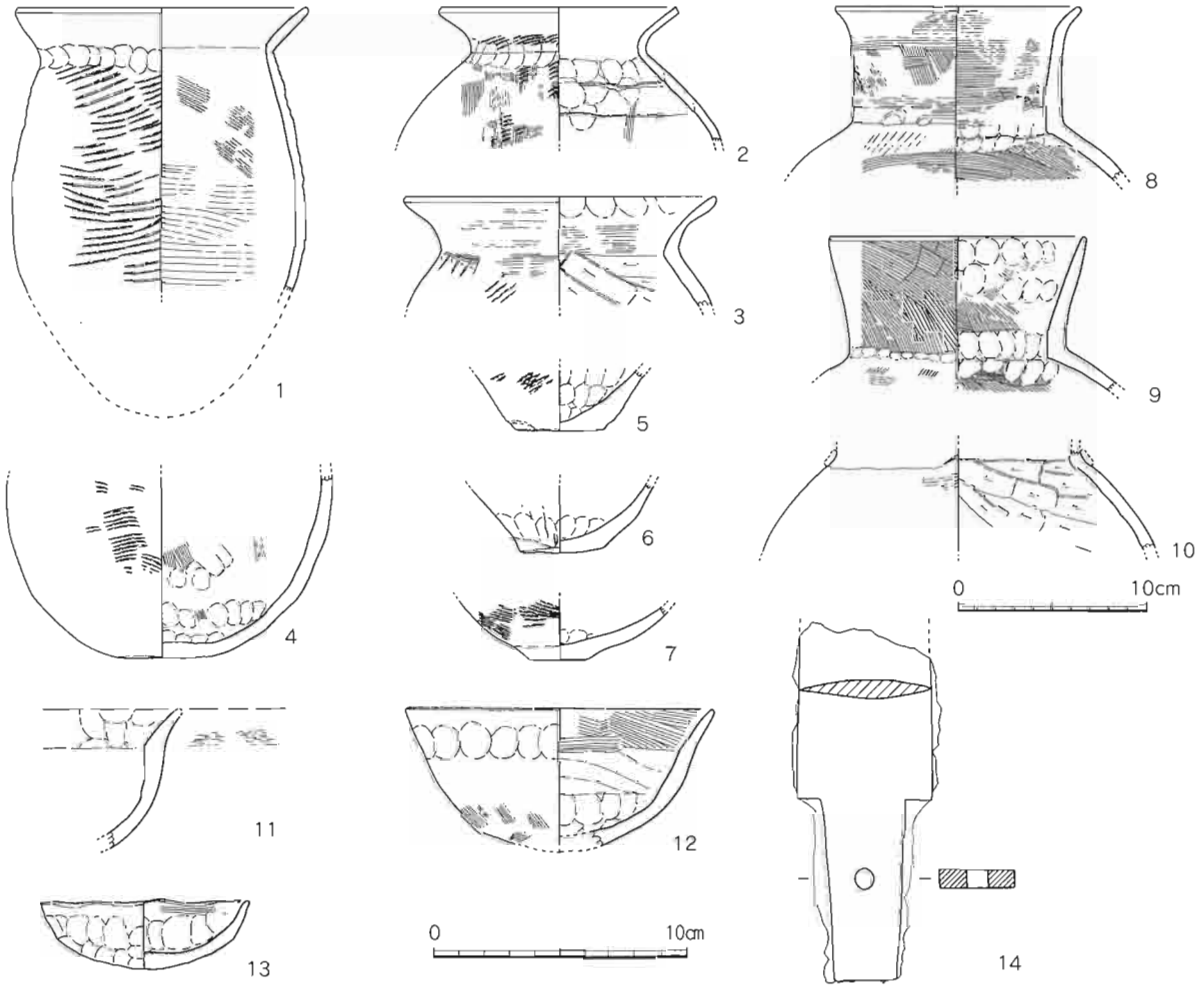
部からやや張り出す形で延びているので、わずかにレンズ底が残っていたと推測される。13は手捏土器埦である。内外面指頭圧痕が顕著で、内面口縁付近はハケによる調整が施される。14は鉄剣柄部である。剣先は欠損しているが、柄部は完全な形で残っている。残存長約9.5cm、柄部長約4.8cm、柄部の最大幅2.2cm、刃部最大幅約3.5cm、最大厚約0.5cmを測る。柄部中央には1箇所目釘穴が穿たれている。

7号竪穴住居跡（第45・58図）

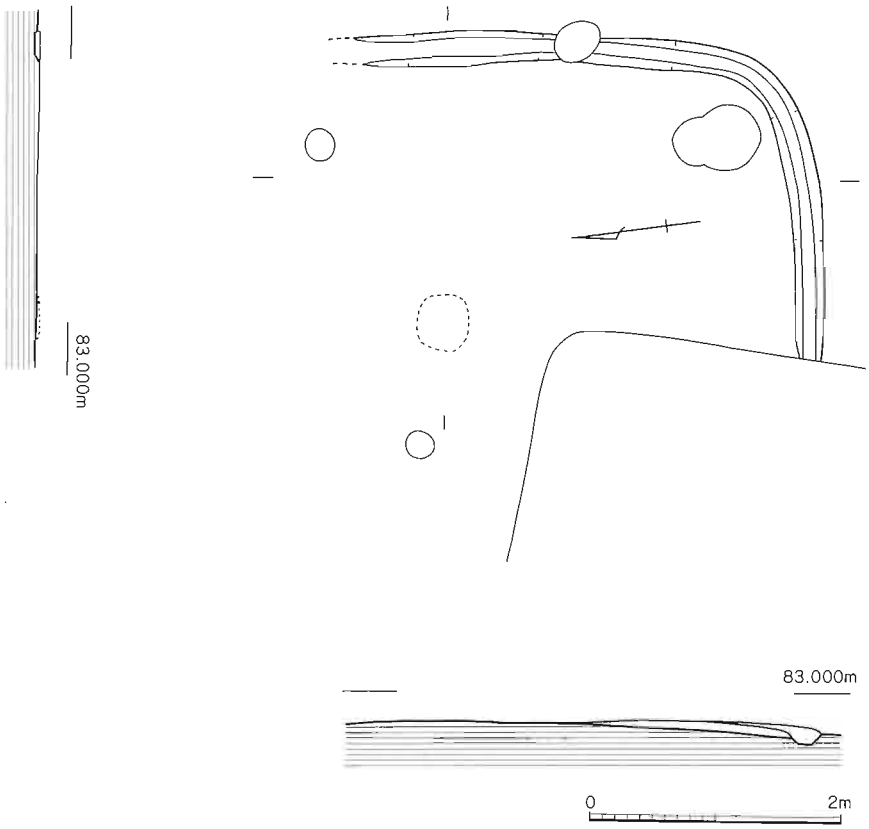
調査区西側で検出された。大部分はすでに削平を受け、住居跡西側の周溝と炉跡のみ検出された。また、周溝北側は9号住居跡に切られていた。住居跡の中からは柱穴はほとんど検出されなかったため、主柱穴は存在しなかったと推測される。この住居跡の周溝の中からの遺物の出土はなかった。

8号竪穴住居跡（第45・59図）

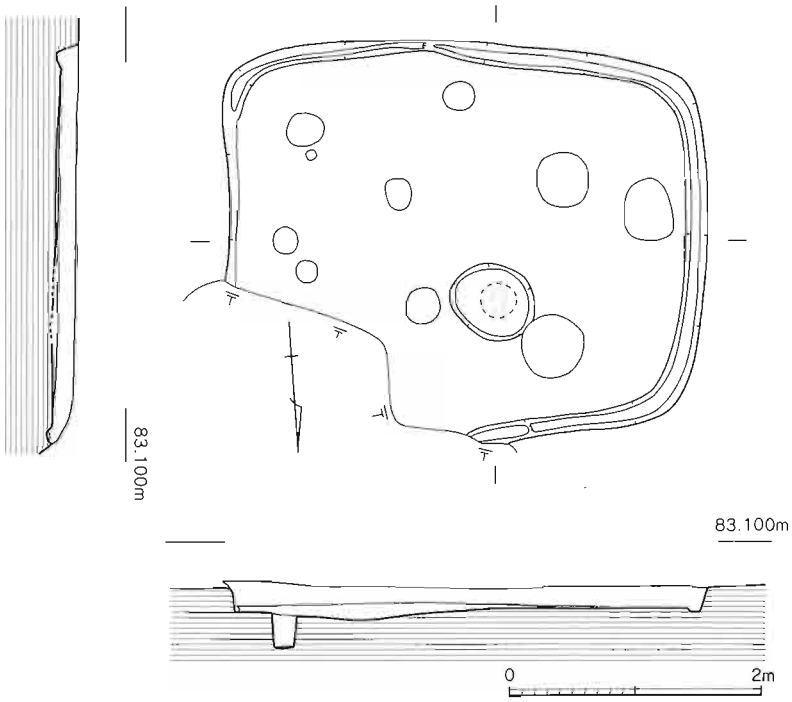
調査区北側中央で検出され、住居跡北東側はすでに削平を受けていた。住居跡の規模は、東西約3.8m、南北約3.2mを測る。住居跡東側を除く壁面沿いには周溝が巡り、中央よりやや北側によって炉跡が検出された。また、付設土坑や主柱穴は確認されなかった。



第57図　6号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）



第58図　７号竪穴住居跡実測図（1/60）



第59図　８号竪穴住居跡実測図（1/60）

８号竪穴住居跡出土遺物（第60図）

１は小型の鉢である。胴部は球形で、頸部から口縁部にかけて直線的に延びる。２は脚付鉢の脚部である。脚は短く低い。３・４は手捏土器椀である。５は？である。内外面ナデで、内面わずかにハケによる調整痕が残る。６・７は磨製石斧である。６は刃部を欠損する。残存長約16.5cm、最大幅5.6cmを測る。７は長さ約12.6cm、最大幅約4.8cmを測る。

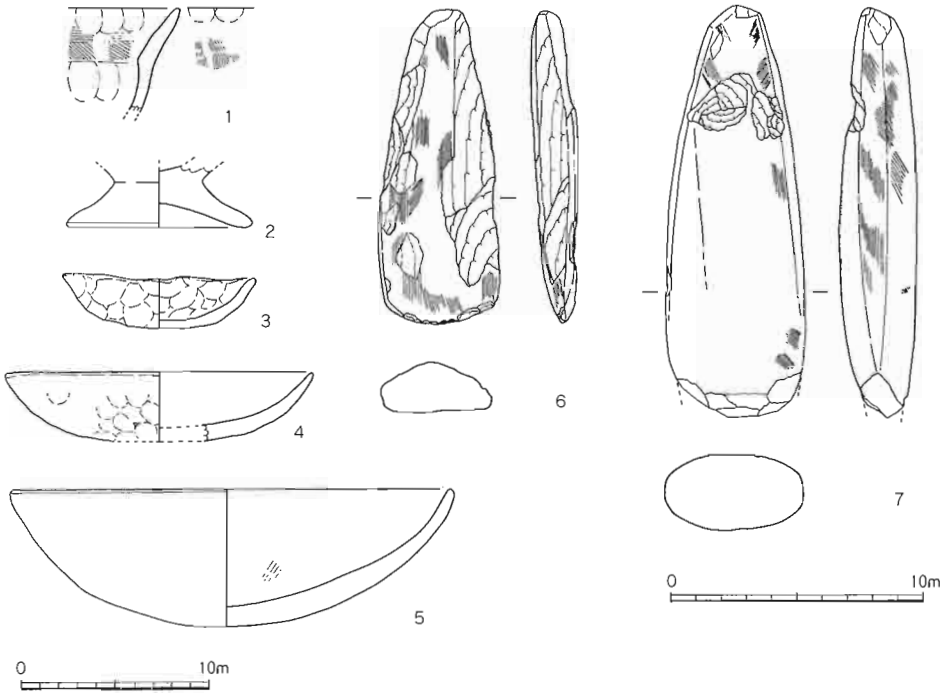
９号・10号竪穴住居跡（第45･61図）

調査区北西側コーナー付近で検出され、北半分は調査区外へ展開する。住居跡の規模は、東西約6.3m、南北約3.4m＋αを測る。住居跡のほぼ中央には炉跡があり、その炉を挟んで東西方向には炉の中心より約1.4m離れた位置にそれぞれ主柱穴が掘り込まれていた。主柱穴の深さは約50cmを測る。また、炉の南側壁面中央には付設土坑が存在し、壁面沿いには周溝が巡る。さらにその内側には鍵状を呈したベッド状遺構が取り付いている。このベッド状遺構の西側は途中で段差が消えているが、これは本来この位置に10号竪穴住居跡が存在し（破線部分）、それにより削平を受けてしまったためである。

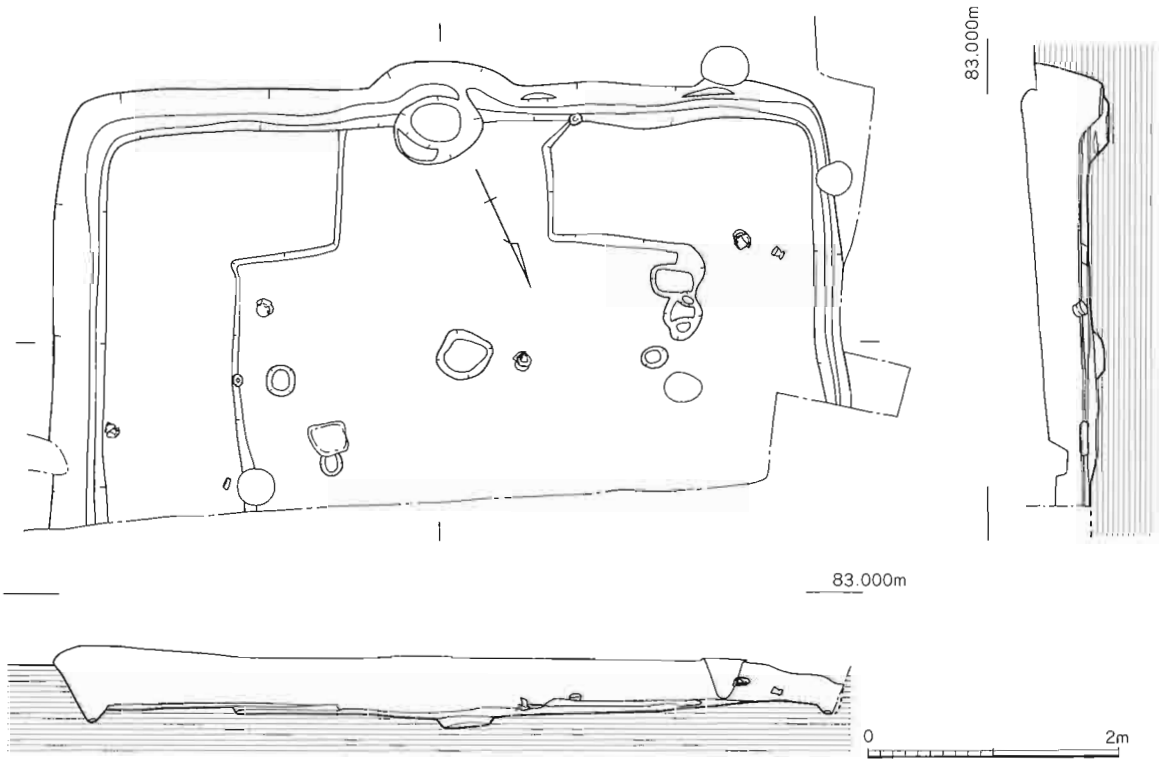
９号竪穴住居跡出土遺物（第62･63図）

１～16は甕である。１は球形の胴部を呈し、口縁部は「く」の字に外反する。外面ハケ、内面頸部付近指頭圧痕。２も球形の胴部を呈し、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。

３・４は口縁部片である。５は布留式系の甕である。口縁部は内湾気味に立ち上がる。６も器壁が薄く外来系と考えられる。口縁端部はやや摘み上げの形状を残す。胴部は球形を呈するとおもわれる。摩滅が著しく器面調整は不明である。７・８は口縁部片である。いずれも「く」の字に外反し、頸部直下よりヘラ削りが施される。９は五様式系甕で、外面タタキ、内面ナデ調整。10は長胴甕で、外面タタキ、内面頸部直下よりヘラ削りが施される。11は五様式系の甕とおもわれる。外面頸部付近は横ハケ、胴部はタタキ、内面はハケがわずかにみられる。粘土紐の繋ぎ目が顕著に残る。12はやや球形の胴部を呈する。外面ハケ、内面上部はハケ、下部はヘラ削りが施される。13は長胴甕で、底部は丸

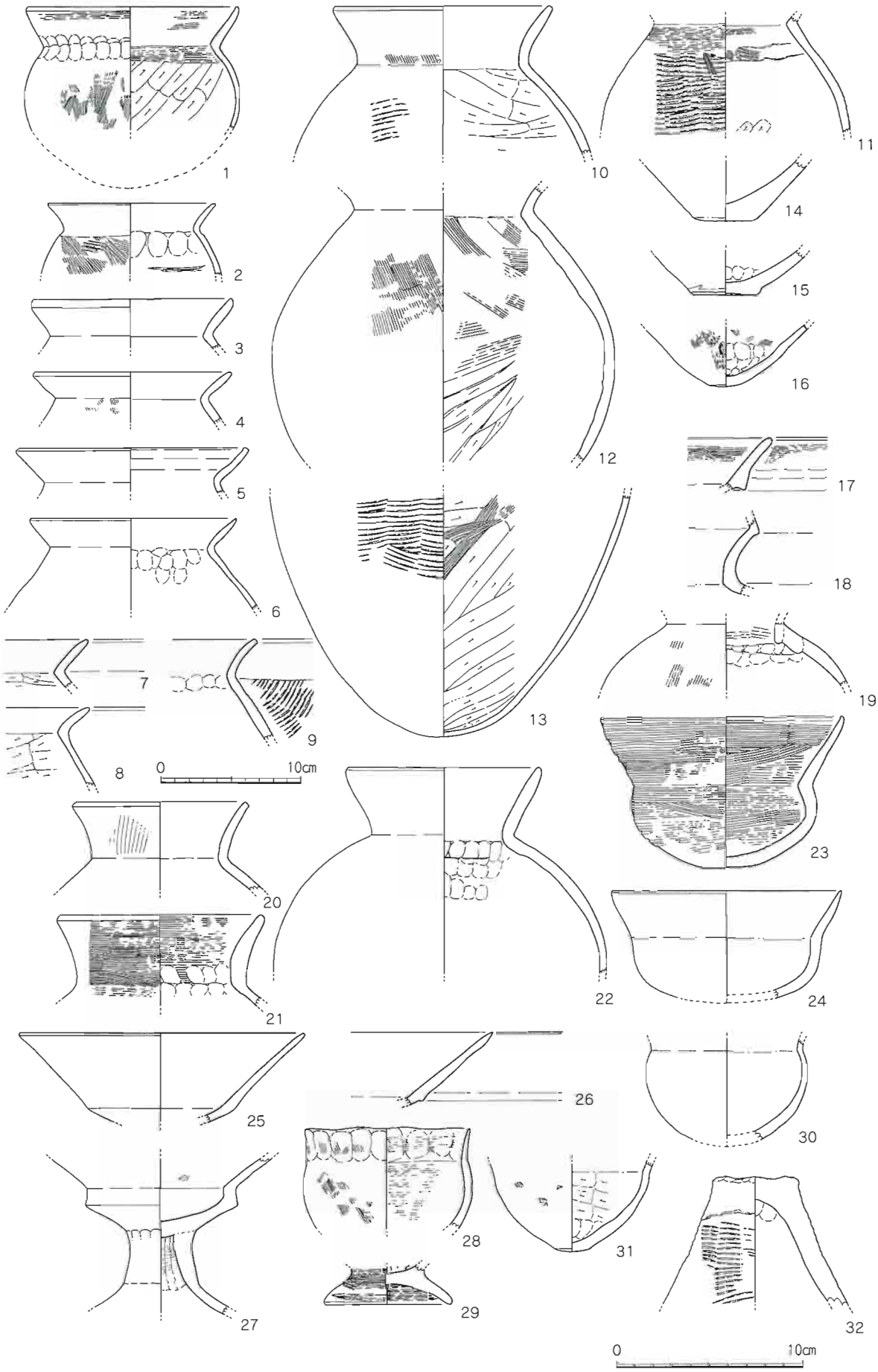


第60図　８号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）

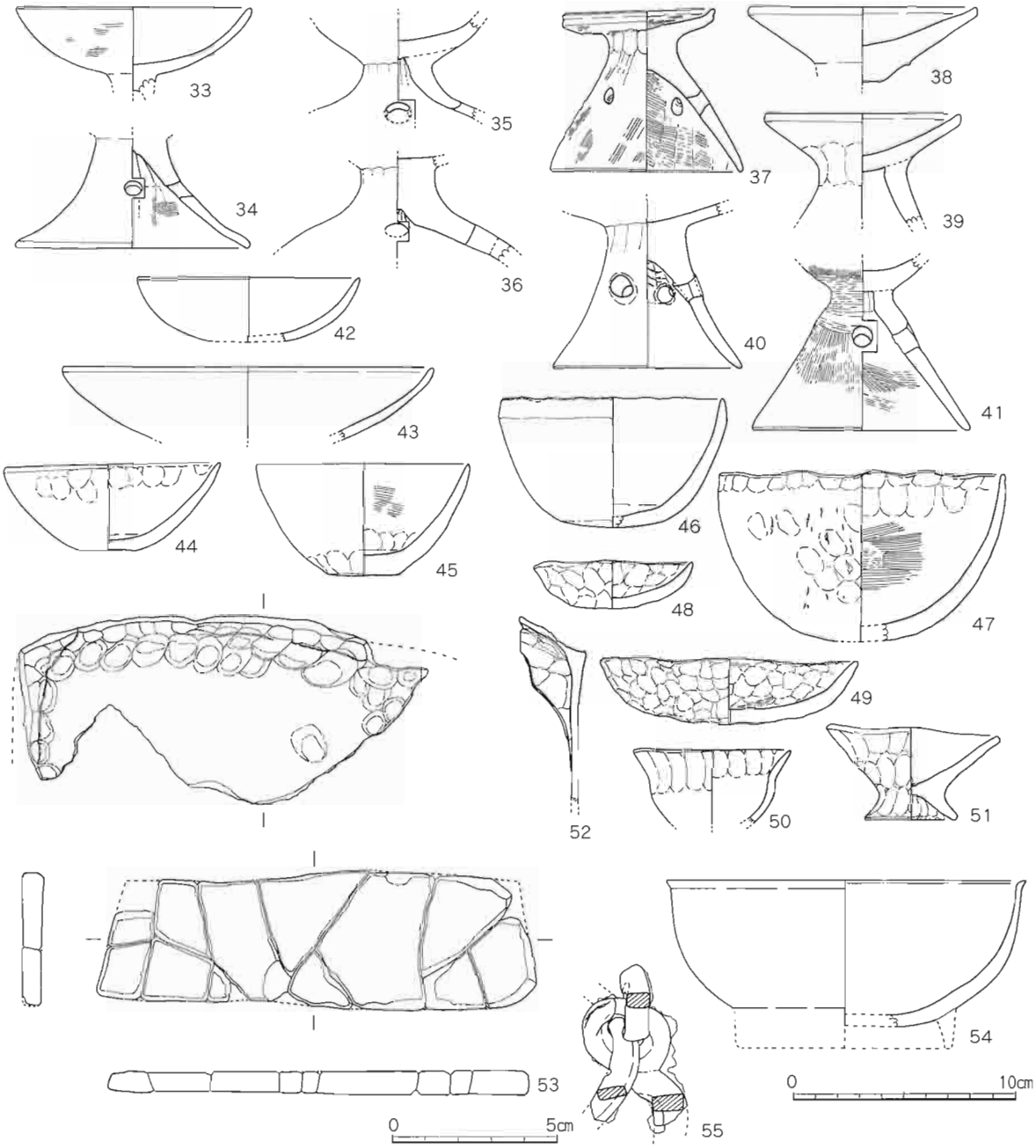


第61図　９・10号竪穴住居跡実測図（1/60）

底化している。胴部は大きく膨らみ、外面はタタキ、内面は内底面よりハケの後、ヘラ削りが施される。14は在地系長胴甕の底部でレンズ状を呈する。15・16は五様式系の底部で、15はやや上底状を呈し、しっかりしている。16はほとんど丸底化しているが、わずかにレンズ底が残っている。15・16の内底面は指頭圧痕が顕著に残る。17～21は壷である。17は二重口縁壷の口縁部片である。18は複合口縁壷の頸部片である。19は長頸壷で胴部は球形を呈する。内面粘土紐の繋ぎ目が顕著に残る。20は広口壷で、口縁部が長く発達し、胴部は大きく膨らむタイプであろう。口縁部外面ハケ調整。21は広口壷の口縁部片である。内外面とも横ハケがみられる。22も広口壷で、胴部は球形を呈し、口縁部はやや斜め方向に立ち上がる。内面頸部付近は粘土紐の繋ぎ目が残り、指頭圧痕が顕著に残る。23は小型丸底壷である。底部はまだわずかに平底が残り、頸部から口縁端部にかけては大きく開き、直線的に延びる。24も小型丸底壷で、口縁部はやや内湾気味に短く伸びる。25は庄内系の高坏で、口縁部はラッパ状に大きく開く。26も同様である。坏部の稜が明確に見られる。27も庄内系の高坏であるが、坏部は直線的に延びる口縁部から一端屈曲し、坏底部にかけて内湾するタイプである。柱状部はやや開き気味に延び、脚部は柱状部から一端屈曲し、裾広がりとなる。28は小型の鉢で底部を欠損する。球形の胴部を呈し、口縁部はほぼ直口気味に延びる。29は脚付鉢の底部である。底部は短いがしっかりしている。内外面ハケ調整がみられる。28と29は同一個体の可能性がある。30も小型の鉢で、底部はまだレンズ底が残る。内面ヘラ削りが施される。31は小型の鉢か甕である。底部は欠損しているが、プロポーションから見て丸底と推測される。32は支脚である。底部は裾広がりとなり、天井部はやや凹凸はあるものの概ね平坦である。外面細かいタタキが見られる。33～36は脚付埦である。33は脚部を欠損する。34も坏部を欠損する。脚裾部はやや内湾気味に広がる。穿孔は3箇所と推測される。35は坏上部と脚裾部を欠損する。脚部は裾広がりとなり、穿孔が見られる。36も35と同様である。37～41は小型特殊器台である。37は完形で台部はほぼ平坦で口縁端部は鳥嘴状となる。脚部は、内湾気味に裾部まで延びる。穿孔は4箇所見られる。内外面ハケによる調整がみられる。38は脚部を欠損する。台部口縁は斜め方向にほぼ直線的に延びる。39も同様脚部を欠損する。台部はやや深く、埦状を呈する。40は台部を欠損する。脚部は斜めにほぼ直線的に延び、穿孔は4箇所と推測される。41も台部を欠損する。脚部はあまり広がらず、裾部まで直線的に延びる。42～47は埦である。42はやや上底状の底部を呈し、口縁部にかけてはやや内湾気味に立ち上がる。口縁端部はやや尖り気味となる。43はレンズ状の底部を呈し、口縁部にかけては内湾気味に立ち上がる。口縁端部はやや尖り気味となる。44はレンズ状の底部を呈し、口縁部にかけてはやや内湾気味に立ち上がる。底部外面及び内底面は指頭圧痕が顕著に残り、内面ハケ調整が施される。45はややレンズ状の底部を呈し、口縁部にかけてはやや内湾気味に立ち上がる。口縁端部内外面及び胴部外面には指頭圧痕が顕著に残り、内面ハケ調整が施される。46は42～45に比較し浅いタイプである。47は幅広の口縁である。48～52は手捏土器である。48・49は？で内外面指頭圧痕が顕著に残る。50は鉢で口縁屈曲部付近は指頭圧痕が顕著に残る。51は高坏で短い脚部が付く。外面指頭圧痕が顕著。52は方形の皿のような形態を呈し、コーナーの一部が残っている。底部はやや上底状となり、器壁は薄く、内外面指頭圧痕が顕著。53は砥石である。全長19.5cm、幅6.3cm、厚さ1.2cmを測る。



第62図　９号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/4）



第63図　9・10号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）

10号竪穴住居跡（第45図）

この10号住居跡のプランについては担当者の不注意で、当初遺構検出時に確認できず、9号竪穴住居跡と同時に掘り下げてしまった。調査区コーナー付近の調査区の土層から推定される住居跡の規模は、東西約2.7m＋α、南北約1.5m＋αである。

10号竪穴住居跡出土遺物（第63図）

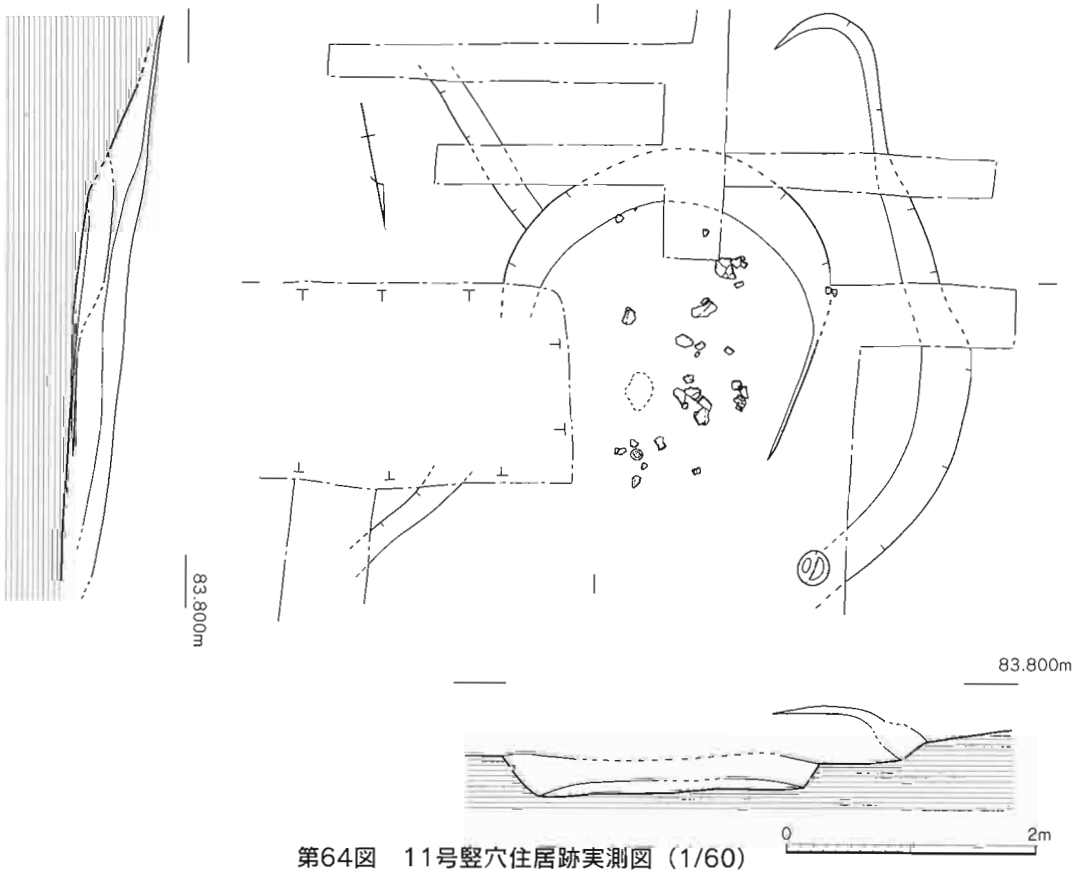
54は土師器椀である。9号住居跡の埋土中に含まれていた。55は同じく馬具の轡である。

11号竪穴住居跡（第45・64図）

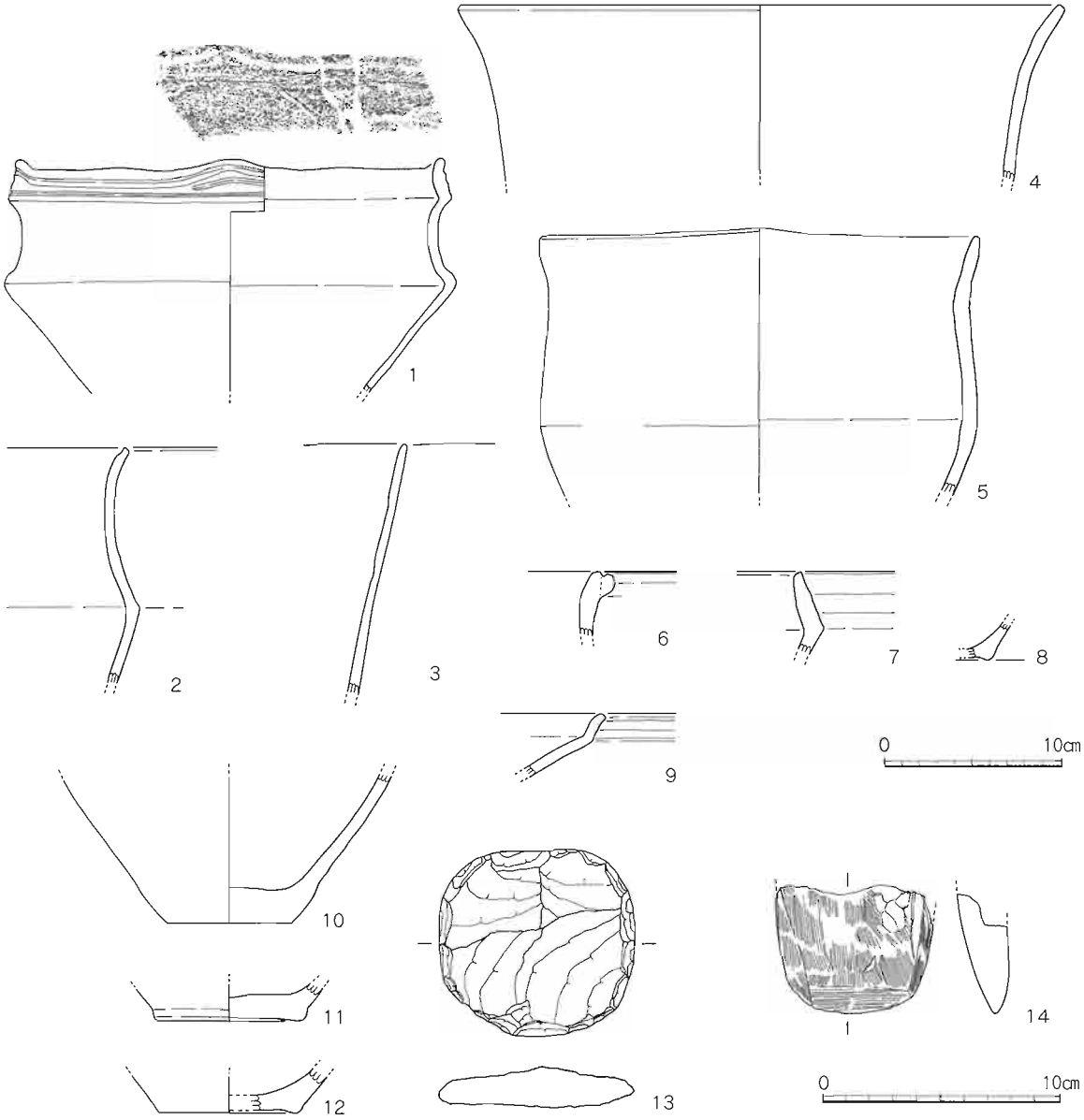
調査区東部で確認された。当初この住居跡の一帯では東西約3.5m程度の範囲内に縄文時代の遺物が出土していたことから、地形的に小さい谷部が形成されており、その場所に遺物が堆積しものと判断し、ベルトを残して掘り下げ作業を行っていった。しかし、約10～15cm進んだ深さの所で、包含層の床面が確認されるのと同時に新たに遺構のプランと考えられる掘り込み面を検出したため、さらにサブトレンチを入れて、そのプランや深さなどの状況の確認を進めることにした。その結果、東西約2.6mの楕円形プランを呈する竪穴住居跡の存在が明らかとなった。この竪穴住居跡の中からは多数の遺物が出土したほか、中央よりやや東側で炉跡と見られる焼成面も確認された。さらに住居跡の壁面は斜めに立ち上がり、床面はほぼ平坦であること、主柱穴と見られる穴は存在しないことも明らかとなった。

11号竪穴住居跡出土遺物（第65図）

１は鉢である。胴部は外に張り出し、明瞭な段をつけて頸部につながる。頸部は内湾しながら立ち上がり、僅かに外反して口縁部につながる。口縁部はやや内傾しながら立ち上がり、端部をやや外反させる。口縁部は波状隆起を有し、平坦面に平行する沈線を２本引いている。この平行沈線は、波頂部で上方の沈線の隆起に沿わせ、下方の沈線との間に上方に沿った短い沈線を充填させる。外面は摩滅が著しいため調整は不明である。内面は摩滅が著しいものの、ミガキではないかと思われる。２～５は深鉢である。２は胴部を外に張り出し、明瞭な段をつけて頸部につながり、頸部は緩やかに内湾する。口縁部は外反し、端部をやや平滑に仕上げる。内外面ともに摩滅が著しいため調整は不明である。４は口縁部を緩やかに外反させ、端部はやや平滑に仕上げる。内外面とも調整は不明である。５は深鉢である。胴部はやや張り出し、頸部は、緩やかに内湾し、口縁部はやや外反

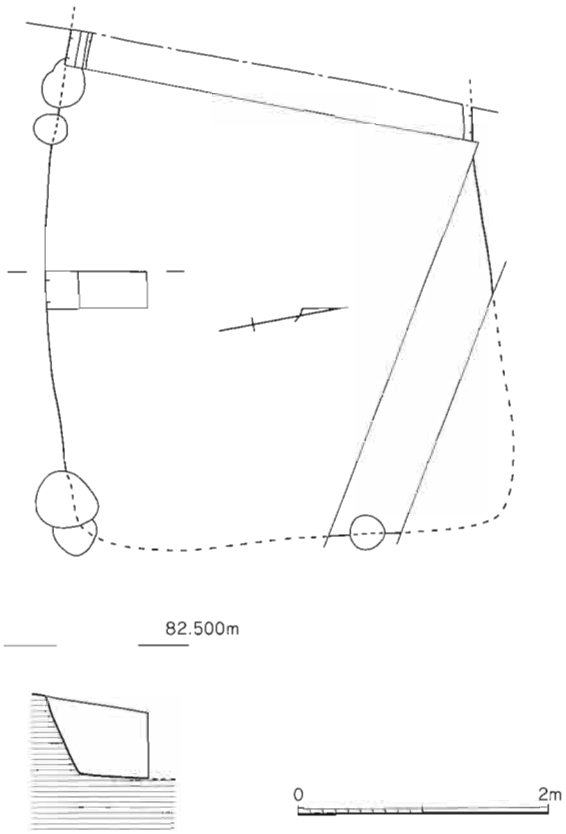


第64図　11号竪穴住居跡実測図（1/60）



第65図　11号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3・1/4）

口縁部は僅かに波状隆起を有する。調整は摩滅が著しいため内外面ともに不明である。６は鉢、もしくは浅鉢である。口縁部は緩やかに外反し、粘土貼り付けにより肥厚させ、端部に沈線を巡らせる。調整は内外ナデ。７は鉢か深鉢の口縁部で、口縁部を内傾させ、平坦面には３本の凹線が巡らされる。調整は内外ともにナデとみられる。８は浅鉢の底部とみられる。調整は内外面ともに不明。９は浅鉢である。口縁部は段をもって立ち上がり、端部をやや外反させる。口縁部平坦面には２本の凹線が巡らされる。調整は内外面ともにミガキと思われる。10～12は底部破片である。おそらく深鉢の底部と考えられる。10の底面はやや平滑に仕上げられ、胴部は緩やかに立ち上がる。調整は不明。11の底面はやや緩やかに上がり、底端部をやや外に張り出す。調整は不明。12底端部をやや下方に出し、底面が一段上がる。調整は不明。13は円盤状石器である。刃部全面に２次調整が巡る。最大径8.4cm、最大厚1.8cmを測る。石材は安山岩である。14は磨製石斧である。片刃の石斧で、最大長5.4cm＋α、最大幅6.7cm、最大厚２cmを測る。石材は蛇紋岩である。



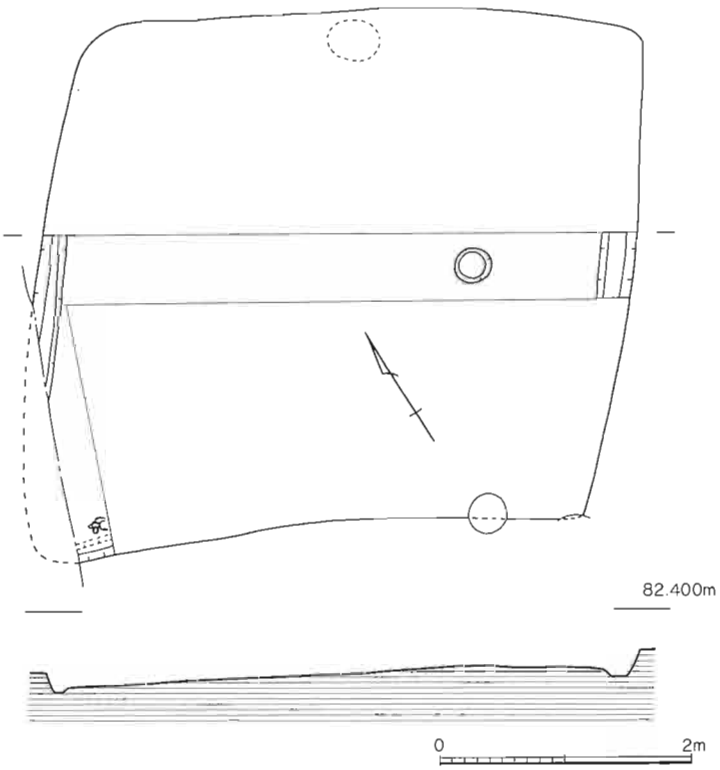
第66図　12号竪穴住居跡実測図（1/60）

12号竪穴住居跡（第45・66図）

調査区北部で確認された。13号住居跡に切られ、住居跡西側は調査区外へ展開する。この住居跡は道路下であるが、遺構は盛土として保存されるため、一部トレンチ調査にとどめている。住居跡のプランは、東西約4.2m＋α、南北約3.5mを測り、隅丸長方形プランとなろう。住居跡の深さは南壁中央付近で約60cmを測る。トレンチではこの南側壁面沿いに周溝の存在も確認された。

12号竪穴住居跡出土遺物（第68図）

1は外来系の甕で、球形の胴部を呈し、口縁部は「く」の字に外反する。外面頸部付近より上位は横ハケ、下位は不定方向のハケ、内面頸部直下よりヘラ削りが施される。2は在地系長胴甕の底部片であろう。底部はレンズ状を呈する。3は甑である。底部と胴部の境目に穿孔が見られる。4は磨製石斧先端部片である。残存長約4.8cm、幅約7.8cm、厚さ約0.75cmを測る。擦痕が顕著に見られる。



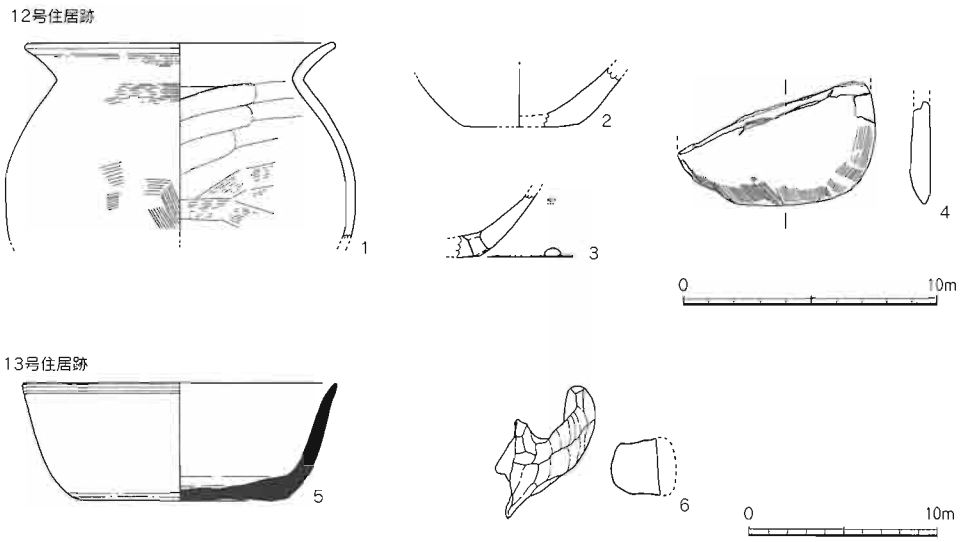
第67図　13号竪穴住居跡実測図（1/60）

13号竪穴住居跡（第67図）

12号住居跡と重なり合って検出され、12号住居跡を切る。北西コーナー付近は調査区外へと展開する。12号同様、遺構は保存されるので、中央に1箇所トレンチを設定し、確認調査をするにとどめている。住居跡のプランは、東西約4.7m、南北約4.2mを測り、隅丸長方形プランを呈する。住居跡の壁面沿いには周溝が確認され、トレンチ部分での深さは約20cmを測る。住居跡北側壁面近くからは焼土の広がりが確認され、カマドがこの位置に存在したと推測される。

13号竪穴住居跡出土遺物（第68図）

5は須恵器坏身である。底部はほぼ平坦で、底部から口縁部にかけてはやや内湾気味に立ち上がり、端部



付近はわずかに外反する。底面ヘラ切り。6は土師器甑の把手である。

第68図　12・13号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3.1/4）

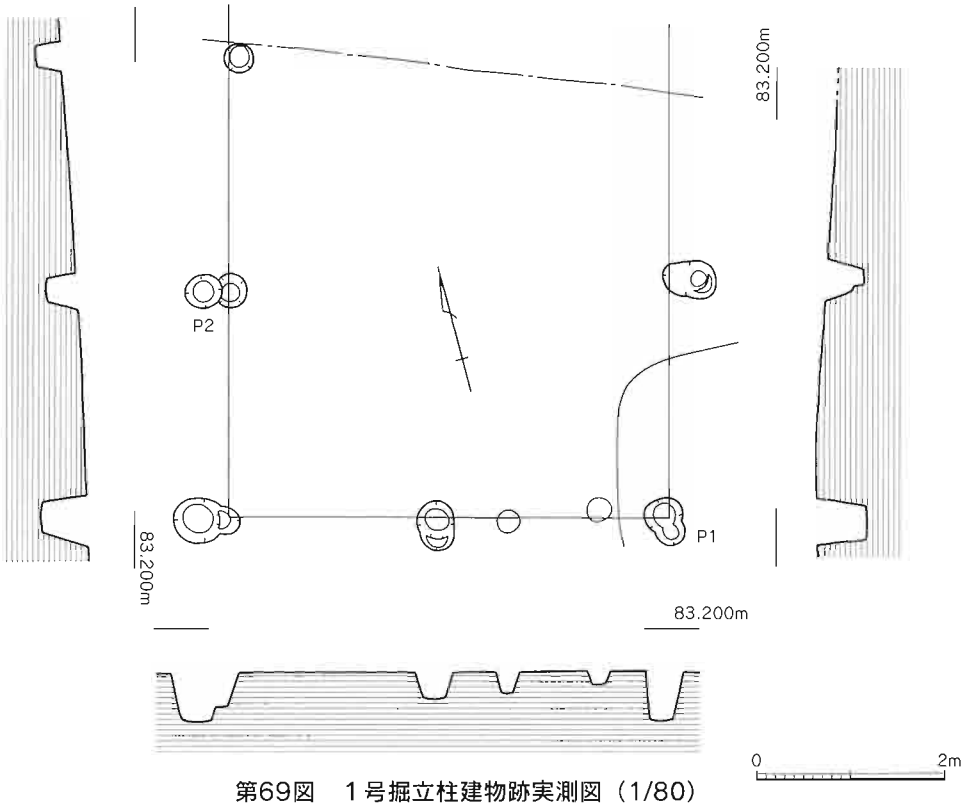
2）掘立柱建物跡・溝・土坑

1号掘立柱建物跡（第45・69図）

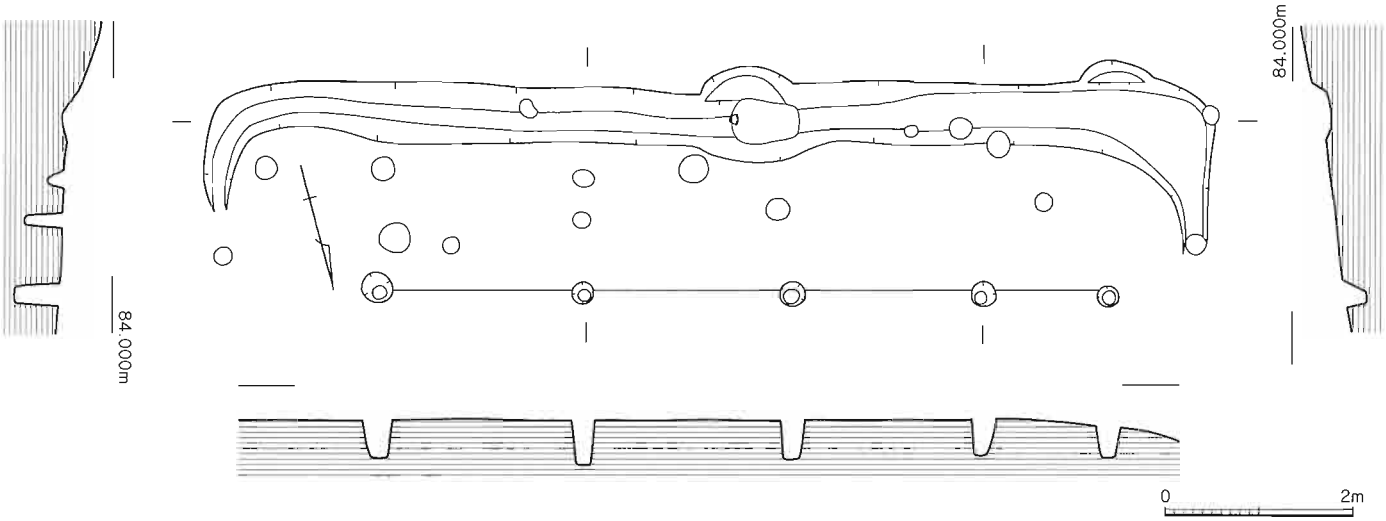
調査区西側で確認された建物で、9号竪穴住居跡を切る。梁間2間（約4.8m）、桁行2間以上（約5.0m＋α）を測る。梁間方向の柱間平均は約2.4m、桁行方向の柱間平均は約2.5mを測る。建物延床面積は約24㎡以上で、建物の軸方位はN-15°-Eである。検出面での柱穴掘り方の規模は35㎝～45㎝を測る。柱穴の深さは30㎝～50㎝を測る。建物柱穴の中からは須恵器や土師器の小破片が出土している。

1号掘立柱建物跡出土遺物（第73図）

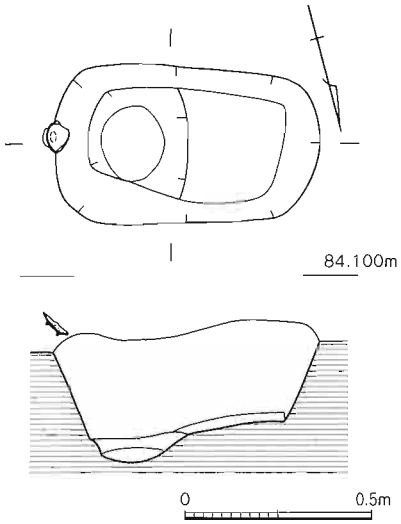
2はP1より出土須恵器杯身。5はP2より出土した黒色土器椀底部片で、高台を欠損する。



第69図　1号掘立柱建物跡実測図（1/80）



第70図　２号掘立柱建物跡・１号溝実測図（1/80）



第71図　1号土坑実測図（1/20）

２号掘立柱建物跡・１号溝（第70図）

調査区南部で確認された。計５個の柱穴が１号溝と平行に直線的に並ぶ。北側はすでに削平されており不明であるが、本来１棟の建物として存在したと推測される。建物の軸方位はN-14°-E、建物の規模は柱穴の端から端までの距離で約7.8mを測り、柱穴の大きさは約25～30㎝、深さは約35～50㎝を測る。１号溝はこの建物の周りを囲っていたと推測され、この柱列から1号溝までの距離は約1.6m、１号溝の東西コーナーまでの距離は約10.7m、溝の幅は約60㎝、深さは約15～20㎝を測り、溝の断面は「U」字状を呈する。溝の中央には1号土坑が存在するが、この土坑の周りについては溝幅が広がっており、同時期に掘り込まれた可能性がある。

また、この溝の中からは鉄滓の他、数点土師器の小破片が出土したが図示できなかった。

１号土坑（第45・71図）

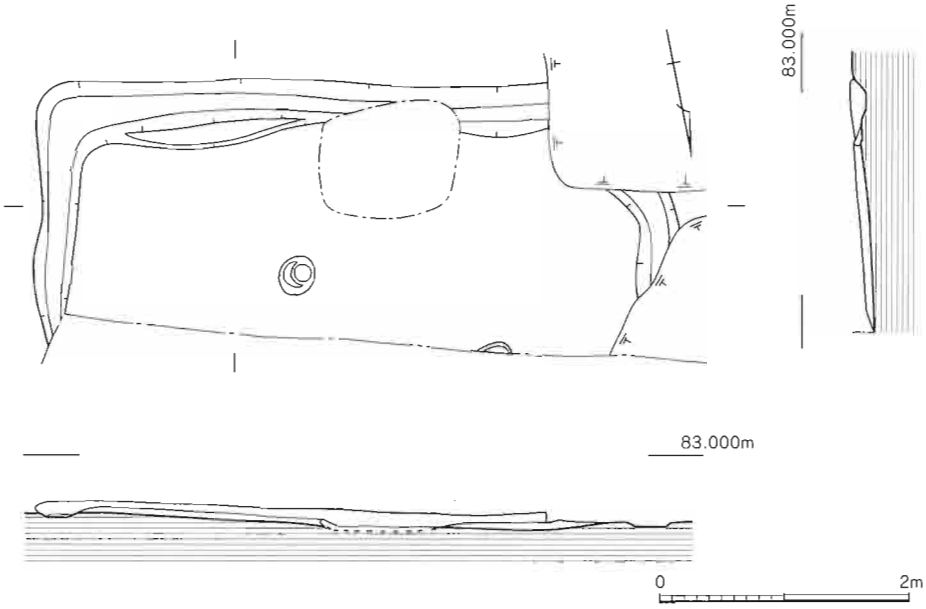
東西軸長約70㎝、南北軸長約40㎝の隅丸長方形プランを呈する。床面はやや東側に向かってわずかに傾斜しており、そこに浅いピットが掘り込まれている。壁面はやや斜め方向に立ち上がる。土坑の上部からは白磁碗が1点出土した。

１号土坑出土遺物（第73図）

６は白磁碗底部である。体部内面には１条沈線が施されている。

２号溝（第45・72図）

調査区北側中央で確認された。当初住居跡の周溝として考えていたが、掘り下げを行った結果、溝幅が広く、また溝の断面が1号溝と同様「U」字状を呈することから、建物の周囲に掘られた溝として取り扱うことにした。溝の東側コーナーはよく残っており、ほぼ直角に屈曲する。また溝の西側は代建物により一部掘削を受け、北側は調査区外に展開する。溝の東西幅は約5.2m、溝幅は

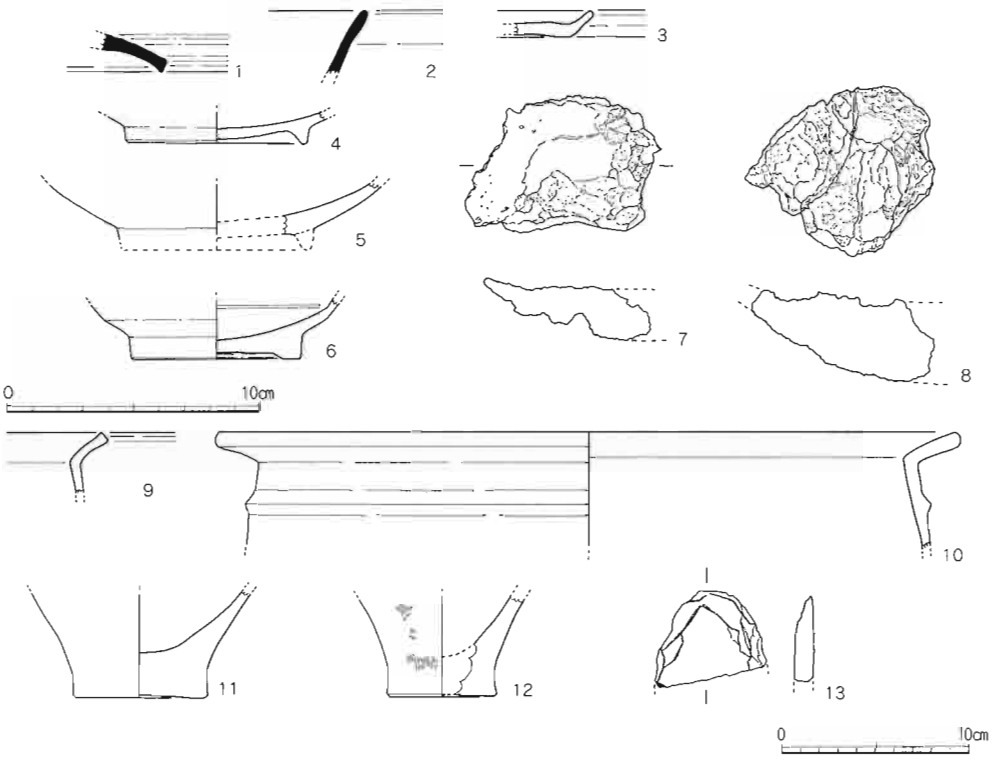


最大で約40㎝、深さは最も深い所で約25㎝を測る。この溝の中からは土師器の小破片が出土したが図示できなかった。

第72図　２号溝実測図（1/60）

柱穴等出土遺物（第73図）

１はＰ10より出土須恵器坏蓋片である。３はＰ４より出土の土師器小皿である。底部糸切りが施される。４はＰ５より出土した黒色土器底部片である。６は1号土坑より出土した白磁碗底部片である。７・８は椀型鍛冶滓である。７は重量22.0ｇ。８は重量44.8ｇを測る。10～13は試掘時に確認された住居跡出土土器である。10・11は口縁部、12・13は底部である。14は調査区内より出土した打製石斧である。残存長5.1㎝、最大幅6.0㎝を測る。



第73図　掘立柱建物跡・柱穴・溝・土坑出土遺物実測図（1/3・1/4）

Ⅲ　調査のまとめ

１．縄文時代の遺構とその時期について

この時期の遺構としては、11号竪穴住居跡が1軒確認された。11号住居跡そのものは小型の円形プランを呈していたが、ここからは１のように波状隆起口縁をもつものや２のように胴部に明瞭な屈曲部を有するもの、９のように口縁平坦面に２本の凹線を巡らすものなど特徴ある土器がみられた。これらの土器の特徴からこの住居跡は御領式土器の範疇に含まれるものと思われる。

２．古墳時代前後の遺構とその時期について

この時期の遺構としては１・４・６・８・９・12号竪穴住居跡があげられる。これらの住居跡から出土した土器をみると、弥生時代の伝統がみられる土器（在地系土器）と、他の地域の影響を受けたとみられる土器（外来系土器）が各住居跡内に混在している状況がみとめられる。また、その中でも外来系土器は、多様な器種が存在していることがうかがえる。このことから、まず住居跡ごとにそれらを分類し、整理することにする。

１号住居跡については、在地系土器として、３の長胴甕頚部片がみられる。外来系土器として、１の甕のように、口縁端部をつまみ上げ、頚部下にヘラ削りが施されるなど布留式土器の特徴むをもつものや、４のように畿内系の長頚壷が共伴していた。４号住居跡については、在地系土器として、２の長胴甕底部がみられ、外来系土器としては、１のような、胴部が大きく膨らむ特徴を持つ、畿内五様式系の甕が共伴していた。６号竪穴住居跡は、在地系土器として１の長胴甕胴部が出土したほか、外来系土器としては、２・５・６・７のような畿内五様式系の甕がみられた他、８・９のよな畿内系の広口壷も共伴している。９号住居跡は、在地系土器として、３・４・10・13・14のような長胴甕や、12のように外来系土器の影響を受けて球状化した甕もみられ、18の複合口縁壷、22の支脚もみられた。外来系土器としては、５が布留式系甕、９・11・15・16が畿内五様式系甕、17が畿内系二重口縁壷、23・24が畿内系小型丸底壷、25～27が庄内式系高杯、33～36が畿内系脚付椀、37～41が畿内系小型特殊器台などがみられた。12号住居跡については、在地系土器として、２の長胴甕や、１のように五様式系の影響を受けた在地系の甕も出土した。

次にこれらの出土遺物からみた竪穴住居跡の先後関係の時期について検討するが、これらの住居跡を比較する上でもっとも数多く出土した器種は甕であり、それを中心に比較を行っていく。在地系の甕を出土した住居跡のうち、４・６・９・12号を比較すると、４号住居跡２や、12号住居跡２はまだ平坦に近いレンズ底を呈するのに対し、９号住居跡14は4・12号に比べ小型化したレンズ底を呈し、また９号13は完全に丸底化している。したがって推移としては、4号、12号は9号より古い時期と判断される。次に五様式系甕を出土した住居跡のうち、６号住居跡５・６・７は、乳房状の小さい平坦な底部がまだ残っているのに対し、９号の16についてはほぼ尖底となっており、６号は９号よりやや古い時期と考えられる。これらをまとめると、４・12号→９号←６号の順となる。次に時期であるが、９号住居跡では、まとまって多量の土器が出土している。この住居跡の時期としては５の甕口縁部がやや内湾する特徴をもっていること、17の二重口縁壷は口縁部が短く外反すること、小型丸底壷は口縁部と胴部の器高の比率があまり差のないことなどから、柳田氏のⅡａ、井上氏の古墳時代前期1式段階に相当すると考えられる。また、６号住居跡は、五様式の

甕底部などから、柳田氏のＩｂ期、井上氏の後期後葉3式に相当し、４・12号住居跡は、在地系甕底部から、柳田氏Ｉａ期、井上氏の後期後葉2式に相当すると考えられる。この他、１号住居跡は、布留式甕の特徴をもっているものの、一方で胴部上位に最大径がみられ、やや肩が張るプロポーションであること、底部はレンズ底が残ること、内面胴部中位下刷毛調整がみられることなど、その中でもやや古い要素がみられることから、柳田氏のＩｂ～IIａ期、井上氏の後期後葉3式から前期1式相当にあてたい。いずれにしても住居跡全体の時期としては、弥生時代終末から古墳時代初頭の範疇に含まれるものである。

３．古代の遺構とその時期について

古代前期の遺構としては、２・５・13号竪穴住居跡があげられる。これらの住居跡からは、器形が復元可能な須恵器がそれぞれから出土した。２号住居跡１は杯蓋端部がしっかりした鳥嘴状を残し、また杯身も大きく、底端部からやや内湾曲気味に立ち上がり、先端部はわずかに外反する特徴を持つ。また、13号住居跡５の坏身も高台は存在しないものの器形が2号のそれに類似し、牛頸窯跡II期（８世紀前半）に相当する。５号住居跡１の蓋端部は丸く収め、わずかに鳥嘴状の形態を残す。２の坏身は、ほぼ直線的に口縁端部まで延びる形態の特徴をもち、牛頸窯跡Ⅳ期（８世紀後半）に相当する。このほか、３号住居跡は２号に切られており、その前段階と考えられる。

古代後期の遺構として、１号土坑や１号掘立柱建物Ｐ２、柱穴Ｐ４、Ｐ５さらには10号竪穴住居跡埋土中と考えられる中から、それぞれ白磁碗や黒色土器、土師器などの遺物が出土した。これらの年代について検討すると、１号土坑出土白磁碗は、器形や底部外面回転ヘラ削り、内面見込み部分に段をもつ、やや緑がかった釉がかりがなされるなど、山本氏の椀ＸＩ類（11世紀前半から中頃）に相当する。また、10号住居埋土中の土師器椀は、深い体部から口縁部は直口気味に延び端部を嘴状に尖らせるタイプで、日田条里上手地区でも参考とした大宰府条坊跡第87次ＳＥ015出土土師器に形態がよく似ており、中島氏のⅢ-２類（10世紀末頃前後）の時期に相当する。Ｐ５の黒色土器は、薄い底部に短い逆三角形の高台がつくタイプで、中島氏のⅢ-４～５類（11世紀前半～後半）相当と推測される。また、２号建物Ｐ２から出土した黒色土器は、傾きから中島氏のⅢ-３・４類と推測され、Ｐ２出土のものより古いとおもわれる。小皿も糸切りが施されるが同様の時期と推測される。以上のように10号竪穴住居、１号溝と２号建物、１号土坑、及び１号建物などの遺構は時期差をもちながらも10世紀末から11世紀後半代までの時期の範疇に収まるものと推測される。

４．遺跡の性格について

以上のように本調査区からは、縄文時代をはじめとする各時代の遺構が検出された。この調査区と同様、この谷の東端にあたる場所に立地する本村遺跡においても、最近の調査により弥生時代後期から古墳時代、古代、中世にかけての遺構群の存在が確認されている。このことから、この谷部一帯には、時期によって地点を変えながらも連続的に集落の造営が行われていたことが推測される。

この中で、とくに注目されるものとして、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡群がある。これらの住居跡からは、先に見てきたようにいずれも在地系土器と畿内系を中心とする外来系土器器種によって構成されている。これまでの調査の中で、吹上遺跡をはじめ三和教田遺

跡や佐寺原遺跡、平島遺跡、後迫遺跡、本村遺跡など日田盆地を代表する弥生時代後期の集落遺跡はいずれも終末期をもってほぼ廃絶されており、それらの大部分の土器は在地系土器群で占められている。唯一古墳時代への集落展開として明らかな遺跡は、小迫辻原遺跡のみである。小迫辻原遺跡は、台地上に終末期になって環濠集落が営まれ、古墳時代に至る過程の中で環溝居館が造営されていることが土器の形式変化などから明らかとなっている。しかし、これらの環濠や環溝の中から出土した土器は外来系器種が主体であり、その性格の特殊性を物語っている。本遺跡は小迫辻原遺跡の程近い立地をしており、時期的にもその範疇の中で収まるものと考えられ、この遺跡との関連性も考えられるところではあるが、小迫辻原遺跡と比較し一般集落ととらえられる本遺跡において、弥生時代集落の古墳時代に至るまでの継続性が在地系土器と外来系土器の混在などからもうかがわれること、これまで古墳時代に突如として外来系土器を主体とする集落が現れるような断続的にしかとらえられなかった集落のあり方が、日常容器の構成の中で外来系土器器種が具体的に集落内において、在地系土器を席巻していく様相がわずかではあるが垣間見られるという点において、古墳時代へ移行していく集落の様子を如実に表している遺跡として評価される。

参考文献

1）柳田康雄「２土師器の編年２九州」『古墳時代の研究6土師器と須恵器』雄山閣 1991

2）井上裕弘「北部九州における古墳出現期前後の土器群とその背景」『児島隆人先生喜寿記念論集古文化論叢』児島隆人先生喜寿記念論集1991

3）土居和幸・田中裕介「最古の居館・小迫辻原遺跡」『風土記の考古学4』同成社 1995

4）田中裕介編『小迫辻原遺跡ⅠA・B・C・D編』九州横断自動車道関係発掘調査報告書(10)大分県教育委員会 1999

5）森田勉・池辺元明他編『牛頸窯跡群Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第87集福岡県教育委員会 1988

6）中島恒次郎「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』日本中世土器研究会 1992

第４表　尾部田遺跡出土土器観察表（１）

挿図番号	遺物番号	遺構名	種別	器種	法量（　）は復元径(cm) 器高	口径	底径	胎土 石英／A・長石／B・角閃石／C・金雲母／D 赤色粒／E・白色粒／F・細砂粒／G	色調	備考
第48図	1	1号竪穴住居	土師器	甕	24.1	16.8	2.2	A．B．C．E	淡灰褐色	
第48図	2	1号竪穴住居	土師器	甕				A．B．C．E	淡灰褐色	
第48図	3	1号竪穴住居	土師器	甕				A．B．C．E	淡白色	
第48図	4	1号竪穴住居	土師器	長頸壺		(14.0)		A．B．C．E	淡黄褐色	
第51図	1	2号竪穴住居	須恵器	坏蓋		(12.8)		A．F	暗青灰色	
第51図	2	2号竪穴住居	須恵器	坏身	4.4	13.3	9.4	A	暗青灰色	
第51図	3	2号竪穴住居	須恵器	皿	2.5	18.0	15.6	A．F	灰白色	
第51図	4	2号竪穴住居	須恵器	堤瓶				A．F	灰白色	
第51図	5	3号竪穴住居	土師器	甕				A．B．C．E	赤茶褐色	
第53図	1	4号竪穴住居	土師器	甕				A．B．C．E	淡灰褐色	
第53図	2	4号竪穴住居	土師器	甕			(4.0)	A．B．C．E	淡黄灰色	
第53図	3	4号竪穴住居	土師器	紡錘車	3.5	(4.1)		A．B．F	灰白色	
第55図	1	5号竪穴住居	須恵器	坏蓋				A．F	灰褐色	
第55図	2	5号竪穴住居	須恵器	坏身				A	淡灰色	
第55図	3	5号竪穴住居	土師器	坏身	2.5	10.8	6.8	A	淡茶褐色	
第55図	4	5号竪穴住居	須恵器	高坏			(10.4)		暗灰色	
第55図	5	5号竪穴住居	須恵器	皿		(16.1)	(13.2)	A．F	淡灰色	
第55図	6	5号竪穴住居	土師器	甕		(16.4)		A．B．C．E（あらい）	淡灰褐色	
第57図	1	6号竪穴住居	土師器	甕	15.6			A．B．C．E（あらい）	淡黄茶色	
第57図	2	6号竪穴住居	土師器	甕		(12.6)		A．B．C．E	淡灰白色	
第57図	3	6号竪穴住居	土師器	甕		(16.4)		A．B．C．E	淡黄灰色	
第57図	4	6号竪穴住居	土師器	甕			(5.0)	A．B．C．E	淡灰褐色	
第57図	5	6号竪穴住居	土師器	甕			(6.6)	A．B．C．E	淡茶灰色	
第57図	6	6号竪穴住居	土師器	甕			(3.4)	A．B．C	淡黄灰色	
第57図	7	6号竪穴住居	土師器	甕			(3.0)	A．B．C．E	淡灰褐色	
第57図	8	6号竪穴住居	土師器	壺		(13.0)		A．B．C．E	淡灰褐色	
第57図	9	6号竪穴住居	土師器	壺		(13.6)		A．B．C．E	淡灰褐色	
第57図	10	6号竪穴住居	土師器	壺				A．B．C．E	淡灰褐色	
第57図	11	6号竪穴住居	土師器	鉢				A．B．C	淡灰褐色	
第57図	12	6号竪穴住居	土師器	鉢		(12.4)		A．B．C	淡灰褐色	
第57図	13	6号竪穴住居	土師器	椀	2.7	(8.4)		A．B．C	淡灰白色	
第60図	1	8号竪穴住居	土師器	脚付鉢				A．B．C．E	淡黄茶色	
第60図	2	8号竪穴住居	土師器	脚付鉢			(7.4)	A．B．C．E	淡黄褐色	
第60図	3	8号竪穴住居	土師器	埦	2.1	(7.7)		A．B．C．E	淡茶灰色	
第60図	4	8号竪穴住居	土師器	埦		(12.4)		A．B．C．E	淡黄灰色	
第60図	5	8号竪穴住居	土師器	埦	5.5	(17.8)		A．B．C．E	淡茶褐色	
第62図	1	9号竪穴住居	土師器	甕		(15.2)		A．B．C．E	淡黄灰色	
第62図	2	9号竪穴住居	土師器	甕		(12.0)		A．B．C．E	淡灰褐色	
第62図	3	9号竪穴住居	土師器	甕		(14.4)		A．B．C．E	淡黄灰色	
第62図	4	9号竪穴住居	土師器	甕		(14.2)		A．B．C．E	淡白色	
第62図	5	9号竪穴住居	土師器	甕		(16.6)		A．D	淡黄灰色	
第62図	6	9号竪穴住居	土師器	甕		(14.8)		A．D．E	淡黄褐色	
第62図	7	9号竪穴住居	土師器	甕				A．B．C	淡褐色	
第62図	8	9号竪穴住居	土師器	甕				A．B．C．E	淡灰褐色	
第62図	9	9号竪穴住居	土師器	甕				A．B．C．E	淡褐色	
第62図	10	9号竪穴住居	土師器	甕		(15.4)		A．B．C．E	黄茶色	
第62図	11	9号竪穴住居	土師器	甕				A．B．C．E	淡黄褐色	
第62図	12	9号竪穴住居	土師器	甕			12.8	A．B．C．E	淡黄褐色	
第62図	13	9号竪穴住居	土師器	甕				A．B．C	淡黄灰色	
第62図	14	9号竪穴住居	土師器	甕			4.6	A．B．C	茶褐色	
第62図	15	9号竪穴住居	土師器	甕			4.9	A．B．C．E	淡灰褐色	
第62図	16	9号竪穴住居	土師器	甕			2.2	A．B．C．E	淡黄褐色	
第62図	17	9号竪穴住居	土師器	壺				A．B．C．E	淡黄灰色	
第62図	18	9号竪穴住居	土師器	壺				A．B．C．E	淡灰褐色	
第62図	19	9号竪穴住居	土師器	壺				A．B．C．E	淡褐色	
第62図	20	9号竪穴住居	土師器	壺		(12.6)		A．B．D	淡橙褐色	
第62図	21	9号竪穴住居	土師器	壺		(14.8)		A．B．C．E	淡褐色	
第62図	22	9号竪穴住居	土師器	壺		(13.7)		A．B．C．E	淡灰褐色	
第62図	23	9号竪穴住居	土師器	小型丸底壺	8.1	13.2		A．B．C	淡灰褐色	

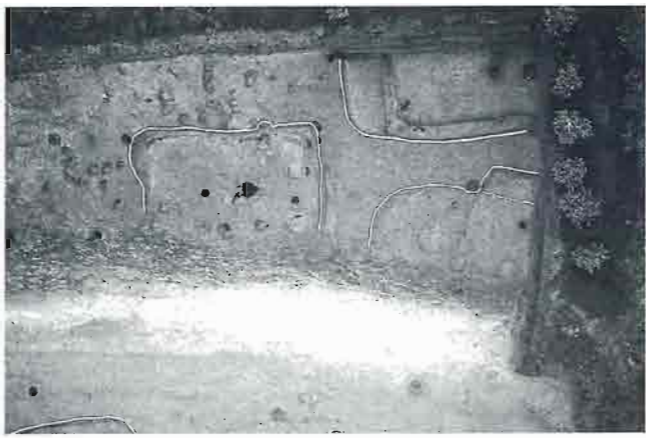
第４表　尾部田遺跡出土土器観察表（２）

挿図番号	遺物番号	遺構名	種別	器種	法量（　）は復元径(cm) 器高	口径	底径	胎土 石英／A・長石／B・角閃石／C・金雲母／D 赤色粒／E・白色粒／F・細砂粒／G	色調	備考
第62図	24	９号竪穴住居	土師器	小型丸底壺		(12.4)		A．B．C．E	淡黄褐色	
第62図	25	９号竪穴住居	土師器	高坏		(20.4)		A．B．C．E	淡黄褐色	
第62図	26	９号竪穴住居	土師器	高坏				A．B．C．E	淡白色	
第62図	27	９号竪穴住居	土師器	高坏				A．B．C．E	淡黄褐色	
第62図	28	９号竪穴住居	土師器	脚付鉢		(8.8)		A．B．C．E	淡黒褐色	
第62図	29	９号竪穴住居	土師器	脚付鉢			(9.0)	A．B．C	茶褐色	
第62図	30	９号竪穴住居	土師器	鉢				A．B．C	淡灰褐色	
第62図	31	９号竪穴住居	土師器	鉢			2.6	A．B．E	淡褐色	
第62図	32	９号竪穴住居	土師器	支脚				A．B．C．E	淡黄灰色	
第63図	33	９号竪穴住居	土師器	脚付碗		10.8		A．B．C	淡黄灰色	
第63図	34	９号竪穴住居	土師器	脚付碗			(10.8)	A．B．C．E	淡黄褐色	
第63図	35	９号竪穴住居	土師器	脚付碗				A．B．C	淡灰褐色	
第63図	36	９号竪穴住居	土師器	脚付碗				A．B．C．E	灰黄灰色	
第63図	37	９号竪穴住居	土師器	特殊器台	7.4	7.0	8.8	A．B．C．E	暗灰白色	
第63図	38	９号竪穴住居	土師器	特殊器台		10.5		A．B．C．E	淡灰白色	
第63図	39	９号竪穴住居	土師器	特殊器台		9.0		A．B．C．E	淡茶褐色	
第63図	40	９号竪穴住居	土師器	特殊器台			(8.6)	A．B．C．E	淡黄灰色	
第63図	41	９号竪穴住居	土師器	特殊器台			(10.0)	A．B．C．E	淡黄白色	
第63図	42	９号竪穴住居	土師器	碗		10.2		A．B．C．E	淡灰白色	
第63図	43	９号竪穴住居	土師器	碗		22.4		A．B．C．E	黄白色	
第63図	44	９号竪穴住居	土師器	碗	4.1	10.0	2.4	A．B．C．E	淡褐色	
第63図	45	９号竪穴住居	土師器	碗	5.8	10.0	4.6	A．B．C．E	淡黄褐色	
第63図	46	９号竪穴住居	土師器	碗	5.1	9.8	3.2	A．B．C	淡黒灰色	
第63図	47	９号竪穴住居	土師器	碗		13.0		A．B．C	淡黄灰色	
第63図	48	９号竪穴住居	土師器	手捏土器	2.2	7.3		A．B．C	淡茶褐色	
第63図	49	９号竪穴住居	土師器	手捏土器	3.0	11.8		A．B．C	淡黒褐色	
第63図	50	９号竪穴住居	土師器	手捏土器		7.2		A．B．C	淡灰褐色	
第63図	51	９号竪穴住居	土師器	手捏土器		7.8	4.3	A．B．C．E	淡灰褐色	
第63図	52	９号竪穴住居	土師器	手捏土器				A．B．C	淡灰褐色	
第63図	54	10号竪穴住居	黒色土器	椀		(16.4)		A	淡黒色	
第65図	1	11号竪穴住居	縄文土器	鉢(精製)		(24.0)		A．B．C	暗黄褐色、下半は黒褐色	
第65図	2	11号竪穴住居	縄文土器	深鉢(精製)				A．B	淡黄褐色	
第65図	3	11号竪穴住居	縄文土器	深鉢(精製)				A．B．C	暗赤褐色	
第65図	4	11号竪穴住居	縄文土器	深鉢(精製)		(34.4)		B．C	淡黄褐色	
第65図	5	11号竪穴住居	縄文土器	深鉢		(25.0)		A．B．C	暗赤褐色	
第65図	6	11号竪穴住居	縄文土器	鉢(粗製)				A．B	褐色	
第65図	7	11号竪穴住居	縄文土器	深鉢(粗製)				A．B．D	淡黄褐色	
第65図	8	11号竪穴住居	縄文土器	浅鉢				A．B	淡赤褐色	
第65図	9	11号竪穴住居	縄文土器	浅鉢(粗製)				A．B．C	淡黄褐色	
第65図	10	11号竪穴住居	縄文土器	深鉢			7.0	A．B．C	暗褐色	
第65図	11	11号竪穴住居	縄文土器	深鉢			8.5	A．B．C	淡黄褐色	
第65図	12	11号竪穴住居	縄文土器	深鉢				A．B．C	淡赤褐色	
第68図	1	12号竪穴住居	土師器	甕		16.5		A．B．C．E	淡褐色	
第68図	2	12号竪穴住居	土師器	甕			6.2	A．B．C．E	淡褐色	
第68図	3	12号竪穴住居	土師器	甑				A．B．C．E	淡黄灰色	
第68図	5	13号竪穴住居	須恵器	坏身	4.7	12.6	8.6	A．F	淡青灰色	
第68図	6	13号竪穴住居	土師器	甑				A	淡黄灰色	
第73図	1	柱元Ｐ10	須恵器	坏蓋				A	紫褐色	
第73図	2	柱元Ｐ１	須恵器	坏身				A	淡灰色	
第73図	3	柱元Ｐ４	土師器	小皿				A．E	淡茶褐色	
第73図	4	柱元Ｐ５	黒色土器	椀			(7.4)	A	淡黒灰色	
第73図	5	柱元Ｐ２	黒色土器	椀				A	淡黒灰色	
第73図	6	１号土坑	白磁	碗			(6.8)		淡灰白色	
第73図	9	試掘竪穴住居	弥生土器	甕				A．B．C．E	淡黄灰色	
第73図	10	試掘竪穴住居	弥生土器	甕			(39.6)	A．B．C．E	淡黄灰色	
第73図	11	試掘竪穴住居	弥生土器	甕			(7.3)	A．B．C．E	淡灰褐色	
第73図	12	試掘竪穴住居	弥生土器	甕			(5.6)	A．B．C．E	淡茶褐色	

尾部田遺跡全景（真上より）

尾部田遺跡全景（東方向より）

図版12



調査区西側住居跡群（真上より）

調査区中央住居跡群（真上より）

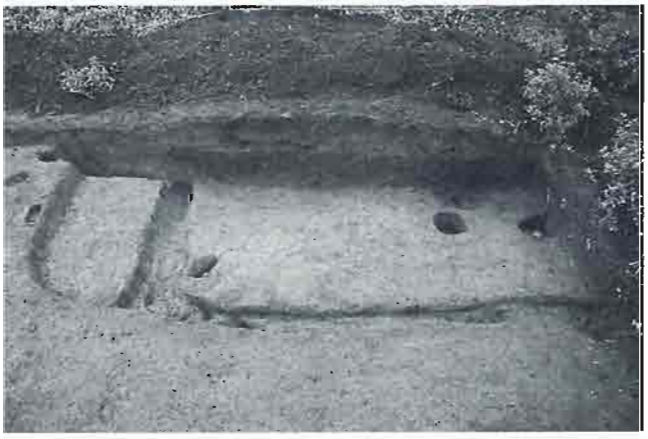
１号竪穴住居跡

１号住居跡内付設土坑遺物出土状況

２・３号竪穴住居跡

２号竪穴住居跡カマド

２号竪穴住居跡カマド内土層堆積状況

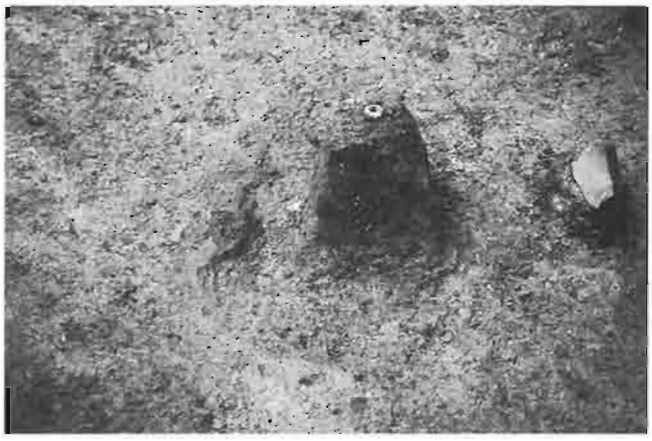


４号竪穴住居跡

４号竪穴住居跡

５・６号竪穴住居跡

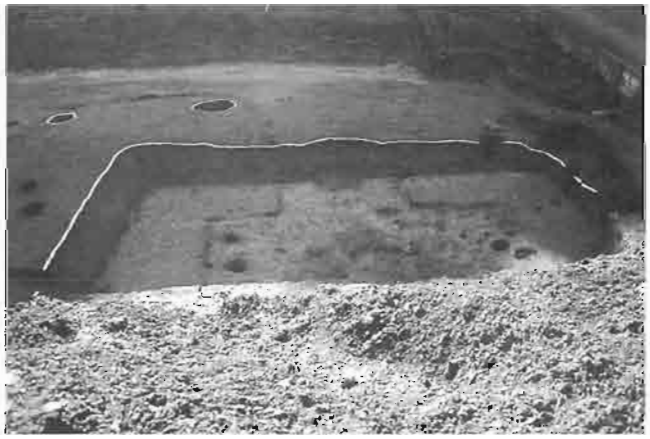
６号竪穴住居跡



５・６号住居跡内遺物出土状況

８号竪穴住居跡

９号竪穴住居跡



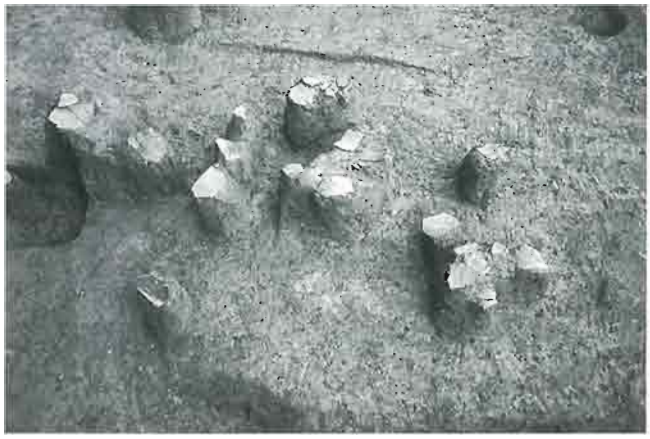
９号竪穴住居跡

９号住居跡内遺物出土状況

図版14

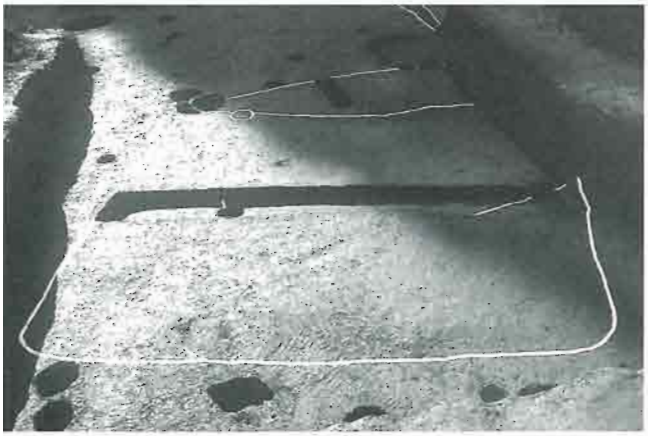
9号住居跡内遺物出土状況

11号竪穴住居跡



11号住居跡遺物出土状況

11号住居跡遺物出土状況

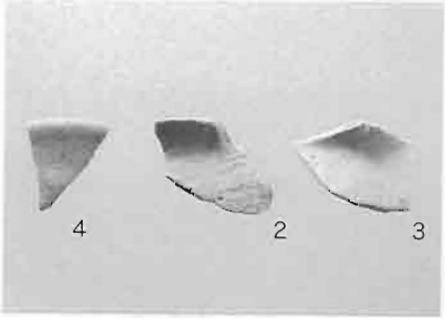


12・13号竪穴住居

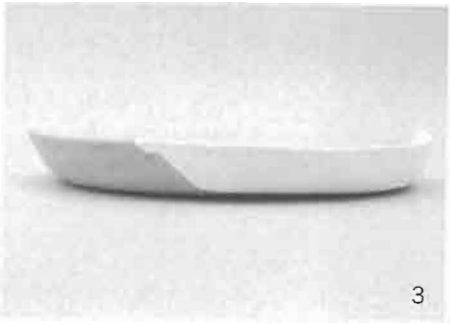
1　号　溝

1号土坑

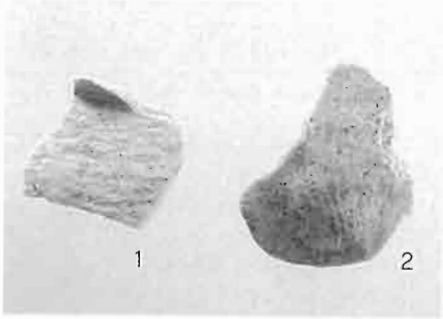
2　号　溝

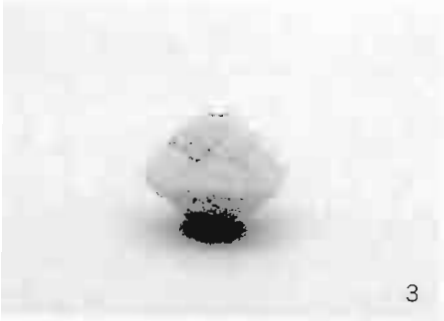


1号住居跡出土遺物

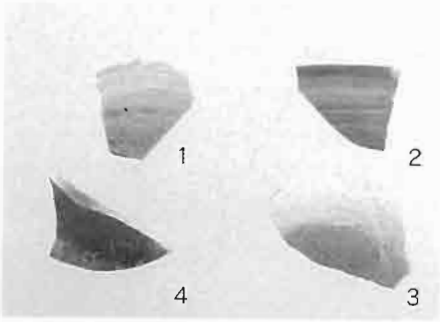


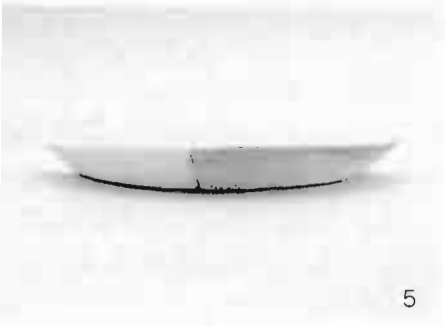
2・3号住居跡出土遺物
1～4　2号住居跡
5　　3号住居跡





4号住居跡出土遺物

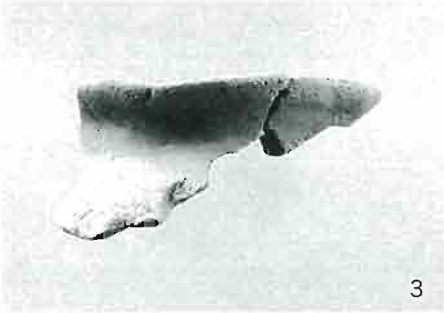




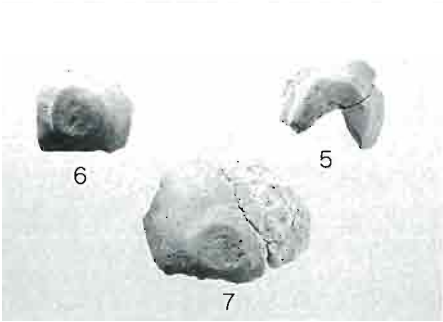
5号住居跡出土遺物

図版16

2


3

4



8

9

12

13

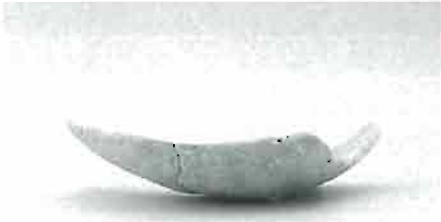
14

6号住居跡出土遺物

1

2

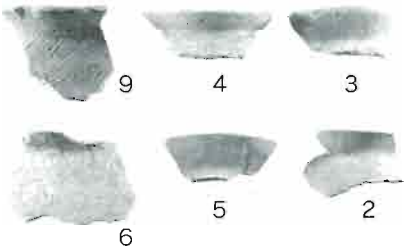
3


4

5

1

8号住居跡出土遺物

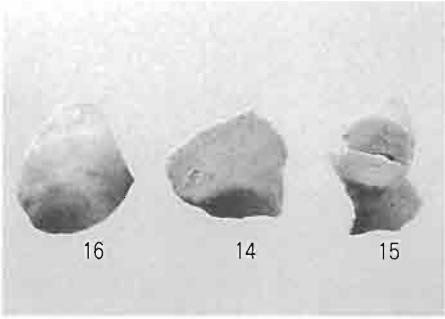


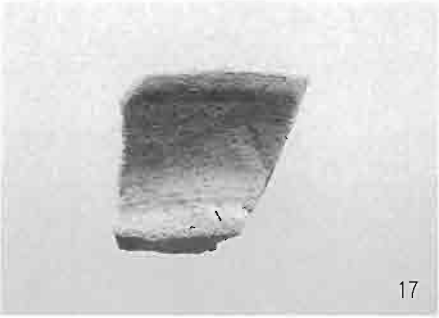
10

11

12

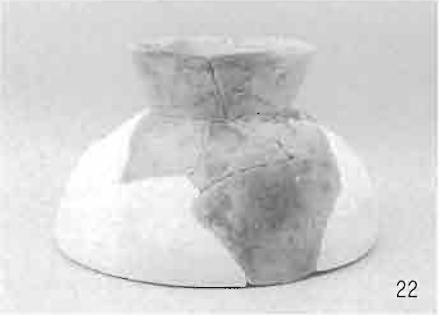
13


16 14 15


17

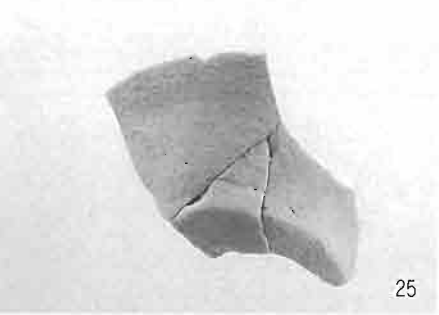
18

2

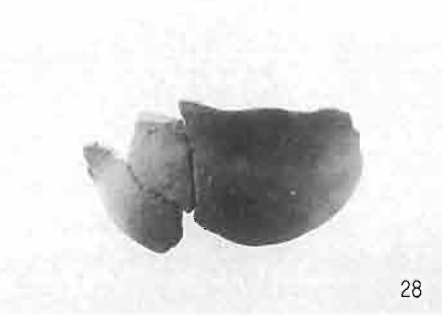

22

23

24


25

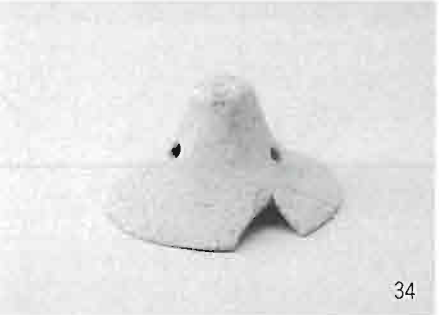
27

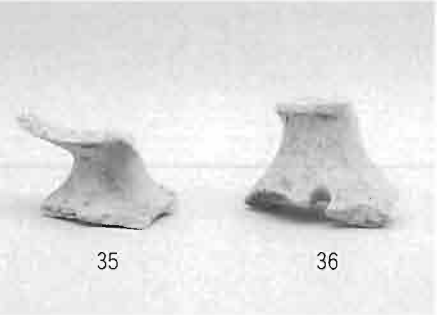

28

29

32

33


34


35 36

37

図版18

38

39

40

41

44

46

47

48 49

51

52

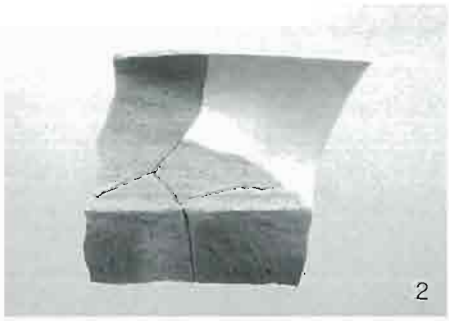
53

54

55

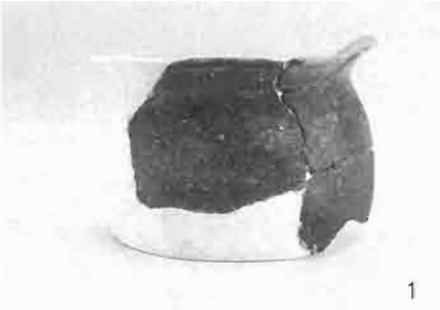
1～53　9号住居跡出土遺物
54・55　10号住居跡出土遺物

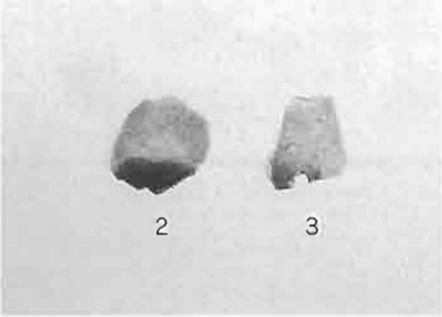
1

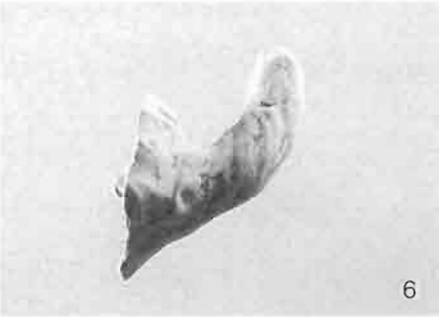

2

10

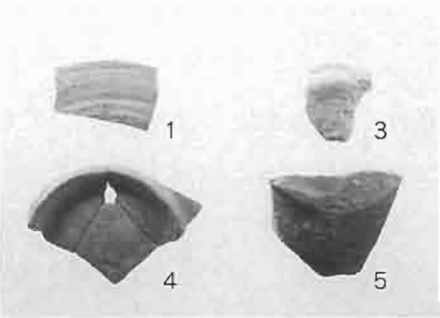
11号竪穴住居跡



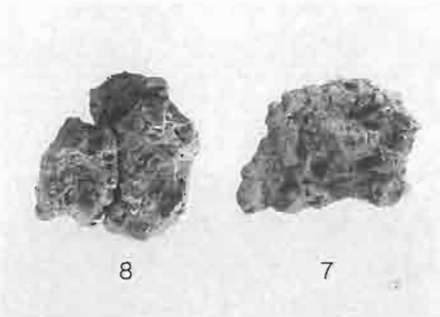




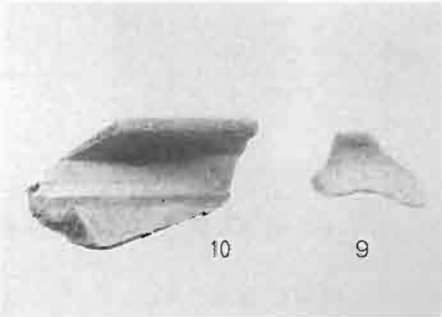
1～3　12号竪穴住居跡出土遺物
4・5　13号竪穴住居跡出土遺物

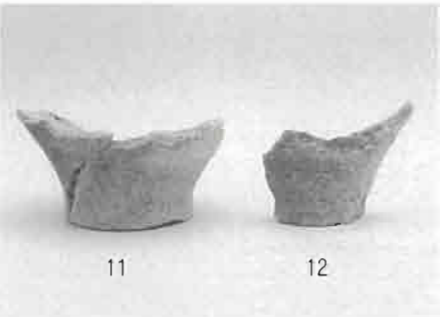


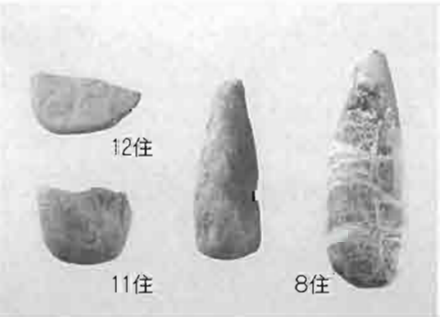
1～4　柱穴出土遺物
5　　1号土坑出土遺物



1号溝出土遺物







調査区出土石器

報 告 書 抄 録

ふりがな	おべたいせき
書名	尾部田遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第34集
編著者名	行時志郎
編集機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601　日田市田島2-6-1
発行年月日	2001年12月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
おべたいせき 尾部田遺跡	おおいたけんひたし 大分県日田市 おおあざおざこあざ 大字小迫字 おべた 尾部田808-1					20001205 ～20001225	700	宅地造成

所要遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
おべたいせき 尾部田遺跡		縄文時代	竪穴住居跡　1軒	縄文土器・石器	
		弥生時代 ～古墳時代	竪穴住居跡　7軒	弥生土器・石器	
		古代	溝　2条 竪穴住居跡　5軒 掘立柱建物　2棟 土坑　1基	土師器・須恵器	

日田条里上手地区Ⅲ
高瀬条里永平寺地区
尾部田遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書
第34集
平成13年12月28日

発行　日田市教育委員会
大分県日田市田島2-6-1
印刷　尾花印刷有限会社
大分県日田市田島本町8-8

日田条里上手地区Ⅲ・高瀬条里永平寺地区・尾部田遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第34集

2001年　日田市教育委員会